パウロの
ヘブル人への手紙

https://ichthys.com/Hebrews-chapter4.htm

ロバート・D・ルギンビル博士著

第 4 章

真の安息日、御言葉、そして私たちの新しい大祭司



I. 序論

第 4 章は、大きく三つの部分に分けることができます。教会時代における真の安息日についてのパウロの説明と、それに入るよう私たちを励ます勧め（出エジプトの世代が入らなかったのと対比して）（1-10 節）；あらゆる偽善と誤った動機を暴き出す神の御言葉の力（11-13 節）；この世での私たちの失敗にもかかわらず、私たちのために執り成してくださる新しい大祭司による信徒への励まし（14-16 節）。

安息日： 第四戒は、モーセ五書において次のように示されています。

> (8)「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。(9) 六日の間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。(10) しかし、第七日は、あなたの神、主の安息日である。あなたは、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、あなたの息子も、娘も、男奴隷も、女奴隷も、家畜も、あなたの門の内にいる寄留者もである。(11) 主は六日の間に、天と地と海、およびその中にあるすべてのものを造り、第七日に休まれた。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なる日とされた。」（出エジプト記 20 章 8-11 節/NKJV 訳）

> (12)「安息日を守って、これを聖なる日とせよ。あなたの神、主があなたに命じられたとおりである。(13) 六日の間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。(14) しかし、第七日は、あなたの神、主の安息日である。あなたは、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、あなたの息子も、娘も、男奴隷も、女奴隷も、牛も、ろばも、その他どの家畜も、あなたの門の内にいる寄留者もである。そうすれば、あなたの男奴隷も女奴隷も、あなたと同じように休むことができる。(15) あなたは、かつてエジプトの地で奴隷であったこと、そして、あなたの神、主が力強い御手と伸ばされた御腕をもって、あなたをそこから導き出されたことを覚えなければならない。それゆえ、あなたの神、主は、あなたに安息日を守るよう命じられたのである。」（申命記 5 章 12-15 節/NKJV 訳）

他の十戒はすべて、信者の行動に対して、いつでもどの時代にも容易に適用できます。しかし第四戒に関するこれらの引用全文が明らかにしているように、この戒めだけはモーセの律法との関係を抜きにして理解することは不可能です（たとえば、私たちには休ませるべき奴隷はいませんし、私たちはエジプトから導き出されたわけでもありません――それはイスラエルに限られたことでした）。別の言い方をすれば（しかもこれはきわめて重要な点ですが）、律法がすでに廃された今、この戒めを律法時代と同じ仕

方で守ろうとすることは不可能であるばかりか、誤りでもあります。

しばしば指摘されることですが、十戒のうち第四戒だけは、新約聖書のどこにも「文字どおり守るべきもの」として繰り返されてはいません。実際、主がその公生涯において宗教的権力者たちから受けた反発の多くは、まさに主が「安息日を破っている」と彼らにみなされたことに起因していました。――もっとも、それは彼らが律法主義的な解釈によって誤って理解していた「安息日」にすぎませんでした（マタイ 12 章 1-8 節; マルコ 2 章 22-28 節, 3 章 1-6 節; ルカ 6 章 1-11 節, 13 章 10-17 節, 14 章 1-6 節; ヨハネ 5 章 1-15 節, 7 章 21-24 節）。

> (9)そこを去って、イエスは彼らの会堂に入られた。(10) すると、片手のなえた人がそこにいた。彼らはイエスを訴える口実を得ようとして、「安息日にいやすことは律法にかなっているでしょうか」と尋ねた。(11) イエスは彼らに言われた。「あなたがたのうち、羊を一匹持っている者がいて、その羊が安息日に穴に落ちたなら、それをつかんで引き上げない者がいるだろうか。(12) 人は羊よりも、はるかに尊いではないか。それなら、安息日に善を行うことは律法にかなっている。」(13) それから、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。すると、その人が手を伸ばすと、その手はもう一方の手と同じように完全に治った。(14) すると、パリサイ人たちは出て行き、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した。（マタイ 12 章 9-14 節/NIV 訳）

> (16)イエスが安息日にこれらのことをしておられたので、ユダヤ人の指導者たちはイエスを迫害し始めた。(17)イエスは彼らに答えて言われた。「わたしの父は今に至るまで働いておられる。だから、わたしも働いているのである。」(18) このため、ユダヤ人たちはますますイエスを殺そうとした。イエスが安息日を破っているだけでなく、神をご自分の父と呼び、ご自分を神と等しい者としておられたからである。（ヨハネ 5 章 16-18 節/NIV 訳）

安息日の本来の目的は、儀式的な律法主義にあったのでは**ありません**。むしろこの日は、休息を与えるためのものであり、そして非常に重要なこととして、当時の状況の中で共に集まり、神の御言葉が語られ教えられるのを聞くための時間と機会を提供することにありました。

> 彼らはカペナウムに着いた。そして、安息日になると、イエスは会堂に入って教え始められた。（マルコ 1 章 21 節/NIV 訳）

そして、安息日になったので、会堂で教えはじめられた。それを聞いた多くの人々は、驚いて言った。(マルコ 6 章 2 節/NIV 訳)

それからイエスは、ご自分が育ったナザレに来られた。そして、いつもしておられたとおり、安息日に会堂に入り、聖書を朗読するために立ち上がられた。(ルカ 4 章 16 節/NKJV 訳)

それからイエスは、ガリラヤの町カペナウムに下って行かれた。そして、安息日に人々を教えておられた。(ルカ 4 章 31 節/NKJV 訳)

また別の安息日に、イエスは会堂に入り、教えておられた。(ルカ 6 章 6 節/NKJV 訳)

そこでパウロは、いつものとおり彼らのところへ入り、三回の安息日にわたって、聖書に基づいて彼らと論じた。(使徒行伝 17 章 2 節/NKJV 訳)

しかし、聖霊という賜物がすべてを一変させました。もはや御言葉の分配(伝達)は、特定の一つの民に限定されるものではありません。今やキリストのからだ全体――ユダヤ人だけでなく異邦人も含めて――が特別な賜物を与えられ、真理を広めるためのそれぞれ固有の役割を担うようになったのです。また、聖書はもはやモーセの律法の儀式や慣習に付随する補助的なものではなくなりました。新約聖書がまさに形成されつつあり(しかもこの時点でエルサレムではその大部分がすでに入手可能でした)、旧約におけるあらゆる奥義が明らかにされ、すべての「影」は受肉された神の御子のまばゆい光の中で照らし出されたのです。さらに、霊性や聖別はもはや律法の実践と結びつけられるものではありませんでした(そもそも本質的にそうであったわけでもありませんが)。いまや霊的実体が儀式的な「影」に取って代わったのです。したがって、その影へと立ち戻ることは、(それらが以前ほのめかしていたにすぎなかった、)今や啓示された真理を拒むことにほかなりません。なぜなら、それらの奥義が完全に啓示されるのは、ただイエス・キリストの到来においてのみ可能だったからです。

私がこの[教会の]奉仕者となっているのは、あなたがたに[真理を]分け与えるために私に与えられた神の務めにしたがい、神のご計画(直訳「みことば」ギリシヤ語でロゴス)を完成させるためである。すなわち、永遠の昔から、また過去の諸世代から**隠されていた奥義**[を明らかにすること]であり、今やそれは神の聖なる者たち(すなわち信者たち)に**示されている**のである。神は、この栄光に満ちた**奥義**が異邦人に関してどれほど豊かなものであるかを、彼らに知らせることを望

まれたのである。それはすなわち、キリスト――栄光の望みである方――があなたがたのうちにおられる、ということである。（コロサイ 1 章 25-27 節/NIV 訳）

旧約聖書は今なおきわめて大きな価値を持っています（例：ローマ 15 章 4 節；第一テモテ 1 章 8 節）。しかしその価値は、そこに含まれている霊的真理にあります。そうした真理は、今や新約によって説明され、解き明かされるようになっており、その意味については、当時それを書いた人々でさえ、ただ推し量ることしかできなかったものです（第一ペテロ 1 章 10-12 節）。

(9)それゆえ、神の民のためには、なお一つの「安息日の休み」が**残されている**のである。(10)なぜなら、神の［その］安息に入った者は、神が御自身のわざをやめられたのと同じように、自分のわざをやめたからである。(11)だから私たちは、だれもあの不従順の同じ型（すなわち出エジプトの世代が示したもの）にならって［恵みから］落ちることのないように、その［継続的で霊的な］安息に入るよう熱心に努めようではないか。（ヘブル 4 章 9-11 節/NIV 訳）

十字架によって、第四戒もまた、影の領域から、肉となって来られ世に現された神の御子のまばゆい光の中へと移されたのです。もはや、文字どおりの「七日目」の制度は必要でもなく、有益でも助けにもならなくなりました。教会が大きく拡大していくこの時代の目的のために、異邦人世界全体が福音宣教の対象となろうとしていたからです。土曜日に肉体労働を文字どおり差し控えることを求めるなら、律法全体の採用なしには現実的に成り立たず、しかもそれは霊的成長にとって忌むべきものとなってしまいます（後の時代にこの規定を誤って適用しようとした事例が示しているとおりです）。週に一日ではなく、イエス・キリストを信じる者たちは今や、**つねに**自分の肉的なわざを差し控えるよう召されています。すなわち、自分自身にではなく、主にあって休み、主を信頼し、主に拠り頼むことによって生きるよう召されているのです。

なぜなら、神の安息にはいった者は、神がみわざをやめて休まれたように、自分もわざを休んだからである。（ヘブル 4 章 10 節）

今日の信者は、「それ」が何であれ、神がそれを成し遂げてくださると信頼します。それは、決して怠惰になったり、手を抜いたりすることではありません。むしろ、万物を支配しておられるのがどなたであるかを認識し、肉の力によって神のために何かをしようと努めるのではなく――たとえば、律法を守ろうと努めるようなことではなく――神が私たちのために働いてくださることに絶えず平安を保つことなのです。

それでは、もう一度尋ねよう。神があなたがたに御霊を与え、あなたがたの間で奇跡を行われるのは、律法の行いによるのか、それとも、あなたがたが聞いたことを信じたことによるのか。(ガラテヤ 3 章 5 節/NIV 訳)

この平安、この神にある安息こそ、真の安息日遵守の中心に常にあったものです。そして今や、文字のディスペンセーション(時代)は御霊のディスペンセーション(時代)に取って代わられたので、この平安と安息は、もはや週に一日だけ、儀式的・肉体的な形で与えられるものではなく、すべての信者に対して、いつでも、生きた霊的な形で与えられるようになっています。私たちは、その霊的な安息に入るよう召されているのです。

だから私たちは、だれも、あの[出エジプトの世代が示した]不従順と同じ道をたどって[恵みから]落ちることのないように、その[継続的で霊的な]安息に入るよう熱心に努めようではないか。(ヘブル 4 章 11 節/NIV 訳)

このパウロの言葉は、ヘブル人への手紙の中で、ここまでに彼が述べてきた中でも、最も議論を呼ぶ可能性の高いものだったに違いありません。というのも、そのすぐ近くの文脈で、パウロは、律法における第七日の礼拝と、信者が常に入るよう努め、またその中にとどまるべき、この「信仰による安息」とを、意図的に対比していると説明しているからです。この言葉が議論を呼ぶのは、注意深く耳を傾け、これらの言葉が必然的に導く結論を理解する者にとって、第四の戒めを成就する全時間的な霊的安息に入ることと、文字どおり土曜日に安息日を守ることとは、少なからず両立しないことを示唆しているからです。それにもかかわらず、その一連の儀式は律法の土台の一部と考えられていました(例:ネヘミヤ 9 章 14 節, 10 章 31 節, 13 章 15-22 節)。[1] パウロは、ここではまだ、その避けられない結論を明確に引き出してはいません。聞いている人々

[1] この主張、すなわち、瞬間瞬間の安息日の必要だけでなく、特定の日を聖別することを放棄すべきであるという主張を伝えることが、いかに慎重さを要するものであったかは、容易に理解できます。というのも、この種の律法主義的な考え方は、初めから目に見える教会全体に深く浸透してきたのであり、そしてそのような考え方は今日においても続いていて、大多数の生ぬるい信者たちは、日曜日(あるいは土曜日)を守ることが何らかの意味で重要であると考えているからです。しかし、このことは、使徒たちの時代に異邦人の間で福音が広く受け入れられるうえで助けにはなりませんでした。というのも、ローマ帝国のもとでは、まだ「週」という区分は存在せず、あったのは「月」だけだったからです。月の区分は「市場が開かれる日」に基づいて設けられていましたが、それも地域ごとに異なっていました。おそらく、異教の祭日は、信者たちが集まる最もよい機会を提供していたことでしょう。異邦人が七日から成る一週間という制度や、どの日が土曜日、すなわち安息日であるかを知ることができた唯一の方法は、律法と、それをエルサレムで祭司やレビ人たちが執り行い、ユダヤ人の会堂を通して広めていたその運営を通してでした。「週」が時間を区切る基本単位となったのは、四世紀にキリスト教が国教として確立されてからのことです。

に引き続き耳を傾けてもらいたいという強い思いから、彼はむしろ、このような証拠を豊富に積み重ねることによって、やがて旧い契約が新しい契約に取って代わられることを彼らが受け入れやすくなるようにし、それを一歩ずつ進めているのです。

> (9)しかし今、あなたがたは神を知るようになったのに、いや、むしろ神に知られているのに、どうして再び、あの弱く貧弱な初歩の教えに逆もどりして、またもや、再びその奴隷になろうとするのか。(10)**あなたがたは、日**や月や季節や年など**を守っている。**(11)わたしは、あなたがたのために労してきたことが、むだになったのではないかと、あなたがたのことが心配でならない。(ガラテヤ 4 章 9-11 節/NIV 訳)

創世記 2 章 3 節には、神が「第七日を祝福し、これを聖別された。神がその日に、そのすべてのわざを終えて休まれた(シャバト〈**שבת**／shabath〉＞サバス)からである」と記されています。神は言うまでもなく休む必要はありませんが、私たち人間には休みが必要です。このミニストリーの読者であれば知っているはずのことですが、創世記の七日間は、神が諸時代を築き上げる組織的計画のひな型を示しており、各千年期はおよそ一〇〇〇年を表しています(詩篇 90 篇 4 節; 第二ペテロ 3 章 8 節; 黙示録 20 章 2-8 節参照)。第七日、すなわち休みの日は、千年期――メシアが一〇〇〇年にわたって統治される時代――に対応しており、その時、地はかつてないほどに祝福され、人間の生活は、罪ある被造物として可能な最大限にまで労苦から解放されます。律法における安息日もまた、この来たるべき祝福と平和の時を表しており、神が「すべてにおいてすべてとなられる」(第一コリント 15 章 28 節)永遠の日を指し示していました。新しい契約が私たちを招いているのは、この意味の文脈――すなわち、神のうちにあり、神から来る、まことに力ある平和の安息――を受け入れることであって、律法の下での文字どおりの第七日遵守ではありません。

> (16)だから、食べ物や飲み物のことで、あるいは祭りや新月や**安息日**のことで、だれにもあなたがたをさばかせてはならない。(17) これらは、来たるべきものの**影**にすぎず、その**実体**は**キリスト**にある。(コロサイ 2 章 16-17 節)

みことばの力:

第四章のこの第二の段落、すなわち十一節から十三節は、神のみことばの力と驚くべき働きを裏づける箇所として、しばしば引用されます――そしてそれはまさに正当なことです。しかし、この文脈において重要なのは、パウロが神のみことばを、聞き手を敬虔に戒めるためのものとして用いているということを理解することです。この文脈全体が

語っているのは、神のみことばが、私たちの良心および聖霊の働きと一体となって、私たちが狭い道からそれるたびに、私たちに罪を自覚させるということなのです。結局のところ、道をそれている信者たち――あるいは、エルサレム教会の多くの人々がしていたように、過去へ逆戻りしている信者たち――は、まず神のみことばの真理を取り入れることにおいて、おろそかになってしまっているのです。そして、この場合もまさにそうだったのです。多くの信者は、一定の規則正しい歩みの中で霊的に成長した後、何らかの理由でその献身から後退してしまうという現象を経験しています。最初のうちは、物事は十分順調に進んでいるように思えるかもしれません。しかし、しばらくすると、霊的な鋭さが自然に失われていく影響が、次第に表れてくるのです。名ヴァイオリニストのヤッシャ・ハイフェッツは、次のような有名な言葉を残しています。「一日練習しなければ、自分にはわかる。二日練習しなければ、批評家にはわかる。三日練習しなければ、聴衆にはわかる。」同じように、私たちは、一度学び、信じたことを失うわけではありませんし、もちろん、それほど急速に失われるわけでもありません。しかし、前進することをやめれば、やがて後退し始めることになります。キリスト者の歩みにおいて立ち止まったままでいることは、難しく、むしろ不可能と言ってよいでしょう。というのも、それは結局のところ、イエス・キリストに従って前進していく歩みだからです。

> (32)あなたがたは、光に照されたのち、苦しい大きな戦いによく耐えた初めのころのことを、思い出してほしい。(33)そしられ苦しめられて見せ物にされたこともあれば、このようなめに会った人々の仲間にされたこともあった。(34)さらに獄に入れられた人々を思いやり、また、もっとまさった永遠の宝を持っていることを知って、自分の財産が奪われても喜んでそれを忍んだ。(35)だから、あなたがたは自分の持っている確信を放棄してはいけない。その確信には大きな報いが伴っているのである。(36)神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは、忍耐である。(37)「もうしばらくすれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない。(38)わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない」(ハバクク 2 章 3-4 節)。(39)しかしわたしたちは、信仰を捨てて滅びる者ではなく、信仰に立って、[永遠の]いのちを得る者である。(ヘブル 10 章 32-39 節)

上の引用から分かるように、パウロはエルサレムの会衆が過去に甚大な苦しみを受けてきたことを十分承知していました。彼らは自らの患難を気高く耐え忍び、みことばにあって成長し、そして「エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地の果てまで」(使徒行伝 1 章 8 節)真理が最初に広がっていくうえで、基礎的な役割を果たしました。エルサレムの信者たちは、人々から避けられ、経済的孤立と迫害にさらされていました(使徒行伝 2 章 42-47 節, 4 章 32-35 節, 11 章 28-30 節, 24 章 17 節; ローマ

15 章 25-28 節; 第一コリント 16 章 1-4 節; ガラテヤ 2 章 10 節)。彼らの指導者たちは打ちたたかれ(使徒行伝 5 章 41-42 節)、投獄され(使徒行伝 12 章 1 節以下)、石打ちにされ(使徒行伝 7 章 57-60 節)、さらに処刑されもしました(使徒行伝 12 章 2-3 節)。信者たち自身も、その後、激しい迫害を受け、エルサレムから追い散らされ、家々から引き出され、投獄され、また処刑されました(使徒行伝 8 章 1-3 節, 9 章 1 節, 9 章 13 節)。これらの出来事によって、彼らの多くの信仰は激しく試されました(ヤコブ 1 章 2-7 節; 参照 ガラテヤ 3 章 4 節; 第一テサロニケ 2 章 14 節)。私たちのだれもが、意識してそれを避けようと努めないなら、「戦いの疲れ」とでも言うべき状態に陥り得ますが、この手紙を受け取った時点のエルサレムにいた多くの人々も、まさにそのような状態にあったようです。教会拡大の焦点が東方へ移り、彼らとしては「自分たちの役目は果たした」と感じていたこともあって、いくらかの休息を得るために妥協することは、自然な誘惑でした。そしてそれは必然的に、真理のみことばに対する以前の献身からも後退することにつながっていきました(というのも、律法へ戻ること自体が、その基本的教理の多くを退けることを伴っていたからです)。しかしこれは、きわめて危険な道でした(エゼキエル 18 章 1-32 節)。

> (24)そして、私たちは互い[の奉仕]に注意を払い合い、それを動機として、[自分自身の]愛と善い行いを促し合おうではないか。(25)ある人々が習慣としているように、**互いに集まることをやめてしまうのではなく**——[それではこれは不可能になってしまうから]——[主の働きにおいて忍耐し続けるように]むしろ互いに励まし合いなさい。そして、その日[主の日]が[ますます]近づいているのを見ているのだから、なおのこと、ますますそうしようではないか。(ヘブル 10 章 24-25 節 /NIV 訳)

私たちは今日のラオデキヤ的な状況においても、これと似た現象を見ることができます。真の霊的成長を目指して歩もうとすると、しばしば、生ぬるい人々から恥をかかされます。彼らは日曜日に教会へ出席することで、ただ「神にうなずいている」だけなのです——しかも彼ら自身は、少しも成長してはいません。皮肉なことに、この聖句は、今日の見える教会に見られる形だけのキリスト教に満足しない信者たちを恥じさせるために引用されることがあります。しかし実際には、エルサレムにおける真の背教者たちこそ、「教会に行っていた」人々だったのです。すなわち神殿に行き、他の信者たちと集まってみことばの真理を学ぼうとする代わりに、実りのない儀式にあずかっていた人々です。まれな例外を除けば、今日の「教会に通う人々」は、神殿の儀式へと戻り、霊的責務を放棄しつつあったパウロ同時代の人々と同じく、「集まることを拒んでいる」者たちに近いと言えます。それに対して、霊的成長のために労を惜しまない人々こそが、神のみことばの真理という確かな土台の上にのみ築かれる、相互の励ましのため

に、「真に集まっている」者たちなのです――その逆では**ありません**。

しかし一つの重要な点において、私たち自身の状況は異なっています。少なくともこの国においては、私たちはエルサレムの信者たちが経験したほどの迫害を受けてはいません。彼らは継続的に重大な個人的患難を経験しており、それが彼らの霊的熱心さを弱め、この世との平和のために妥協へと導いてしまった面がありました――本来、私たちが願うべきは神との平和であるにもかかわらずです。その結果として生じた信仰の衰えは避けがたく、やがて神による最終的な懲らしめの時代が、そう遠くない後にユダヤとエルサレムを襲ったとき、彼らが完全に倒れてしまう危険にさらされることになりました。そして艱難期の瀬戸際に生きている今日の私たちも、同様の挑戦に直面しています。艱難期の圧力は、歴史上ほかに類を見ないものとなるからです（マタイ 24 章 21 節; マルコ 13 章 19 節）。そのような圧力に、生ぬるい霊的姿勢のままで直面することは、背教への道を開くことになります。そして、その七年間に入る信者の三分の一が背教に陥ると預言されているのです（ダニエル 8 章 10 節; 第二テサロニケ 2 章 3 節; 黙示録 12 章 4 節）。

> 初めに、言[イエス・キリスト]があった。言は神[父]とともにあった（言と神との間には相互性〔すなわち共同の神性〕があった）。言は神であった。（ヨハネ 1 章 1 節）

> 初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言[イエス・キリスト]について――（第一ヨハネ 1 章 1 節）（参照.ヨハネ 1 章 1-4 節, 1 章 14 節）

> 彼は血染めの衣をまとい、その名は[永遠に]「神の言」と呼ばれた。（黙示録 19 章 13 節）

イエス・キリストは神のみことばです。これらの信者たちは、聖書とその教えに正しく注意を払わなかったことによって、かつてそうしてきたすべての信者たちと同様に、また後の時代においてそうするすべての信者たちと同様に、自分たちの救い主をないがしろにしていました。出エジプトの世代についての論述、そして律法の安息日ではなく、聖霊にあってイエス・キリストと共に日々、毎瞬歩むことによる、神のまことの安息に入る必要について語った直後に、神のみことばの鋭い力を持ち出していることの要点は、まさにここにあります。すなわち、みことばに注意を向けるなら、彼らは自分たちの心の奥底において、キリスト者のあらゆる務めの中でも最も重要なものである霊的成長において、自分たちが不忠実であったことを悟らされる、ということです。

(22)そして、御言を行う人になりなさい。おのれを欺いて、ただ聞くだけの者となってはいけない。(23)おおよそ御言を聞くだけで行わない人は、ちょうど、自分の生れつきの顔を鏡に映して見る人のようである。(24)彼は自分を映して見てそこから立ち去ると、そのとたんに、自分の姿がどんなであったかを忘れてしまう。(25)これに反して、完全な自由の律法(すなわち聖書――心を映し出す完全な鏡)を一心に見つめてたゆまない人は、[みことばを]聞いて忘れてしまう人ではなくて、[みことばによって促されて]実際に行う人である。こういう人は、その行いによって祝福される。(ヤコブ 1 章 22-25 節)

ここで彼らにとっての「行い(doing)」とは、再び集まりを持つこと――しかも、神殿にいる不信者や生ぬるい者たちとではなく、成長しつつある他の信者たちと共に集まること――を意味していました。それは、教えられる真理に耳を傾け、その真理を信じ、さらにそれに基づいて行動するためであり、かつて彼らが良き模範として実践していた歩みそのものでした。しかし霊的成長を追い求めることを怠った結果、これらの信者たちは事実上、「初めの愛から離れてしまい」(黙示録 2 章 4 節)、むしろ聖霊が彼らの良心に対してなされる戒めに抵抗する歩みへと陥っていました。そして、真理によって自分たちが正され、手入れされ、精錬され、真理の輝かしい光の中を前進させられることを許す代わりに、心をかたくなにして真理に背を向けていたのです。要するに彼らは、いのちへと至る高い道を離れ、滅びへと至るあの逆行的で危険な歩みのパターンへと、後戻りしてしまっていたのです(参照 エゼキエル 18 章 1-32 節)。

(17)そこで、わたしは主にあっておごそかに勧める。あなたがたは今後、異邦人が[真理を欠いて]むなしい心で歩いているように歩いてはならない。(18)彼らの知力は暗くなり、その内なる[故意の]無知と心の硬化とにより、神のいのちから遠く離れ、(19)[何が正しいかについて]自ら無感覚になって、ほしいままにあらゆる不潔な行いをして、放縦に身をゆだねている。(20)しかしあなたがたは、そのようにキリストに学んだのではなかった。(エペソ 4 章 17-20 節)

したがって、これらの節(すなわち、ヘブル 4 章 11-13 節)は、それ自体として聖書の栄光を証しする美しく積極的な箇所ですが、ここにおけるパウロの目的は、戒めにあるのです。

聖書はすべて神の霊感によるものであり、教えのため、**誤りを指摘する**ため、**正す**ため、義に**導く訓練**のために有益である。(第二テモテ 3 章 16 節/KJV 訳)

御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それに励みなさい。十分な忍耐と教えをもって、**誤りを指摘し、戒め、勧めなさい。**(第二テモテ 4 章 2 節)

この証言は真実である。それゆえ、彼らを厳しく**戒めなさい。**そうすれば、彼らは信仰において健全になるであろう。(テトス 1 章 13 節)

これらのことを語り、十分な権威をもって勧め、また**戒めなさい。**だれにもあなたを軽んじさせてはならない。(テトス 2 章 15 節/NIV 訳)

心の変化がなければ、エルサレムの信者たちに良いことは何も起こりませんでした。むしろ、「時を見分ける」ことができなかった彼らの失敗は、彼らの町と国がなお持っていた、共にいることによる祝福という唯一の守りを取り去ってしまうことになりました。塩がその味を失うように:

(41)イエスは都に近づかれると、それをご覧になって、そのために涙を流し、(42) 言われた。「もし、おまえが、この日に、いや、このおまえの日に、おまえの平和にかかわることを知っていたなら。しかし今、それはおまえの目から隠されている。(43) やがて、おまえの敵がおまえの周りに土塁を築き、おまえを包囲し、四方から攻め囲む日が来る。(44) そして、おまえと、その中にいるおまえの子らを地に打ち倒し、おまえの中に石を一つも他の石の上に残さない。**それは、おまえが神のおとずれの時を知らないでいたからである**」。(ルカ 19 章 41-44 節/NIV 訳)

このことは、今日の私たちにも当てはまります。エルサレムの信者たちの場合と同様に、私たちに対する訪れの時もまた、急速に近づいています。神が定められた将来を、私たちが変えることはできません。それは彼らにもできなかったのと同じです。しかし、主ご自身の望まれることを行おうと努めている者たちに対して取られる態度と、そうでない者たちに対して取られる態度との間には、大きな違いがあります。

(2)「イスラエルの神、主は、あなた、バルクにこう言われる。(3)『あなたは、「ああ、わたしはなんと哀れなのだ。主は、わたしの悲しみにさらに苦しみを加えられた。わたしはうめき疲れ、安らぎを見いだせない」と言った。』(4) あなたは彼にこう言いなさい。『主はこう言われる。「見よ、わたしが建てたものを、わたしは打ち壊し、わたしが植えたものを、わたしは引き抜く。すなわち、この国全体をである。(5) それなのに、あなたは自分のために大きなことを求めるのか。それを求めてはならない。見よ、わたしはすべての人に災いをもたらす」と主は言われる。「しかし、あなたがどこへ行こうとも、わたしはあなたのいのちを戦利品の

ようにあなたに与える。」』(エレミヤ 45 章 2-5 節/NKJV 訳)

「いつも目を覚ましていなさい。そして、これから起ころうとしているこれらすべてのことから逃れることができ、人の子の御前に立つことができるよう、祈りなさい。」(ルカ 21 章 36 節/NIV 訳)

私たちの大祭司:

パウロはまず、エルサレム教会が律法へと逆戻りしていることを指摘しました。そしてそれを、出エジプトの世代が神の絶えざる信仰の安息――安息日の儀式的休息とは対照的なもの――に入ることを拒んだことと結びつけました。さらに彼は、なおざりにされていたみことばを通して、彼らの良心に訴えたのです。そしてそのうえで、第三の段落において天におられる彼らの真の大祭司を思い起こさせたことは、論理的に見て次の段階でした。それは、律法がすでに置き換えられていること――すなわち旧い契約が、現在の御霊の時代において新しい契約に取って代わられていること――について、彼らにこれ以上の疑いを残さないためでした。

(16)「だれも、縮んでいない布切れを古い着物に継ぎ当てたりはしない。そんなことをすれば、その継ぎ布が着物を引き裂き、破れはいっそうひどくなるからである。(17) また、新しいぶどう酒を古い革袋に入れたりはしない。そんなことをすれば、革袋は裂け、ぶどう酒は流れ出し、革袋もだめになってしまう。**新しいぶどう酒は新しい革袋に入れる。**そうすれば、両方とも保たれるのである。」(マタイ 9 章 16-17 節/NKJV 訳)

これは多くの人の罪の赦しのために流される、わたしの**新しい契約**の血である。(マタイ 26 章 28 節/NKJV 訳)

罪は、もはやあなたがたを支配することはない。あなたがたは**律法の下にあるのではなく、恵みの下にある**からである。(ローマ 6 章 14 節/NKJV 訳)

キリストは、信じるすべての人に義をもたらすため、**律法の終わり**だからである。(ローマ 10 章 4 節/NKJV 訳)

神はまた、私たちを、**新しい契約**に仕える者として十分な資格のある者としてくださいました。それは、文字に仕える者としてではなく、御霊に仕える者としてです。文字は人を殺しますが、御霊は人を生かすからです。(第二コリント 3 章 6 節

/NKJV 訳）

今や私たちには、家を管理するにすぎない僕であるモーセに従うのではなく、神の御子ご自身がおられるのです。

(1)それゆえ、兄弟たちよ、[今や]きよめられ、天から[来ている]召しにあずかっている者たちであるあなたがたは、私たちが告白する、[わたしたちを救うために]遣わされた方、またその救いの大祭司である方、[すなわち]イエスに、心を留めていなさい。(2)この方は、ご自分を立てられた方に忠実であられた。それは、モーセもまた、自分の（責任の領域である）「家」全体において忠実であったのと同じである。(3)この方[イエス・キリスト]は、家そのものよりも、家を建てた者のほうが大きな誉れを受けるように、モーセよりもさらに大きな栄光に値する方である。(4)すべての家はだれかによって建てられるが、すべてのものを建てられた（すなわち、創造された）のは神である。(5)さて、モーセは、後に語られること[真理]についての証しとして、自分の家の中で、しもべとして忠実であったが、(6)キリストは、その家の上に立つ御子として忠実であられた。その家とは、もし私たちが、[その中で]誇る希望を、終わりまでしっかりと保ち続けるなら、私たち自身のことである。（ヘブル 3 章 1-6 節/NIV 訳）

今や私たちには、文字どおりの動物のいけにえの血ではなく、キリストご自身の血があります。すなわちそれは、あの闇の中における霊的な死であり、そのとき主は、私たちのすべての罪の代価を、ただ一度で完全に支払われたのです。

(18)あなたがたのよく知っているとおり、あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、(19)きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである。（第一ペテロ 1 章 18-19 節）

今や私たちには、地上の材料で造られた神殿ではなく、イエス・キリストご自身が私たちの神殿として与えられています。そして私たちもまた、その御からだとして、主を礼拝し栄光を帰するための霊的な神殿へと築き上げられているのです。

(19)イエスは彼らに答えて言われた。「この神殿を壊してみなさい。そうすれば、わたしは三日のうちにそれをよみがえらせよう。」(20) しかし、イエスが言われた神殿とは、ご自分のからだのことだった。（ヨハネ 2 章 19-20 節 NKJV 訳）

(4) 人には捨てられたが、神には選ばれた尊い生ける石である主のみもとに来て、(5) あなたがたもまた、生ける石として霊の家に築き上げられ、聖なる祭司となって、イエス・キリストによって神に受け入れられる霊のいけにえをささげるのである。(第一ペテロ 2 章 4-5 節/NKJV 訳)

今や私たちには、いけにえの食事を伴う祭りではなく、これらの影は、イエス・キリストという実体によって置き換えられています。すなわち、私たちが聖餐にあずかるたびごとに、十字架における主の私たちのためのいけにえを覚え、これを祝うのです。

(23) わたしは主から受けたことを、そのままあなたがたに伝えたのである。すなわち、主イエスは渡される夜、パンを取り、(24) 感謝をささげてから、それを裂いて言われた。「これは、あなたがたのための、わたしのからだである。わたしを覚えるため、このように行いなさい。」(25) 食事の後、同じように杯を取って言われた。「この杯は、わたしの血による新しい契約である。これを飲むたびに、わたしを覚えるため、このように行いなさい。」(26) あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られる時まで、主の死を告げ知らせるのである。(第一コリント 11 章 23-26 節/NIV 訳)

(16) だから、食べ物や飲み物のこと、あるいは祭りや新月や安息日のことで、だれにもあなたがたを裁かせてはならない。(17) これらは来たるべきものの影であって、その実体はキリストにある。(コロサイ 2 章 16-17 節/NKJV 訳)

今や、週に一日だけの儀式的な礼拝に代わって、私たちには、聖霊の力によって主とともに平安のうちに歩む、毎瞬の安息が与えられているのです。

(9) だから[それだから]、神の民のためには、なお「安息日の安息」が**残されている**のである。(10) というのは、ちょうど神がご自身のわざをやめられたのと同じように、[神の]安息に入った者は、自分のわざをやめているのである。(ヘブル 4 章 9-10 節)

今や私たちには、私たちに代わって祭司として務める死すべき人間ではなく、イエス・キリストご自身が、完全で永遠の大祭司としておられるのです。

それゆえ、私たちには、天を通って行かれた偉大なる大祭司、すなわち神の子イエスがおられるのであるから、この方に対する私たちの告白を堅く保とうではないか。(ヘブル 4 章 14 節)

そして、もし祭司職に変化があったのであれば――しかもそれは疑いなく実際に起こったのですが――なぜこれらの信者たちは、ただ儀式的なものにすぎない律法の祭司職へと逆戻りしていたのでしょうか。キリストを信じる者であるとは、私たちの罪のために死んでくださった**主の**執り成しに依り頼むことです。律法は廃れてしまったのに、律法へと立ち返ることは、事実上、主のいけにえを無効なものとして宣言することに等しい行為です。

> 「**新しい契約**」と言われたことによって、神は最初の契約を古いものとされた。そして、古びてゆくもの、老い衰えつつあるものは、やがて消え去ろうとしている。(ヘブル 8 章 13 節/NKJV 訳)

ここでのもう一つの重要な点は、エルサレムの信者たちに対し、地上の大祭司たちと律法に取って代わる天の大祭司という新しい現実を悟らせるだけではありません。その大祭司が、私たちのために弁護し、とりなしてくださるということ自体が、アロンの祭司職がこれまで与え得たどのような恩恵をもはるかに超える祝福なのです。私たちの天の大祭司イエスは、エルサレム教会の人々が主に背を向けることによって犯していた罪をも含め、私たちの罪のために**真の**赦しを与えてくださったのです。(ローマ 3 章 25-26 節; エペソ 5 章 2 節; ヘブル 2 章 17 節, 9 章 5-7 節, 9 章 11-12 節, 9 章 23-24 節; 第一ヨハネ 2 章 2 節, 4 章 9-10 節)。

> (27)[人間の]大祭司たちとは違い、[イエス]には、日ごとにいけにえをささげる必要はないのである。まず自分自身の罪のために、次いで民の罪のためにささげる必要はないのである。というのも、この[後者<:民の罪のためのささげもの>]については、主は**ご自身を**[いけにえとして]ささげられたとき、ただ一度でそれを成し遂げられたからである。(ヘブル 7 章 27 節/NIV 訳)

天におられる私たちの大祭司イエスは、私たちが罪を犯すたびごとに、今このときも父に対して私たちのために**弁護して**くださっています。それには、エルサレム教会が主に背を向けることによって犯していた罪も含まれています(ローマ 8 章 34 節; 第一ヨハネ 2 章 1 節; 参照 ヨブ 16 章 19 節; ヨハネ 14 章 13-14 節; 第一テモテ 2 章 5 節)。

> (23)さて、他の祭司たちは、死ということがあるために務めにとどまることができず、[必然的に]数多く立てられるのである。(24)しかしこの方[すなわち、イエス・キリスト]は、永遠にとどまっておられるゆえに、その祭司職を変わることのな

いものとして持っておられるのである。(25)このゆえに主は、永遠に生きていて彼らのために**とりなしておられる**ので、御自身を通して神に来る人々を、いつも救うことができるのである。(ヘブル 7 章 23-25 節)

そして、イエスが私たちの天の大祭司であられる以上、私たちが悔い改めて告白するなら、どのような罪や悪に関わっていたとしても、主はいつでも私たちの祈りを聞き、赦してくださる備えをしておられます。それには、エルサレム教会が主に背を向けることによって関わっていた罪も含まれています。

どんなことでもわたしの名によって求めるならば、わたしはそれをしよう。(ヨハネ 14 章 14 節/NIV 訳)

もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方であるから、私たちの罪を赦し、あらゆる不義から私たちをきよめてくださる。(第一ヨハネ 1 章 9 節/NIV 訳)

これは、神のみことばを宣べ伝えるすべての者が心に留めておくべき重要な点です。すなわち、戒めや是正とともに、私たちは決して解決の道を教えることを怠ってはならず、仕えている人々に対して、私たちの神の大いなるあわれみを常に思い起こさせなければならないのです。

(3)主よ、もしあなたが罪を心に留められるなら、主よ、だれが御前に立つことができようか。(4) しかし、あなたには赦しがある。それゆえ、人はあなたを恐れるのである。(詩篇 130 篇 3-4 節/NIV 訳)

(21)わたしはこのことを心に思い返す。それゆえ、わたしは望みを抱く。(22)主のあわれみによって、わたしたちは滅び尽くされなかった。そのあわれみが尽きることはないからである。(23) そのあわれみは朝ごとに新しい。あなたの真実はまことに大きい。(哀歌 3 章 21-23 節/NKJV 訳)

愛する者たちよ。このように語ってはいるが、あなたがたについては、わたしたちはさらによいこと、すなわち救いに伴うことを確信している。(ヘブル 6 章 9 節/NIV 訳)

Ⅱ．翻訳

(1)だから、あなたがたのだれも、[出エジプトの世代と同じようなしかたで][神の]約束を投げ捨てることによって、その安息に入ることができずに終わる者が、あなたがたの中から一人でも出ることのないよう、気をつけようではないか。(2)というのは、私たちにも、彼らと同じように福音が宣べ伝えられているからである。しかし彼らが聞いたみことばは、彼らに益とはならなかった。彼らはそれを聞きはしたものの、信仰と結びつかなかったからである。(3)というのも、この安息に入るのは、**信じた**私たちなのであって、[信仰のない者たちではないからである。]主がこう言われたとおりである。「わたしは怒りのうちに誓った。『彼らは決してわたしの安息に入ることはない。』」

(4)さて、[神]は第七日について、どこかでこのように語っておられるのである。「神は第七日に、そのすべてのわざを終えて**休まれた**」(創世記 2 章 2 節)。(5)しかし、ここでの聖句をもう一度引用すれば、[神]はこう言われたのである。「彼らは決してわたしの安息に入る**ことはない**」(詩篇 95 篇 11 節)。(6)[これら二つの箇所を比べて見てみると、][神の民の]ある人々はこの神の安息に**入ることになる**、ということがわかるのである。というのも、先の[世代]にもまた、[救いの]福音が宣べ伝えられていたにもかかわらず、不信仰のゆえにそれに**入らなかった**からである。(7)そこで[神は]、もう一つの「日」、すなわち「今日」という日を定められたのである。[出エジプトの世代が過ぎ去ってから]多くの年月を経た後、ダビデを通して、[神]は次のように宣言しておられる。「**今日**、もし御声を聞くなら、あなたがたの心をかたくなにしてはならない……」。(8)もしヨシュアが、[出エジプトの世代とその子らに、この]安息を与えていたのであれば、[神]はそれらの[先の]出来事からこれほど後になって、別の「日」[の安息]について語られることはなかったはずである。

(9)だから、神の民のためには、なお「安息日の安息」(サッバティスモス〔σ α β β α τ ι σ μ ός／sabbatismós〕)がなお残されて**いる**のである。(10)というのは、ちょうど神がご自身のわざをやめられたのと同じように、[神の]安息に入った者は、自分のわざをやめているのである。(11)それゆえ私たちは、[継続的で霊的な]その安息に入るよう熱心に努めようではないか。同じ不従順の[出エジプトの世代が見せた]あの前例――に陥って、だれも[恵みから]落ちることがないためである。

(12)というのは、神のみことばは生きており、力があり、どんな両刃の剣よりも鋭く、魂からその地上のいのちである霊を、また骨とその髄とをも切り分けるほどにまで貫き通すからである。[それは](すなわち、良心のうちに宿るみことばは)心の思いと考えとを見分けるものとして働くのである。(13)また、被造物のうちで、御前に見えないままでいられるものは一つもない。すべてのものは、この方の目の前に裸にされ、あらわにされているのである。私たちはこの方に対して申し開きをしなければならないのである。

(14)だから私たちには、天を通って行かれた大いなる大祭司、すなわち神の御子イエスがおられるのであるから、[この方への信仰の]告白をしっかりと保とうではないか。(15)というのは、私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情することのできない方ではないからである。この方もまた、[私たちと同じように]あらゆることにおいて試みを受けられたのであるが、[ただ]罪はおかされなかったのである。(16)それゆえ私たちは、恵みの御座[父の御座]に、確信をもって大胆に近づこうではないか。そうすれば、私たちは[主の]あわれみを受け、また[主の]恵みを得て、必要なときの助けを受けることができるのである。(ヘブル 4 章 1-16 節)

Ⅲ. 要約と意訳

イエスは、(律法にある安息日とは対照的な)まことの安息日の創始者です。この方は生ける神のみことばであり、まことの大祭司として、安息日(さらにはすべての祭り)の儀式的意味のすべてを成就された方なのです。

ここまで述べてきたことを続けますと、出エジプトの世代は主を信頼しなかったため、「安息」に入ることができませんでした。そのため、信仰によるその安息を象徴する約束の地に入ることも許されませんでした。ですから、あなたがたは同じ過ちを犯さないように心を砕くべきなのです。私たちが扱っている詩篇 95 篇で、詩篇記者が「きょう」こそその安息に入る日であると言い、その安息に入れなくならないよう心をかたくなにしてはならないと警告しているという事実は、この信仰の安息の約束が、まさに今、あなたがたにも差し出されていることを意味しています。そして、あなたがたは、その安息に入ることを拒まないよう十分に気をつけなければなりません。神のまことの安息は信仰によって入るものであり、あなたがたが好み、再び立ち返ってしまった律法の行いによって入るものではないからです。それは、出エジプトの世代が心の中でエジプトへ立ち

返ったのと同じことなのです。彼らも、あなたがたと同じように救いの福音を宣べ伝えられました。しかし、彼らの場合、その福音は何の益にもなりませんでした。彼らが信じようとせず、そのことは彼らの不信仰な行動から十分に明らかだからです。信じる者だけが、信仰の安息に入るのです。実際、詩篇には、主が彼らについて、「彼らは決してわたしの安息に**入ることはない**」と誓われたと記されています。そして主は、そのことを語られたのです。もちろん、再創造の第七日における最初の安息日は、それらのことばが語られ、また書き記されるはるか以前にすでに存在していました（創世記 2 章 2 節）。そして、出エジプトの世代が信仰の安息に入ることを拒んだため、神は別の一日、すなわち、その反逆の世代が過ぎ去ってから長い年月の後に記された詩篇 95 篇の「きょう」を定められたのです。彼らは、主を信頼せず、主に忠実でなかったため、その安息に入ることができませんでした。そして、その子らでさえ、この「安息」を成就したわけではありません。もし詩篇 95 篇が、その第二世代が約束の地に入ったことについて語っているのであれば、何世紀も後にこの詩篇を書いた詩篇記者が、「きょう」が安息に入る日であるとは言わなかったはずだからです。ですから、神の民のためには真の「安息日の安息」が残されています。それは、儀式的な安息日の象徴を成就する霊的な安息です。その真の信仰の安息に入った者はみな、救いを得るために自分で何かをしようと努めることをやめています（たとえば、律法を救いの手段であると誤って考えたり、いわゆる「グノーシス的な戦い」に従事したりすることです）。それは、神ご自身もまた、最初の安息日に世界の再創造のわざを終えて休まれたのと同じです。ですから、救うことのできない律法の行いに立ち返るのではなく、主を信頼する安息、すなわち、この真の信仰の安息に入るよう、私たちはあらゆる努力を払おうではありませんか。そうすれば、出エジプトの世代と同じ、不信仰という不従順の罠に陥ることはないのです。

主は、私たちすべての心の中に何があるかをご存じです。神のことばそのものであるお方には、反逆を隠すことはできません。そして私たちには、書き記されたみことばも与えられています。私たちが正直な心でそれに耳を傾け、聖霊がその意味を明らかにしてくださる御声に従うなら、そのみことばは、あらゆる偽りを見抜き、私たちが信じてしまったあらゆる偽りの教えに罪を悟らせ、私たちが聞き入れ、受け入れてきたあらゆる偽りを退け、私たちの心の最も深いところにまで届くのです。ですから、律法の儀式（あるいはそれをグノーシス主義的にゆがめたもの）に立ち返るのではなく、私たちは、まことの大祭司である神の子イエス・キリストに信仰を置くことによって救われたことを思い起こそうではありませんか。主は、ご自身を私たちの罪のためのいけにえとしてささげるために、真の人間としてこの世に来られました。それゆえ、人間であるとはどういうことかを、ご自身の経験によって十分に知っておられるのです。そして、人間の人生という苦い杯を余すところなく飲み尽くされたお方として、主は、あなたがたの受けている

圧力や、あなたがたの味わっている排斥、すなわち、今あなたがたを反逆へと導いているあらゆる誘惑を十分に思いやることがおできになります。主もまた、まさに同じあらゆる圧力と誘惑を経験されました。ただ一つ違うのは、あなたがたがしているように、それらに屈することは決してなかったということです。ですから、不信仰のために屈してしまうのではなく、私たちは、自分たちの願いを直接このお方のもとへ携えて行こうではありませんか。そうするなら、私たちは必ず、天の恵みの御座に着いておられるお方から、あわれみと恵み、そして必要な時にかなった助けを受けることができると確信してよいのです。

IV. 節ごとの注解

一節

> (1) だから、あなたがたのだれも、[出エジプトの世代と同じようなしかたで][神の]約束を投げ捨てることによって、その安息に入ることができずに終わる者が、あなたがたの中から一人でも出ることのないよう、気をつけようではないか。(ヘブル 4 章 1 節)

だから(So)**:** ギリシヤ語の接続詞 オウン(οὖν／oun) は、ここで先行する第三章の内容に基づく結論を示しています。すなわち、「この理由によって、つまり、不忠実で不信仰であったために約束の地に入ることができなかった出エジプトの世代という悪い手本に従わずに……」という意味です。この節においてパウロがエルサレムの信者たちに与えている勧告は、まさに直前に語った内容に直接基づいています。この注意喚起は、現代の読者にとって重要です。というのも、私たちは聖書の章を、それぞれ独立した完結単位のように考えてしまいがちですが、実際には、新約聖書と旧約聖書における章区分は比較的後代の考案だからです。私たちがよく知っている新約聖書の章区分と節区分は、それぞれ十三世紀のステファン・ラングトンと十六世紀のロベール・エティエンヌによって考案されました。これらは読者にとって非常に役立つ区分ではありますが、それ自体に霊感があると考えるのは誤りです。[2] 私たちは皆、このような区

---

[2] たとえば、アレフ(シナイ写本)〔Sinaiticus〕のような古代の聖書写本の中には、段落区分が設けられているものがありますが、それらは現在私たちが用いている区分体系とはまったく一致していません。

分が、ときに議論の流れの把握を妨げ得ることを自覚しておく必要があります（章の区切りをまたいで意味が続いている箇所では特にそうです）。たとえば章ごとに読むのを中断する場合などがそれに当たります。この箇所はその好例です。というのも、第三章と第四章の間の区切りは、特に不適切なものだからです。第四章でパウロが語っていることはすべて、直前の第三章で展開した議論に基づいています。そして彼は、この不適切で恣意的な区切りのところで読者が読むのを止めてしまうことを、想定しては**いなかった**はずなのです。

ではないか（Let Us）：

ここでパウロは、自分自身をも含めた第一人称複数の勧告法を用いて、「私たちは～しようではないか」と語っています。これは命令を和らげ、直接的な叱責というよりも、励ましとして提示するためです。パウロは、この書簡の中に、この教会にとって受け入れがたい内容が多く含まれていることをよく承知していました。彼は読者たちが応答することを望んでおり、落胆してしまうことを望んではいませんでした。その態度は、子どもたちの行いが正されることを願いながらも、不必要に彼らを苦々しい思いにさせたくはない、愛情深い父のようです。

> 父たちよ、子どもを怒らせてはならない。かえって、主の懲らしめと訓戒によって育てなさい。（エペソ 6 章 4 節/NIV 訳）

> 父たちよ、子どもを苦々しい思いにさせてはならない。そうでないと、子どもは気落ちしてしまう。（コロサイ 3 章 21 節/NIV 訳）

安息に入れないように思われる（Seem to Fall Short）：

ここでパウロが間接的な言い方をしているのには（すなわち、「あなたがたは入り**損なうな**」と直接言うのではなく、「その安息に入ることができずに終わる者が…出ることの**ないよう**、私たちは警戒しよう**ではないか**」と言っているのには）、二つの理由があります。第一に、先に述べたとおり、このような言い回しのほうが、出エジプトの世代と比較されるという苦い内容を、彼らにとっていくらか受け入れやすくすることを期待していたからです。第二に、霊的な事柄を評価する際、私たちは自分自身についてさえ完全に確信を持てないことが多いのです（第一コリント 4 章 3-5 節; 参照 第一コリント 10 章 12 節; 第二コリント 9 章 3 節; ガラテヤ 2 章 2 節; ピリピ 3 章 11 節）。そうであるなら、他の信者の霊的状態を見極めることについて、なおさら確信を持つことはできないはずです。確かに、彼らが何を語り、何をしているかを見ることはできます。そして、エルサレム教会の多く、いや大多数が、実際に深刻な霊的危険の中にあったというパウ

ロの確信は、十分な根拠に基づくものでした。それは疑いなく、多くの訪問者や書簡のやり取りを通して彼に報告されていた事実に基づいていたのです（第一コリント 1 章 11 節参照）。

パウロ自身について言えば、少なくとも彼が背教や死に至る罪への道を歩んでいないことについては、十分に確信していました（だからこそ「**あなたがた**のだれも」と言っているのです）。しかし、エルサレムの個々の信者一人ひとりについては、当然ながら、その全体像を完全に把握していたわけではありませんでした。また、私たちの言葉や行動と、心の内で実際に起こっていることとの間に、食い違いが生じることがあるのも事実です。とはいえ、前者が後者と無関係であることはほとんどありません。そしてすべての信者は、自分たちが常に見られていることを覚えておく必要があります。主と選ばれた御使いたちだけでなく、信者仲間や未信者たちからも見られているのです。自分たちの証しを非難の余地のないものとして保つことは、偽善を避けるためだけでなく、神の御国を前進させるためにも重要です。パウロは疑いなく、この教会がかつて示していたすばらしい証しに基づいて、律法へ立ち返ろうとする多くの人々の動きや、グノーシス主義に踏み込もうとしている一部の人々の危険な振る舞いが、単なる逸脱、すなわち是正可能な過ちにすぎないことを望んでいました。ここでの彼の含みを持たせた言い方は、まだこれらの重大な誤りに全面的には加わっていない者たち、そして、すでに加わってしまっていたとしても、なお御霊に満たされた彼の言葉に応答し、戒めを受け入れて自らの歩みを改めようとする者たちに向けられているのです。

> (32)あなたがたが初めて光を受けたころの日々を思い起しなさい。そのときあなたがたは、苦しい患難の戦いを耐え忍んだ。(33)あるときは人々の前でそしりと迫害にさらされ、またあるときは、そのような目にあった人々と苦しみを共にした。(34)あなたがたは、わたしが鎖につながれていることを共に苦しみ、また、自分たちの財産が奪われることをも喜んで受け入れた。それは、自分たちには、もっとすぐれた、いつまでも残る財産があることを知っていたからである。(35)だから、あなたがたのこの確信を投げ捨ててはならない。それには大きな報いが伴っている。（ヘブル 10 章 32-35 節）

神の約束を投げ捨てて（Casting Aside God's Promise）：

「その安息に入り損なう」とはどういう意味でしょうか。また、「神の約束を投げ捨てて」とは何を指すのでしょうか。ギリシヤ語本文においては、後者が前者の述部的説明となっています。すなわち、神の約束を見過ごし、軽んじ、ないがしろにすることが、信仰の安息に入ることの失敗へと**つながる**のです。正しく動機づけられている信者は、前進し

ます。私たちを動機づけるのは、この地上の生の向こう側にある報いです。すなわち、復活、キリストの花嫁全体の再会、今の生において主に忠実に仕えたことに対して与えられる永遠の冠とさまざまな報い、主の千年王国において与えられる務め、そして新エルサレムにおける私たちの永遠の立場と生活です。神はこれらすべてを、イエス・キリストにあって私たちのためにすべてを成し遂げてくださったこの方に、私たちが忠実であり続ける**なら、**与えると約束しておられるのです。

> **信仰がなくては**、神に喜ばれることはできない。なぜなら、神に来る者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。(ヘブル 11 章 6 節)

> (8)**信仰によって**、アブラハムは、[神から]受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこうむった時、それに従い、[正確な]行く先を知らないで出て行った。(9)**信仰によって**、他国にいるようにして約束の地に宿り、同じ約束を継ぐイサク、ヤコブと共に、幕屋に住んだ。(10)彼は、ゆるがぬ土台の上に建てられた都を、待ち望んでいたのである。その都(すなわち、新しいエルサレム)をもくろみ、また建てたのは、神である。(ヘブル 11 章 8-10 節)

> (24)**信仰によって**、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、(25)罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、(26)キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの[すべての]宝にまさる富と考えた。それは、彼が報いを望み見ていたからである。(ヘブル 11 章 24-26 節)

私たちがこの永遠の視点を見失うとき、すなわちキリスト者としての歩みにおいて「焦点を失う」とき、私たちは霊的な勢いを保つのではなく、流されるようになりがちです。そしてその流れは、必ずしもすぐにではないにしても、やがて横道へそれ、さらには後退へと向かうのが常です。そのような状態になると、その人は神の約束をしっかり心に留めることを忘れてしまうだけでなく、それらを、この世の事柄と比べて取るに足りないもののように見なすようになります。こうして一方では世俗的な意味で「幸福を追い求める」ために、また他方では自分の信仰ゆえの「困難を避ける」ために、その人はついには、これら最も価値ある約束を「投げ捨てる」地点にまで至り、それらを無意味であるかのように考え、語り、行動するようになってしまうのです。このようなことが起こると、その人は、出エジプトの世代とまったく同じしかたで神を試み、主を悲しませることになります。そして、この世を敬虔に生き抜くために必要な平安を与える、日々の安息に入ることに失敗し、その代わりにこの世の中に代替物を求めるようになります。エルサレム教

会の相当数の人々が置かれていた状態は、まさにこれでした。すなわち、安全を求めて律法へ立ち返る者たち、あるいは世俗的快楽を求めてグノーシス主義を受け入れる者たちがいたのです。

(20)また、岩地にまかれたものとは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる人のことである。(21) しかし、その人のうちには根がないので、しばらくの間は続いても、みことばのために**患難や迫害が起ると**、たちまちつまずいてしまう。(マタイ 13 章 20-21 節/NKJV 訳)

(16)また、岩地にまかれたものとは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる人たちのことである。(17)しかし、その人たちのうちには根がないので、しばらくの間は続いても、みことばのために**患難や迫害が起ると**、たちまちつまずいてしまう。(マルコ 4 章 16-17 節/NKJV 訳)

「岩の上にまかれたものとは、みことばを聞くと、喜んでこれを受け入れる人たちのことである。しかし、その人たちのうちには根がないので、しばらくの間は信じていても、**試練の時に**なると、信仰から離れてしまう。」(ルカ 8 章 13 節/NKJV 訳)

やがて間もなく来る日々においては、「みことばのゆえに起こる艱難や迫害」が、確かに数多く生じることになります。後の時代に生きたエルサレムの信者たちにとって、出エジプトの世代が有益な警告の実例となったように、この二つの集団はまた、「もろもろの時代の終わりに臨んでいる」私たちにとっても、警告として立てられているのです(第一コリント 10 章 11 節/NKJV 訳)。

二節

というのは、私たちにも、彼らと同じように福音が宣べ伝えられているからである。しかし彼らが聞いたみことばは、彼らに益とはならなかった。彼らはそれを聞きはしたものの、信仰と結びつけなかったからである。(ヘブル 4 章 2 節)

福音:

イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、いのちである。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。また、生きていてわたしを信じる者は、決して永遠に死ぬことはない」。(ヨハネ 11 章 25-26 節)

「福音(gospel)」という語は、ギリシャ語 ユーアンゲリオン(εὐαγγέλιον/euangélion) を古英語に直接訳した語であり、文字どおりには「良い知らせ」あるいは「祝福された告知」を意味します。[3] 死とさばき、そして罪の宣告に直面している罪ある人間にとって、イエス・キリストが私たちのために死なれ、ただこの方に信仰を置くことによって永遠のいのちを得ることができるという知らせ以上に良い知らせは、まさに存在しません(第二テモテ 1 章 9-10 節)。主の初臨以来、すなわち十字架と復活以来、このメッセージは、いかなる影にも覆われることのない真理の直接の光の中で、きわめて明瞭に宣べ伝えられてきたのです。

主イエスを信じなさい。そうしたらあなたは救われます。(使徒行伝 16 章31節前半)

主がこの世に来られる前、すなわち私たちのために死なれ、三日目によみがえられる前においても、そのメッセージ自体は同じでした。それは、罪と死からの救いのために神を信頼せよ、ということです。ただし当時は、それが象徴的なかたちで示されていました。それでもなお、主がアダムとエバの裸(すなわち罪)を覆うために皮の衣を作られた出来事(他者の死と血によって罪が象徴的に取り除かれること)から、モーセの律法における精巧で広範な儀式に至るまで、神はこの地上において、真理についての証しを決して欠かされることはありませんでした(詩篇 19 篇 1-6 節; 使徒行伝 14 章 17 節, 17 章 24-31 節)。人類史のいかなる時代においても、真に救われることを願った者には、そのために必要な情報、すなわち福音が与えられてきました。それは、「さまざまな時に、さまざまな方法で」示され(ヘブル 1 章 1 節)、十字架以前であっても真理を受け入れたすべての人に救いをもたらしてきたのです。そして十字架の後には、「この終わりの時代には、[父なる神が]御子によって[**直接**]わたしたちに語られた」のです(ヘブル 1 章 2 節)。ですから、出エジプトの世代が、私たちやパウロの同時代の人々と同じように直接的な形で福音を与えられていなかったという理由で、何らかの不利な立場に置かれていたと考えるのは誤りです。事実、ユダヤ民族の父であるアブラハムは、「主を**信じた**ので、それが彼の義と認められた」のです(創世記 15 章 6 節)。

(18)しかし、わたしは言う。彼らは聞かなかったのであろうか。決してそうではない。「その声は全地に響き渡り、そのことばは世界の果てにまで及んだ。」(19)

---

[3] BB 4B「救済論(Soteriology)」第 II 部 5 項「福音」参照。

> わたしはまた言う。イスラエルは悟らなかったのであろうか。まずモーセがこう言っている。「わたしは民でない者によってあなたがたにねたみを起させ、無知な国民によってあなたがたを怒らせる。」(20)またイザヤは大胆にこう言っている。「わたしは、わたしを求めなかった者たちに見いだされ、わたしに尋ねなかった者たちに自らを現した。」(21)しかしイスラエルについては、こう言っている。「わたしは一日中、不従順でかたくなな民に向かって両手を差し伸べていた。」(ローマ 10 章 18-21 節/NIV 訳)

したがって、救いとは情報の問題ではありません。むしろそれは、福音を受け取る側の意思の問題なのです――そして神は、それを求める者に対して、決してそれを拒まれることはありません(ヨハネ 3 章 16 節; 第一テモテ 2 章 4 節; 参照 エゼキエル 18 章 23 節; マタイ 18 章 14 節; ヨハネ 12 章 47 節; 第二ペテロ 3 章 9 節)。[4] また、「聞いたことがなかった」という誤った弁解を持ち出そうとする者もいるかもしれません。しかし、モーセとアロンに導かれ、最初に律法を与えられた出エジプトの世代は、主ご自身から直接聞き(申命記 5 章 23-29 節)、数多くの奇跡的なしるしを与えられていました(たとえば、エジプトに下された十の災い、紅海における大いなる勝利、昼は雲の柱、夜は火の柱による導き、日々与えられたマナなど)。したがって彼らには、いかなる弁解の余地もありませんでした。ましてや、読者であるパウロの同時代の人々の多くは、主ご自身を直接見たことのある者たちであったのですから、なおさらです。

信仰と結びつかなかった(Not Mixed with Faith)**:**

> こうしてイスラエルは、主がエジプトにおいてなされた大いなるみわざを見た。それで民は主を恐れ、主とそのしもべモーセを**信じた。**(出エジプト 14 章 31 節/NKJV 訳)

> **信仰によって**、彼ら(すなわち出エジプトの世代)は、かわいた地を行くようにして紅海を渡った。しかし、エジプト人が同じことを試みたとき、彼らはおぼれ死んだ。(ヘブル 11 章 29 節)

彼らはまったく信じなかったのでしょうか。上に挙げた聖句が示しているように、少なくとも最初の間は、彼らも信じていました。紅海の岸辺でモーセに向かって不平を爆発

---

[4] また救いは、認識能力の問題でもありません。というのは、福音という事柄を聞く機会を与えられたすべての人に対して、その内容を明らかにしてくださるのは聖霊ご自身だからです。したがって、そこにはいわゆる「認識論的問題」は存在しないのです。BB 5「聖霊論(Pneumatology:聖霊の研究)」第 II 部 B 項 1.d.3「福音の認識論(Gospel Epistemology)」参照。

させた後（出エジプト 14 章 10-14 節）であっても、奇跡的に分けられた海を渡るだけの信仰を持っていたのです。では、彼らはどのようにして信仰を失ったのでしょうか。御霊にあって記したパウロは、本文の節においてこう述べています。すなわち、「彼らは〔良い知らせを〕聞きはしたが、それを信仰と結びつけなかった」と。

> 岩の上に落ちたものとは、みことばを聞くと喜んでこれを受け入れる人たちのことである。しかし、**その人たち**には根がないので、**しばらくの間は信じて**いても、試練の時になると**信仰から離れてしまう。**（ルカ 8 章 13 節/NIV 訳）（参照．マタイ 18 章 20-21 節；マルコ 4 章 15-16 節）

上に挙げた節は、出エジプトの世代の大多数に、まさにそのまま当てはまるように思われます。彼らは初めのうちこそ、わずかながら信仰を持っていたかもしれません。パロの軍勢から奇跡的に救い出され、紅海の向こう岸で主を喜び賛美した後（出エジプト 15 章 1-21 節）であっても、その後は疑いようもなく、テストに次ぐテストにことごとく失敗していきました。なぜなら彼らは、どのような苦境に直面しても、主が自分たちを切り抜けさせてくださると信頼しなかったからです。その代わりに彼らがまず取った反応は、不平を言い、責任を転嫁することでした。最初はモーセに対して、やがては神ご自身に対してそうしたのです。このような態度は、強い信仰の表れではなく、そもそも信仰があることのしるしでさえありません。もっとも、個々人の心の内に何が起こっているのかは、神のみがご存じです。私たち人間には、冷え切った不信者と、信仰がきわめて弱い信者とを見分けることができない場合が多いのです。実際、彼らの語ること、行うことという点においては、悲しいことに、両者の間にまったく違いが見られないこともしばしばあります。それでもなお、出エジプトの世代は、命じられたとおり過越を守りました（そうでなければ彼らの長子も打たれていたはずです）。彼らはモーセと主に従ってエジプトを出て荒野に入りました。そして、先に引用したヘブル 11 章 29 節が証言しているように、彼らは「信仰によって」紅海を渡り、**その時には**「主とそのしもべモーセを信じた」のです（出エジプト 14 章 31 節）。このわずかな信仰が、その後、神とその代弁者たちに対する度重なる反逆の中で完全に消え失せてしまったのかどうかは、神のみがご存じです。しかし確かなことは、彼らの歩みが、今日の私たちの模範とされるべきものではないということです。そして、ヘブル書が証ししているように、そのような歩みが、パウロが訴えかけていたエルサレムの信者たちの間で、憂慮すべきかたちで見られたのです。

> (7) だから、聖霊が言われるとおりである。「きょう、もしあなたがたがその御声を聞くなら、(8)荒野で試みを受けた日の反逆の時のように、**あなたがたの心をかたくなにしてはならない。**(9)その所で、あなたがたの先祖たちは、わたしの〔彼らのために行った〕みわざを四十年の間見ながらも、わたしを試み、わたしを試

した。(ヘブル 3 章 7-10 節前半)

聖書的な用語で言えば、「心」とは内なる人を指します。それは、肉体の思いと人の霊とが交わる場であり、私たちが思い、感じ、感情を抱き、そして決断するところです。[5] 心は、真理に応答するよう神によって造られています。しかし、その真理が拒まれるとき、そこには必ず別のものが入り込みます。すなわち、悪しき者が作り出した、何らかの偽り、あるいは偽りの体系です(ヨハネ 8 章 44 節)。[6]

(17)だから私は、主にあってあなたがたに言い、また強く求める。あなたがたはもはや、異邦人が歩んでいるように、[真理を欠いた]むなしい思いによって歩んではならない。(18)彼らはその思いにおいて暗くされ、彼らのうちにある[意図的な]無知のゆえに、また[真理に対して]**心がかたくなになって**いるために、神のいのちから遠ざけられているのである。(19)そして、彼らは感覚を失ってしまい、あらゆる不潔を貪るために好色に身をゆだね、飽くことのない欲望にふけっているのである。(エペソ 4 章 17-19 節/NIV 訳)

兄弟たちよ。あなたがたのうち、だれも不信仰[信仰の欠如]という悪い心を抱いて、生ける神から離れ去る(直訳「背教する」)ことがないように気をつけなさい。むしろ、「きょう」と呼ばれている間(すなわち、私たちがなおこの世にいる間)、日ごとに互いに励まし合いなさい。そうでないと、罪の惑わしによって、あなたがたのうちのだれかが[心を]**かたくなにされて**しまうかもしれないからである。(ヘブル 3 章 12-13 節)

信者が福音の栄光の光を受け入れ、それを受容するとき、私たちの心は真理によって照らされ、それ以前にあったあらゆるかたくなさから解き放たれます(エゼキエル 11 章 18-21 節, 18 章 31 節, 36 章 26 節; 第二コリント 5 章 17 節; ガラテヤ 6 章 15 節)。[7] しかし、人生の歩みの中で、もし私たちが真理に応答することを怠り、かえってこの世へと引き返し始めるなら、そのような選択は、私たちの内にある光を次第に曇らせていきます。かつてはみことばと主に対して柔らかであった心が、それらに対してか

---

[5] この内なる人は、聖書においては「魂(たましい)」とも呼ばれます。世俗的な聖書理解においてはしばしば混同されますが、聖書においては「心」と同義のものを指しています。BB 3A「人間論(Anthropology)」第 II 部 4 項「人間の二分説(The Dichotomy of Man)」参照。

[6] この過程についての詳細な事例研究については、「出エジプト 14 章:ファラオの心のかたくなさ(Hardening Pharaoh's Heart)」シリーズを参照してください。また、悪魔の偽りの体系に関する分析については、SR 4「サタンの世界システム(Satan's World System)」を参照してください。

[7] BB 4B「救済論(Soteriology)」第 II 部 7 項「霊的再生(Spiritual Rebirth)」参照。

たくなになっていくのです。この過程において罪が関わってくるのは、罪とは不法、すなわち神への反逆だからです（第一ヨハネ 3 章 4 節）。それゆえ信者は、過ちを犯したときには、すみやかに悔い改め、罪を告白するよう努める必要があるのです。

> 主は心の砕けた者に近く、霊の砕かれた者を救われる。（詩篇 34 篇 18 節/NKJV 訳）

> 神の受け入れられるいけにえは、砕かれた霊である。砕かれ、悔いた心を、神よ、あなたは軽んじられません。（詩篇 51 篇 17 節/NKJV 訳）

そして私たちは皆つまずく者であり、求めるなら赦しが約束されていますが（詩篇 32 篇 5 節; 第一ヨハネ 1 章 9 節）、もし信者が罪深い行いを悔い改めることを拒むなら、その人は、いわば主を遠ざけてしまい、私たちが日々あらゆる努力をもってそうすべきであるように主に近づくのではなく、かえって主から隔たった状態になってしまいます。光であられるこの方に背を向ける結果は、私たちの内なる人が、かつて私たちが不信者であったとき完全に支配していたあの暗闇へと、再び暗くされていくことです。イエス・キリストに対する私たちの信仰は、かつての心のかたくなさを打ち砕きました。しかしその後における主への反逆、不信仰、不信頼、主に対する不平、主から離れてこの世へ引き返すこと――これらすべての否定的な行動と態度は、私たちの霊的な循環を詰まらせ、霊的な視力を曇らせる結果にしかならないのです。

> (22)からだのともしびは目である。それだから、もしあなたの目が健やかであれば、あなたの全身は光で満ちるであろう。(23)しかし、もしあなたの目が悪ければ、あなたの全身は暗やみで満ちるであろう。それだから、もしあなたのうちにある光が暗やみであるなら、その暗やみは何と深いことであろう。（マタイ 6 章 22-23 節 NKJV 訳）

したがって、試練という圧力の下にあるときに主を信じないこと、主を信頼しないことは、単に本文の節が語っているように「みことばを信仰と結びつけない」という問題にとどまりません。そうした不信に**陥ること**には、結果が伴うのです。私たちは神を信頼するとき成長し、神を疑うとき後退します。困難のただ中にあってなお主を信頼すればするほど、私たちの信仰はより堅固になります。しかし主を疑い、自分の境遇について不平を言い、主の救いに確信を持てないでいるほど、霊的衰退は早まっていきます。そして、この逆方向の歩みを長く続けるなら、ついには心がかたくなになり、以前に持っていた信仰さえ消えかねないところにまで至ります。もっとも、そのような事態に至る前に、神は恵み深く愛に満ちた父として、私たちが立ち返るよう動機づけるに十分な神の

懲らしめを送られます。そのとき、このように道を誤った者たちにとってきわめて重要なのは、その愛ある矯正に正しく応答することです。気落ちするのではなく、悔い改めて実際に立ち返ること――それこそが神の懲らしめの目的だからです（ヘブル 12 章 3-13 節）。[8] 出エジプトの世代は、すべての試練に失敗し、このような神の矯正をことごとく退けたことで知られています。彼らはそれを意図的に行いました。神のかたちを有する存在、すなわち自由意志を持つ被造物として、私たちはどのように行動し、どのように反応するかを自ら決定するからです。たとえ感情の高ぶりの中でそうしたとしても、それに屈した責任はなお私たちにあります。パウロはエルサレムの信者たちに、この悲劇的な歴史に倣うことのないよう切に求めています。そうではなく、父の懲らしめに正しく応答し、主を信頼し、そのみこころを行い、心を尽くしてイエス・キリストに立ち返るように――そして、心をかたくなにし続けることのないように、と訴えているのです。

三節

> というのも、この安息に入るのは、**信じた**私たちなのであって、[信仰のない者たちではないからである。]主がこう言われたとおりである。「わたしは怒りのうちに誓った。『彼らは決してわたしの安息に入ることはない。』」（ヘブル 4 章 3 節）

この節が示しているとおり、信仰（あるいはその欠如）こそが、神の安息に入るか否かの決定的要素なのです。[9] 私たちはまず、イエス・キリストを信じるとき、すなわちこの方についての良き知らせの真理を信じるときに、神の平安、神の安息に入ります。そして、聖書のあらゆる真理を学び、信じ、それを適用していくことによって、恵みのうちに成長しつつ、その平安、その安息の中にとどまり、さらに前進し、より深く入っていくのです。出エジプトの世代も、最初は信じていたように見えます。しかし後には、ごく少数の例外を除いて、離れ去ってしまいました（ルカ 8 章 13 節）。彼らは「信仰によって」紅海を渡りましたが（ヘブル 11 章 29 節; 参照 出エジプト 14 章 31 節）、いよいよ約束の地に入る機会が与えられたとき、主の直接の語られたみこころに反逆し、十人の斥候の悪い報告を受け入れ、カレブとヨシュアの良い報告を退けたのです（民数記 13 章 1-33 節; 申命記 1 章 19-33 節）。これは、いわば「最後の決定打」でした。すなわち、数々のあわれみと赦し、忍耐を受け、またそれ以前にも幾度となく試練に失敗して

---

[8] BB 3B「罪論（Hamartiology）」第 IV 部 5 項「神的懲らしめの原則（Principles of Divine Discipline）」参照。

[9] このゆえに、主を信頼するこの状態を「信仰の安息（Faith Rest）」と呼ぶことは適切なのです。R.B.ティーム・ジュニア大佐著『信仰安息の生（The Faith-Rest Life）』（ベラカ出版、1961 年）参照。

きた後で(出エジプト 14 章 10-12 節, 15 章 22-24 節, 16 章 1-3 節, 16 章 19-20 節, 16 章 27-30 節, 17 章 1-4 節, 32 章 1-5 節; 民数記 11 章 1-3 節, 11 章 4-34 節, 14 章 3 節)、ついに主の忍耐が彼らに対して尽きたのです。

(22) わたしの栄光と、わたしがエジプトと荒野で行ったしるしを見ながら、この**十度もわたしを試み、**わたしの声に聞き従わなかった者たちは、(23) わたしが彼らの先祖たちに誓ったあの地を決して見ることはない。わたしを侮った者は一人として、それを見ることはない。(民数記 14 章 22-23 節/NIV 訳)

出エジプトの世代は、それ以前の十度にわたる試練のすべてにおいて主を信頼することを拒み、そのことによって主の安息に入ることを拒絶し続けました。そして今や、その反逆と不従順の上に最後の決定的な一石を積み重ねた結果、約束の地に入ることを禁じられたのです。パウロがエルサレムの信者たちを救おうとしているのは、まさにこのように、主を信頼することを一貫して拒み続けた末に、不信仰という最後の一線を越えてしまうことからなのです。

(23) みことばを聞くだけで、それを行わない人は、自分の生れつきの顔を鏡に映して見る人のようなものである。(24) 自分を見ても、立ち去ると、たちまち自分がどのようであったかを忘れてしまう。(25) しかし、自由を与える完全な律法をじっと見つめ、その中にとどまり、聞いて**忘れる者とならず**、それを行う者となる人は、その**行い**において祝福される。(ヤコブ 1 章 23-25 節/NIV 訳)

「みことばを行う者」であるとは、何よりもまず、聞いた真理を**信じること**を意味します(参照 ヨハネ 6 章 29 節「神の**わざ**とは、神がお遣わしになった者を**あなたがたが信じること**である」)。そしてまた、上の箇所が説明しているように、それは同時に「〔真理の中に〕とどまり続ける」こと、すなわち自分が信じた真理に従って生きることでもあります。信者は信じる者です。そして信じている以上、その信仰にふさわしく考え、語り、行動すべきなのです。そうでなければ、その人のいわゆる信仰は、実際には信仰ではありません。ただの知識にすぎず、信じられないままであるなら何の価値もありません。出エジプトの世代の場合と同じように、主への真実の信頼と結びつき、その真理に対して主が望まれるように応答することのない知識は、無価値なのです。

(14)わたしの兄弟たちよ、たとい人が、自分には信仰があると言っても、行いがないなら、何の益があるであろうか。そのような信仰が、その人を救うことができるであろうか。(15)もし兄弟または姉妹が着る物もなく、その日の食べ物にも事欠いている場合、(16)あなたがたのうちのだれかが、「安心して行きなさい。

暖かになり、十分に食べなさい」と言いながら、そのからだに必要な物を与えないなら、それが何の役に立つであろうか。(17)それと同じように、信仰も、それだけで行いが伴わないなら、死んだものである。(18)しかし、こう言う人があるであろう。「あなたには信仰があり、わたしには行いがある。」行いのないあなたの信仰をわたしに示してみなさい。わたしは行いによって、わたしの信仰をあなたに示そう。(19)あなたは、神はおひとりであると信じている。それはよいことである。しかし、悪霊どもも信じて、身震いしている。(20)ああ、愚かな人よ、行いのない信仰が役に立たないものであることを知りたいと思うのか。(21)わたしたちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげたとき、その行いによって義と認められたのではなかったか。(22)あなたが見ているとおり、彼の信仰はその行いとともに働き、その行いによって信仰は全うされたのである。(23)こうして、「アブラハムは神を信じ、それが彼の義と認められた」と言う聖書のことばは成就し、彼は神の友と呼ばれた。(24)このように、人は行いによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことがわかる。(25)同じように、遊女ラハブもまた、使者たちを迎え入れ、別の道から送り出したとき、その行いによって義と認められたのではなかったか。(26)霊のないからだが死んだものであるように、行いのない信仰も死んだものである。(ヤコブ 2 章 14-26 節/NIV 訳)

これは行いによる救いを教えている**のではなく**、また、たとえばパウロが他の箇所で宣べ伝えている恵みによる救い(ローマ 3 章 27 節, 4 章 2 節, 4 章 6 節, 9 章 11 節, 9 章 32 節, 11 章 6 節; ガラテヤ 2 章 16 節, 3 章 10 節; エペソ 2 章 8-9 節)に、いささかも反するものではありません。だれでも、自分には信仰があると言うことはできます。しかし真の信者の信仰は、その人が何を考え、何を語り、何を行うかによって証しされます。行いは信じていることを示します。なぜなら、信じていなければ、そのような行いは生じないからです。アブラハムもラハブも、主を信頼したことによって「義と認められ」ました。これこそが、私たちの救い主が私たちに望んでおられる「良い行い」なのです。それは、パウロの同時代の人々が立ち返ってしまったような、肉の律法主義的行いではありません。

彼らは神を知っていると言いながら、**その行いによって**神を否んでいる。彼らは忌むべき者であり、従わない者であり、どんな**良いわざ**にも不適格な者である。(テトス 1 章 16 節/NKJV 訳)

したがって、真の信者とは、神の信仰の安息を受け入れている者たちのことです。これこそ、私たちが召されている「わざ」なのです。すなわち、神がそれを成してくださると信頼し、その信頼の証しとして、主が私たちに命じられたことを実行していくことです。

「**信じた**私たちこそが、この安息に入る」のであり、他方、主に反逆し、圧力のかかる場面で繰り返し主を信頼することに失敗してきた者たちに対して、主はこう言われます。「そこで、わたしは怒って誓った。『彼らは決してわたしの安息に入ることはない』と。」もし出エジプトの世代が真に信じていたなら、主が命じられたとおりに行動し、入ることを拒むのではなく、約束の地に入っていたはずです。同様に、もし私たちが真に信じているなら、主が答えてくださり、救い出してくださるのを待ち望みつつ、その間、主が求められることを忠実に行うことによって、主の「信仰の安息日の安息」に入る信仰を実際に示すことになるのです。

> このゆえに、神のすべての武具を取りなさい。そうすれば、災いの日にあって対抗することができ、また、すべてを成し遂げたのちに[必要なことをすべて(霊的備えとして)行ったのちに、すなわち主があなたに行うよう召されたことをすべて果たしたのちに]、(主を待ち望み、信仰にあって主のうちに安息しつつ)**堅く立つことができるのである。**(エペソ 6 章 13 節)

四-五節

> (4)さて、[神]は第七日について、どこかでこのように語っておられるのである。「神は第七日に、そのすべてのわざを終えて**休まれた**」(創世記 2 章 2 節)。(5)しかし、ここでの聖句をもう一度引用すれば、[神]はこう言われたのである。「彼らは決してわたしの安息に入る**ことはない**」(詩篇 95 篇 11 節)。(ヘブル 4 章 4-5 節/NIV 訳)

第七日:

序論において、ある程度詳しく扱ったとおり、最初の第七日は、人類が住むにふさわしいよう世界を再構成された主のみわざの最終日でした。それは、人類が悪魔の反逆に対する神の解決を実現する存在となるためでもあったのです。[10] 主は、七日間に先立つはるか以前に、まばたきするほどの瞬時のうちに、もともとの宇宙、時間、空間を創造されました(ヨハネ 1 章 3 節; 第一コリント 8 章 6 節; コロサイ 1 章 16 節; ヘブ

---

[10] これらの事柄については、「サタンの反逆(Satanic Rebellion)」シリーズにおいて詳しく扱われています。特に、第 1 部「サタンの反逆と恵みからの堕落(Satan's Rebellion and Fall from Grace)」、第 2 部「創世記ギャップ(The Genesis Gap)」、第 3 部「人間の目的・創造・堕落(The Purpose, Creation, and Fall of Man)」を参照してください。

ル 1 章 2 節)。それと同じように、これから創造される人類のために、この世界を居住可能な状態へ整えることも、何の労苦もなく一瞬で行うことがおできになったはずです。七日間が設けられた目的は、選ばれた御使いたちにも、堕落した御使いたちにも、そして私たちにも、神の偉大な贖いのご計画の概略を示すためでした。その計画は、さばき、回復、置き換えを通して成就され、最終的には、新しい天と新しい地――そこには義のみが住むのですが――における永遠の平和と安息へと至るものです(第二ペテロ 3 章 13 節)。

したがって、創世記ギャップのさばきの後、堕落した御使いたちの代わりにキリストの花嫁を据える舞台を整えるかたちで行われた、主による天と地の回復のみわざにおける第七日は、神の全体的ご計画が最終的に完成に至ることを象徴しています。さらに、七日間全体は、人類史の大要を示す型を私たちに提供しており、その第七日は、その歴史の最終段階、すなわち大いなる平和と安息の時代――千年王国――を表しているのです。[11] 平和と安息、完全さと充足、祝福と光と真理――そこには暗闇も分裂も苦難も悲しみもありません――これらは常に、この世界に対する神のみこころでした。それを乱し得たのはただ罪の介入だけです。すなわち、サタンの反逆と、それに続くアダムとエバにおける人類の堕落です。そしてその平和を回復し得たのも、ただ神ご自身の介入、すなわちすべての人類の罪のための贖いのいけにえとしてこの世に来られたイエス・キリストというお方においてのみでした。私たちはまだ、その平和/平安が完全に回復された状態を見てはいません(この書簡の前の箇所でパウロが述べているとおりです。ヘブル 2 章 8 節)。しかしイエス・キリストを信じる私たちには、悪魔の支配するこの世にあって、キリストに属する者として、今まさに私たちが直面しているあらゆる反対にもかかわらず、神の安息に入ることから来るその平和を持ち、それを現して生きるという、祝福された機会が与えられているのです。[12]

> わたしは**平安**をあなたがたに残す。わたしの**平安**をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものではない。(ヨハネ 14 章 27 節)

> これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって**平安**を持つためである。(ヨハネ 16 章 33 節前半/NKJV 訳)

このように、わたしたちは信仰によって義と認められたのであるから、わたし

---

[11] 「サタンの反逆(Satanic Rebellion)」第 5 部「さばき・回復・置き換え(Judgment, Restoration, and Replacement)」参照。そこでは、神のご計画と七つの千年の日について論じられています。

[12] 「サタンの反逆(Satanic Rebellion)」第 4 部「サタンの世界体系(Satan's World System)」参照。そこでは、悪魔の現在の王国と、信者に対して用いられている戦術とが詳述されています。

たちの主イエス・キリストによって、神〔父〕との**平安**をしっかりと保とうではないか。(ローマ 5 章 1 節)

キリストの**平安**があなたがたの心を支配するようにしなさい。あなたがたは、この**平安**にあずかるために、一つのからだとして召されたのである。また、感謝する者となりなさい(コロサイ 3 章 15 節/NKJV 訳)

そうすれば、あらゆる理解を超えた神の**平安**が、キリスト・イエスにあって、あなたがたの心と思いとを守るであろう。(ピリピ 4 章 7 節)

どうか**平安**の主ご自身が、いつでも、あらゆることにおいて、あなたがたに**平安**を与えてくださるように。主があなたがたすべてと共にいてくださるように。(第二テサロニケ 3 章 16 節/NIV 訳)

この安息、この平安、すなわち完全さのシャローム(שָׁלוֹם／shalóm)に入り、そしてすべての信者に降りかかってくるさまざまな困難のただ中にあってなおそれを保ち続けることは、生涯にわたる課題です。しかしそれは、霊的に前進し、私たちの主イエス・キリストに従い仕えつつ、その栄光のために歩もうと願うすべてのキリスト者が、必ず取り組まなければならない課題なのです。

(12) 愛する者たちよ。あなたがたを試みるために臨んでいる火のような試練を、何か思いがけないことが起ったかのように不思議に思ってはならない。(13) むしろ、キリストの苦しみにあずかる者となるほどに喜びなさい。それは、その栄光が現される時、あなたがたもまた、大いなる喜びにあふれて喜ぶためである。(第一ペテロ 4 章 12-13 節/NKJV 訳)

(8) 身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽すべき者を求めて歩き回っている。(9)信仰に堅く立って、この悪魔に立ち向かいなさい。あなたがたの世界中の兄弟たちも、同じ苦しみを経験していることを知っているからである。(10)あらゆる恵みの神、すなわち、キリスト・イエスにあってあなたがたを永遠の栄光へと召してくださった神が、あなたがたがしばらく苦しみを受けた後、ご自身であなたがたを全うし、堅く立たせ、強め、揺るがぬ者としてくださるように。(第一ペテロ 5 章 8-10 節/NKJV 訳)

彼らは入ることはない：

エルサレムの信者たち――その大多数は――どうやら反対の歩みをしていました。すなわち、霊的成長と、困難や迫害にもかかわらず主を信頼することによってのみ受け取ることのできる神の安息と平安に入ろうと努める代わりに、人間の目には抵抗の最も少ない道に見えるほうを選び、すでに置き換えられた旧契約の儀式を形だけなぞることによって、不信者たちに歩調を合わせ、妥協していたのです。これまで見てきたように、この過程はいっそう誘惑的なものでもありました。というのも、それは慣れ親しんだ慣行へ立ち返ることを意味していたからです。これを今日に当てはめて言えば、日々良い聖書の教えに触れ、成長と前進を目指し、主が与えてくださる奉仕の機会に仕えるという献身に疲れてしまった信者にとって、生ぬるい教会に週に一度か二度出席するだけの「神への会釈」に後退するほうが、どれほど容易であることでしょう。当初は、それは容易であるだけでなく、圧力も軽くなります。というのも、悪魔は、自らの自由意思で戦いの場から退いた者たちを、それほど熱心に攻撃しようとはしないからです。しかし、この過程の行き着く先は霊的衰退です。エルサレムの信者たちの場合、それはさらに急速に進行したはずです。なぜなら、彼らが戻って行ったものは、その本質において、イエス・キリストの十字架のみわざの有効性を否定するものだったからです（今日において、たとえばローマ・カトリックやモルモン教のもとの宗教的土台へ逆戻りしてしまうことに類比されます）。霊的成長という困難な「良い行い」を拒み、代わりに律法へ立ち返ることによって、これらの信者たち、そして後にその悪しき模範に倣うすべての者たちは、聖霊なる神による真に良い行いの代わりに、自分自身の肉的行いに置き換えてしまっていたのです。主への信頼の欠如は、たとえどれほど自分の成し遂げたことを誇りに思っていようとも、結局のところ、むなしい人間的目的を追い求める結果へと必然的に至るのです。

> すると、どこにわたしたちの誇があるのか。全くない。なんの法則によってか。行いの法則によってか。そうではなく、**信仰の法則**によってである。（ローマ 3 章 27 節）

> もしアブラハムが、その行いによって義とされたのであれば、彼は誇ることができよう。しかし、**神のみまえでは、できない。**（ローマ 4 章 2 節）

> ダビデもまた、**行いがなくても**神に義と認められた人の幸福について、次のように言っている、（ローマ 4 章 6 節）

> まだ子供らが生れもせず、善も悪もしない先に、神の選びの計画が、**わざによ**

らず、召したかたによって行われるために、(ローマ 9 章 11 節,12 節前半)

なぜであるか。**信仰によらないで、**行いによって得られるかのように、**追い求めた**からである。彼らは、つまずきの石につまずいたのである。(ローマ 9 章 32 節)

しかし、恵みによるのであれば、もはや行いによるのではない。そうでないと、**恵みはもはや恵みでなくなる**からである。(ローマ 11 章 6 節)

人の義とされるのは律法の行いによるのではなく、ただキリスト・イエスを信じる信仰によることを認めて、わたしたちもキリスト・イエスを信じたのである。それは、律法の行いによるのではなく、キリストを信じる信仰によって義とされるためである。**なぜなら、律法の行いによっては、だれひとり義とされることがないからである。**(ガラテヤ 2 章 16 節)

いったい、律法の行いによる者は、皆**のろいの下にある。**「律法の書に書いてあるいっさいのことを守らず、これを行わない者は、皆のろわれる」と書いてあるからである。(ガラテヤ 3 章 10 節)

(8)あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。(9)決して行いによるのではない。それは、**だれも誇ることがないためなのである。**(エペソ 2 章 8-9 節)

六-七節

(6)[これら二つの箇所を(すなわち、創世記 2 章 2 節を詩篇 95 篇 11 節と)比べて見てみると、][神の民の]ある人々はこの神の安息に**入ることになる**、ということがわかるのである。というのも、先の[世代]にもまた、[救いの]福音が宣べ伝えられていたにもかかわらず、不信仰のゆえにそれに**入らなかった**からである。(7)そこで[神は]、もう一つの「日」、すなわち「今日」という日を定められたのである。[出エジプトの世代が過ぎ去ってから]多くの年月を経た後、ダビデを通して、[神]は次のように宣言しておられる。「**今日**、もし御声を聞くなら、あなたがたの心をかたくなにしてはならない……」。(ヘブル 4 章 6-7 節)

出エジプトの世代の不信仰は、神がアブラハムに与えられた約束を取り消す結果とはなりませんでした――その約束には、今日のすべての信者もまた、**信仰による**アブラハムの子孫としてあずかっているのです（ローマ 4 章 16 節; ガラテヤ 3 章 7-9 節, 3 章 14 節, 3 章 16-29 節, 4 章 28 節）。出エジプトの世代の反逆と不信仰は、神のご計画を終わらせることもありませんでした。当時においても、そして今も――またパウロの時代においても――ユダヤ人と異邦人の双方の中には、信仰によってイエス・キリストを通し父なる神のもとに来ようとする者たちがいましたし、今もいます。彼らは、この地上の歩みにおいて神の安息に入りつつ歩んでいるのです。

(3) では、ある者たちが信じなかったとしても、それが何だというのか。彼らの不信仰が、神の真実を無効にするであろうか。(4) 決してそうではない！ むしろ、すべての人を偽り者としても、神は真実な方であるとすべきである。こう書かれているとおりである。「それは、あなたが御言葉によって義とされ、あなたがさばかれる時に勝利を得るためである」。（ローマ 3 章 3-4 節/ NKJV 訳）

出エジプトの世代の不信仰、不忠実、反逆は、彼ら自身以外のだれをも害するものではありませんでした――そして同じことは、パウロの時代において、御子に背を向けることによって父なる神とその先祖たちへの約束から自らを遠ざけていた者たちにも当てはまりました……律法へ立ち返ることは、必然的にそのことを意味していたのです。それゆえ、出エジプトの世代に、またそれ以来すべての信者に約束されてきたこの「安息」は、自分自身のわざ――救いを決して生み出すことのできないわざ――をやめ、代わって十字架におけるキリストのみわざ、すなわち私たちのためのその死に立ち返ろうとするすべての者に、常に開かれてきたのです。パウロの同時代人たちもかつてはそうしていましたが、彼らは恵みから離れつつあり、その代わりに律法のわざを持ち込み、すでに彼らの身代わりとして死なれた実体なるメシヤではなく、やがて来られるメシヤを指し示している影の方を好んでいたのです。神のみことばの真理にとどまり続けることによってのみ、この安息に入り、またその中にとどまり続けることができます。どのような種類であれ、わざの行いへと逆戻りすること、主よりも自分自身を信頼すること、真理をなおざりにし、この世と世的な物の見方へ立ち返ることは、霊的衰退をもたらし、それが放置されていると、やがて信仰そのものの消失へと至るのです。

(1)「わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫である。(2) わたしにつながっている枝で、実を結ばないものはすべて、父が取り除かれる。また、実を結ぶ枝はすべて、さらに多くの実を結ぶように、父が刈り込まれる。(3) あなたがたは、わたしがあなたがたに語った言葉によって、すでに清くされている。(4) わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしもあなたがたのうちに

つながっている。枝がぶどうの木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶことはできない。(5) わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。わたしにつながっており、わたしもその人のうちにつながっている者は、多くの実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからである。(6) だれでもわたしにつながっていないなら、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして人々はそれらを集め、火に投げ込むので、それらは焼かれてしまう。」(ヨハネ 15 章 1-6 節/ NKJV 訳)

あらゆる悪く危険な行い、すべての怠慢でなおざりな振る舞いと同様に、悔い改め、向きを変え、正しい道へ戻るべき時は、立ち返るための時がまだ与えられており、さらに大きな害が及ぶ前の、まさに今――**きょう**なのです。

(12)それゆえ、力なく垂れた手と弱ったひざを強くしなさい。(13) また、あなたがたの足のためにまっすぐな道を作りなさい。それは、弱っている足が道を外れることなく、むしろいやされるためである。(ヘブル 12 章 12-13 節/NKJV 訳)

八-十節

(8)もしヨシュアが、[出エジプトの世代とその子らに、この]安息を与えていたのであれば、[神]はそれらの[先の]出来事からこれほど後になって、別の「日」[の安息]について語られることはなかったはずである。(9)だから、神の民のためには、なお「安息日の安息」(サッバティスモス〔σ α β β α τ ι σ μός／sabbatismós〕)がなお残されて**いる**のである。(10)というのは、ちょうど神がご自身のわざをやめられたのと同じように、[神の]安息に入った者は、自分のわざをやめているのである。(ヘブル 4 章 8-10 節/NIV 訳)

ヨシュア:

ヘブル語においてもギリシヤ語においても、「ヨシュア」という名は「イエス」という名と区別がつきません。英語でどのように音訳・表記されようとも、その名は本来のヘブル語において「主は救う」という意味を持っています。私たちの主イエス・キリストこそ私たちの救い主であられるのですから、その御名については、改めて説明を要しません。

(20)しかし、彼がこれらのことを思い巡らしていると、見よ、主の使いが夢の

中で彼に現れて言った。「ダビデの子ヨセフよ、妻マリヤを迎えることを恐れてはならない。彼女のうちに宿っているものは、聖霊によるのである。(21) 彼女は男の子を産む。その名を**イエス**とつけなさい。**この方がご自分の民をその罪から救うからである。**」(マタイ 1 章 20-21 節/NKJV 訳)

ヨシュアがこの文脈において取り上げられているのも、まさにその名の意味ゆえに適切なのです。ヨシュアはキリストの「予型」でした[13]。すなわち、旧約の他のある信者たち(とりわけダビデ)と同様に、ヨシュアの生涯と働きのいくつかの側面は、ある点において私たちの主を予表し、対応関係をなすものとして与えられています。この文脈で最も顕著なのは、ヨシュアがイスラエルの民を約束の地へ導き入れたことが、メシヤがハルマゲドンの勝利の後、地の四方からユダヤ人をイスラエルの地へと勝利のうちに再集結させることに対応している点です。[14] いずれの場合においても、イエス(そしてヨシュア)は、神の民に安息を与えます――すなわち、約束の地における身体的な安息です。

(43)このように、主が、イスラエルに与えると、その先祖たちに誓われた地を、ことごとく与えられたので、彼らはそれを獲て、そこに住んだ。(44)**主は**彼らの先祖たちに誓われたように、**四方に安息を賜わった**ので、すべての敵のうち、ひとりも彼らに手向かう者はなかった。主が敵をことごとく彼らの手に渡されたからである。(45)主がイスラエルの家に約束されたすべての良いことは、一つとしてたがわず、みな実現した。(ヨシュア 21 章 43-45 節)

(1)主はヤコブをあわれみ、イスラエルを再び選んで、これをおのれの地に置かれる。異邦人はこれに加わって、ヤコブの家に結びつらなり、(2)もろもろの民は彼らを連れてその[神より定められていた]所に導いて来る。そしてイスラエルの家は、主の地で彼らを男女の奴隷とし、さきに自分たちを捕虜にした者を捕虜にし、自分たちをしえたげた者を治める。(3)主があなたの苦労と不安とを除き、またあなたが服した苦役を除いて、**安息をお与えになる**とき(すなわち、千年王国の時)、(4)あなたはこのあざけりの歌をとなえ、バビロンの王(すなわち、反キリスト)をののしって言う、「あの、しえたげる者(すなわち、反キリスト)は全く絶えてしまった。あの、おごる者[都](すなわち、奥義なるバビロン)は全く絶えてしまっ

---

[13] 聖書の基礎第 4 部 A「キリストについての研究(Christology)」I.c.「旧約における予型論(Old Testament Typology)」参照。

[14] 『来たる艱難期(Coming Tribulation I)』Ⅳ.1.b.「『主の日』の枠組み(The "Day of the Lord" Paradigm)」<A5 版印刷本では 68 頁>および同 d.「旧約預言における予型論と時系列(Typology and Sequence in Old Testament Prophecy)」<A5 版印刷本では 96 頁>参照。

た。(イザヤ 14 章 1-4 節)

しかし、キリストの予型としての務めにおいてヨシュアが、出エジプト世代の子らに約束の地で身体的安息を与えたとはいえ(それは、メシヤなるイエス・キリストが千年王国において、全ユダヤ民族に対して完全かつ比類なきかたちで与えられる安息の予型ですが)、ここでパウロが念頭に置いている安息は、そのようなものではありません。むしろ、その身体的安息は、すべての信者が入るよう召されている、より重要な霊的安息を示す一時的な類比にすぎないのです。出エジプト世代の子らは、主が彼らの敵を打ち破られた後、平安と安息のうちにその地へ入りましたし、同様のことが、再臨の後には世界のユダヤ人に起こると預言されています。しかし、その間この世にあって歩む私たち信者に約束されている霊的安息は、どのような身体的祝福よりもまさるものです。というのも、この世において私たちが持ち得るいかなるものも――それが現在のものであれ、艱難期のものであれ、あるいは千年王国のものであれ(すなわち、獣の刻印を受けずに艱難期を生き延び、その中に入ることを許される未信者に与えられる祝福であっても)――それらはすべて一時的なものにすぎないからです。この世界そのものが永続するものではなく、終わりがあり、私たちがここにとどまる短い滞在もまた同様です。しかし、イエス・キリストを信じる者として私たちが入る権利を持つこの霊的安息は、永遠に続くものです。そして、主の霊的安息に入ることによって生じ、それに伴い、それに続く成長・前進・実りに対して与えられる報いもまた、永遠にわたって存続するのです。

新しい安息日:

序論で説明したとおり、教会時代、すなわち御霊の時代に属する信者たちは、モーセの律法における土曜日の安息日を守ることを求められてはいません。むしろ私たちは、自分自身のわざではなく、主イエス・キリストとその恵みに拠り頼むことによって主をあがめる、瞬間瞬間の「安息の休み」を受け入れ、尊び、その中に入ることを求められているのです。これこそ今、私たちに命じられていることなのですから、私たちはそれを熱心に求めるべきです。これを怠ることは、主を信頼することを拒んだ出エジプト世代の悪しき前例に加わることにほかなりません。そしてまさにこの点において、当時のエルサレムの信者たちは罪を犯していたのです。

本文脈で「安息日の安息」と訳されている語は、ギリシヤ語サッバティスモス(σαββατισμός/sabbatismós)であり、きわめてまれな名詞で、おそらくパウロ自身によって造られた語と考えられます(この箇所以外では、主としてこの節を参

照する後代の教父文献に見られるのみです)[15]。パウロは、「安息日(サバト/σάββατον)」という語と明確に結びつけつつも、わずかに異なる新語を意図的に用いることによって、律法における従来の一日限定の遵守と、御霊の時代に属する信者が今や守るべき、常にある「安息の休み」との区別をきわめて明瞭に示そうとしたのです。前者は儀礼的・身体的なものであり、後者は動的・霊的なものです。そして、旧契約の律法が新契約における御霊の約束へと置き換えられた今、前者を文字どおりに守ろうとすることは、「常に主の安息に入る」という新しいかたちにおいて第四戒を守るうえで大きな妨げとなります。というのも、律法主義――すなわち自分自身のわざによって神の恵みを得ようとする態度――は、恵みと本質的に相容れないからです。わざは定義上、安息ではありません。安息とは定義上、自分のわざではなく恵みに拠り頼むことです。この後者のあり方こそ、私たちが救われた方法であり、また救われた後、キリスト者として歩むべき生き方でもあるのです。

> (8)あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。(9)決して行いによるのではない。それは、だれも誇ることがないためなのである。(エペソ 2 章 8-9 節)

その違いは、多くの場合、態度の問題――すなわち、私たちが心の奥底でどのように考えているかという点に関わっています。私たちが何かを行うとき――たとえば試験勉強をするとき――成功を自分自身の努力のみに全面的に依存し、そのことを誇り、結果として神の是認を当然のものとして期待しているのか、それとも成功を主に委ね、主を信頼しつつ主をあがめるために勤勉であろうとしているのか、その真実を見分けることができるのは神のみです。また、もし私たちが自分の肉的努力によって神のために「何かを成し遂げよう」とし、「自分が行ったこと」によって真に何かを受けるに値する者となろうとして働くならば(参照:ローマ・カトリックにおける「義務以上の善行〔功徳過剰のわざ: works of supererogation〕」)、それは神の恵みによる信仰を通して救われることと正反対です。アブラハムは主を**信じ**、その**信仰**が「義と認められた」のです(ローマ 4 章 3 節, 4 章 5 節)。彼が神に義と認められたのは、パリサイ人たちが行っていたような「律法のわざ」を何か行ったからではなく、神が救いを備えてくださると**信頼した**からでした(ガラテヤ 2 章 16 節)。

---

[15] この語は、ギリシヤ人伝記作家プルタルコスの著作にも見られる可能性があります(『迷信について』De superstitione: 164e-171f)。しかしそれは、おそらく修道院写本における本文上の誤記で、本来は正しくは「バプティスモス(βαπτισμός/baptismós)」であったと考えられます。たとえその箇所が正しい読みであったとしても、それでもなお『ヘブル書』より後の用例であり、その場合であっても本書簡から派生した用法である可能性が高いのです。

(2)もしアブラハムが、その行いによって義とされたのであれば、彼は誇ることができよう。しかし、神のみまえでは、できない。(3)なぜなら、聖書はなんと言っているか、「アブラハムは神を**信じた**。それによって、彼は義と認められた」とある。(4)いったい、働く人に対する報酬は、恩恵としてではなく、当然の支払いとして認められる。(5)しかし、**働きはなくて**も、不信心な者を義とする神を**信頼する**人は、その**信仰**が義と認められるのである。(ローマ 4 章 2-5 節/NIV 訳)

したがって、前に引用した箇所をはじめ聖書の他の多くの箇所においても、恵みはわざと対立するものとされている以上、神はへりくだる者に恵み〔恩寵〕を与えられる(ヤコブ 4 章 6 節; 第一ペテロ 5 章 5 節)という点がしばしば強調されます。すなわち、恵みが与えられるのは、**信仰によって**神のあわれみを求め、正しい態度で神に近づく者に対してであって、「自分は神のために何かをしているのだから、神から何かを受けるに値する」と思い上がる者に対してではありません(参照.ルカ 18 章 9-14 節)。このように聖書においては、恵み――すなわちキリストの犠牲に基づいて無償で与えられる神の恩恵――と、[人間の]わざ――すなわち神は私たちや私たちの努力を必要としておられるかのように思い上がる態度――とは、互いに両立し得ないものとされているのです。

しかし、恵みによるのであれば、もはや行いによるのではない。そうでないと、恵みはもはや恵みでなくなるからである。(ローマ 11 章 6 節)

それゆえパウロは、読者たちが今たどっている道――すなわち律法の死んだわざへと逆戻りすること(あるいは、主の益のためと称して「グノーシス的な霊的戦い」を行うこと)――が、ささいな妥協にすぎない問題ではないことを、強く刻みつけようとしているのです。それはむしろ、彼らがこれまで信じてきたすべての土台を掘り崩すものであり、そのまま行き着くところまで行けば、彼らの信仰そのものを完全に破壊してしまう力さえ持っているのです。

律法によって義とされようとするあなたがたは、キリストから離れてしまっている。恵みから落ちている。(ガラテヤ 5 章 4 節)

十一節

(11)それゆえ私たちは、[継続的で霊的な]その安息に入るよう熱心に努めようではないか。同じ不従順の[出エジプトの世代が見せたような]あの型――に陥って、だれも[恵みから]落ちることがないためである。(ヘブル 4 章 11 節)

真の信仰の安息に入った者はだれでも、救いを得るために自分のわざによって働こうとすることをやめています――それが、救いの手段として誤って律法に頼ることであれ、「神を助ける」ためと称して、いわゆるグノーシス主義的な霊的戦いに携わることであれ、あるいはその他どのような肉的手段によるものであれ同様です。それゆえパウロは読者たちに対し、その真の信仰の安息、すなわち主を信頼する安息に入るため、あらゆる努力をもって熱心に求めるよう訴えています。それは、救うことのできない律法のわざや、その他いかなる律法主義的体系、宗教的体系へと逆戻りすることではありません。逆戻りするなら、出エジプトの世代が陥った、信仰を破壊する不従順という同じ罠に陥ることを意味します。彼らや当時のエルサレムの信者たちが、恐れに屈して妥協へと流れたのとは対照的に、私たちイエス・キリストを信じる者は、やがて来ようとしているすべての事柄に対する確信に満ちた平安と希望のうちに生きるよう召されているのです。それこそが主が私たちに約束しておられる安息であり、**信仰によって**のみ入ることのできるものなのです。

(4)主にあっていつも喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。(5)あなたがたの寛容さが、すべての人に知られるようにしなさい――主は近い。(6)何も思い煩ってはならない。ただ、あらゆることにおいて、感謝をもって祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。(7)そうすれば[そのとき]、あらゆる思いを超える神の**平安**が、キリスト・イエスにあって、あなたがたの心と思いとを守るのである。(8)それで前進して行くにあたり、兄弟たちよ、あなたがたが学んできた多くの[すばらしい]事柄を[思い巡らし続けなさい]。すなわち、真実なこと、神を敬うこと、正しいこと、聖いこと、[神に]喜ばれること、敬虔なこと――もしあなたがたが[キリスト者としての歩みにおいて]徳を[培っている]のなら、また[さばきにおいて神から]称賛を[受けることを]望むのなら――これらのことを思い巡らしなさい。(9)[これらすべてのことを]あなたがたが学び、[信じて心に]受け入れ、聞き、そして私の歩みにおいて見てきたことを、そのとおりに行いなさい(すなわち、成長し、前進し、実を結びなさい)。そうすれば、**平安**の神があなたがたと共におられるであろう。(ピリピ 4 章 4-9 節 /NIV 訳)

(16)というのは、人は自分よりも大いなるものを指して誓うのが常であり、誓いは確証のために立てられるものであって、その点について疑いの余地はまったくないからである。(17)それと同様に神は、ご自身の約束の相続者である私たちに対し――[アブラハムの信仰の型にしたがって]――この事柄における[救いと、それに伴う祝福に関する]ご自身のみこころが不変であることを、いっそう明確に示そうと望まれ、誓いをもってそれを保証されたのである(創世記 22 章 16-17 節)。(18)それは、神が偽ることのできない二つの不変の事柄(すなわち、ご自身のみことばと誓い)によって、[来たるべき御怒りから]逃れ、この望み(すなわち永遠のいのち、復活、永遠の報いの望み)をしっかりと握っている私たちが、力強い励ましを得るためであった。(19)そしてこの**望み**こそ、[まことに]私たちのいのちを、いわば「錨」のようにつなぎとめるものである。それは確実であり、堅固であり、[天の]幕の内側、すなわち[至聖所]の奥にまで達している。(20)そこに、私たちの先駆けとして、イエスが私たちのために入られたのであり、メルキゼデクの位にしたがって、永遠の大祭司となられたのである。(ヘブル 6 章 16-20 節)

父なる神および父の御子イエス・キリストから、恵みとあわれみと平安とが、真理と愛のうちにあって、わたしたちと共にあるように。(第二ヨハネ 1 章 3 節 /NIV 訳)

この世の騒がしさと激しい動きのただ中にあって平安を保ち、これから来る数々のすばらしい事柄への望みに心を据え続けること――それこそが、教会時代の信者にとって第四戒に代わるものとなった「信仰の安息」に入り、そこにとどまり続けるあり方なのです。したがって、この「安息」は、怠惰や努力の欠如を意味するものではありません。決してそうではありません。すべての信者は、霊的に成長し、イエス・キリストとの歩みにおいて前進するよう召されています(そこには、聖書が明確に「わざ」と呼ぶ試練を通過することも含まれます。ヤコブ 2 章 14-26 節)。また、与えられている霊的賜物を正しく用いることによって、主のために実りを生み出すことも求められています。問題となるのは、その「わざ」が肉的で私たち自身に由来するものなのか、それとも御霊に由来し、神のご計画の前進のために御霊によって力づけられて行われる神よりのものなのか、という点です(マタイ 5 章 16 節; ガラテヤ 6 章 9 節; 第二テサロニケ 3 章 13 節; テトス 2 章 14 節; ヘブル 10 章 24 節; 第一ペテロ 2 章 12 節参照)。

(10) わたしたちは神の作品であって、キリスト・イエスにあって、良いわざを行うために創造されたのである。神は、わたしたちがそれらの**[良い]わざ**のうちを歩むようにと、あらかじめそれらを**備えておられた**のである(すなわち、それらを

成し遂げることのうちに、わたしたちキリスト者としての生を生きることになるためである)。(エペソ 2 章 10 節)

したがって、一方において、不信者たちが天に入ろうとして「神のために」と称しつつ行う肉的な人間のわざと、他方において、信者が聖霊の力によって行うよう与えられている、真に神にかなった良いわざとの間には、決定的な違いがあります。前者は行いであり、後者は恵みです。私たちが神の安息のうちにあって、主が導き、力づけてくださることを信頼して歩むとき、私たちの行うことは真に「良い」ものとなります。これに対して、どのような形であれ律法主義に関わり、聖霊の力ではなく肉の力によって行動し、イエス・キリストが私たちに望んで**おられない**ことを行うなら、私たちは天における宝を少しも積み上げていないばかりか、あらゆる報いを受けることの基盤である信仰そのものを危険にさらしているのです。

(8)よく注意して、わたしたちの働いて得た成果を失うことがなく、豊かな報いを受けられるようにしなさい。(9)すべてキリストの教をとおり過ごして<「道を踏み外し」-NIV>、それにとどまらない者は、神を持っていないのである。その教にとどまっている者は、父を持ち、また御子をも持つ。(第二ヨハネ 1 章 8-9 節)

私たちが永遠の報いとして正当に得ているものを失う唯一の道は、永遠のいのちそのものを失ってしまうことです。したがって、すでに廃れた律法へと立ち返る(エルサレムの信者たちがそうしていたように)といった律法主義的行為の体系に関わることも、あるいは今日において、どのような理由であれ宗教的体制と妥協すること(たとえばローマ・カトリックや他の律法主義的運動へ戻る人々のように)、さらには近い将来、獣によるきわめて魅力的なグノーシス的宗教に取り込まれてしまうという恐るべき過ち(艱難期に入る信者の三分の一がそうすると預言されている)を犯すことも、永遠の将来を一杯のあつもの(つまらない一時的利益)のために賭けることに等しいのです。

また、一杯の食物と引き換えに自分の長子の権利を売ったエサウのように、不品行な者や神を軽んじる者がいないようにしなさい。(ヘブル 12 章 16 節 /CSB 訳)

十二-十三節

(12)というのは、神のみことばは生きており、力があり、どんな両刃の剣より

も鋭く、霊とその地上的いのちとを切り分け、また骨とその髄とをも切り分けるほどにまで貫き通すからである。[それは](すなわち、良心のうちに宿るみことばは)心の思いと考えとを見分ける者として働くのである。(13)また、被造物のうちで、御前に見えないままでいられるものは一つもない。すべてのものは、この方の目の前に裸にされ、あらわにされている。私たちはこの方に対して申し開きをしなければならない。(ヘブル 4 章 12-13 節)

この段落は、「信仰の安息」に入るように、すなわち自分自身の肉的なわざをやめ、御霊と真理に応答するようにというパウロの勧告の直後に置かれており、読者たちに、自分たちがだれに属しているのかを思い起こさせる意図をもっています。主は、私たちすべての心の内にあるものを完全に知っておられます。罪や反逆は、みことばであられる神ご自身から隠しおおせるものではありません。エルサレムの信者たちは、多くのことを忘れていました――それは、彼らの良心が思い起こさせようとしていた、心の内の真理という点においてです。彼らは聖霊によるその内的な促しを押し殺し、代わりに、律法の誤った解釈(あるいはグノーシス主義における空想的神話化)へと戻っていました。しかし、神のみことばが単に外から語りかける書かれた言葉にとどまらず、信仰によって心の内に蓄えられ、御霊によって力づけられているならば、それはあらゆる偽りを貫き、あらゆる誤った教えに罪を示す力ある剣となります(エペソ 6 章 17 節)。それにもかかわらず、かつては信仰に立っていたこれらの信者たちが、そのような経験をしていないという事実そのものが、彼らがどれほど大きく後退してしまったかを示しているのです。

神のみことば:

この箇所は、神のみことばのすばらしさを示すものとして、ふさわしくもよく引用されます。私たちが愛する救い主を知るに至ったのも、このみことばによってのみであり、また日々その方にいっそう近づいていくのも、このみことばを通してのみです。これ以上に驚くべきこと、これ以上に荘厳なものがあるでしょうか。しかし同時に、この文脈において第一に理解されるべきなのは、そのみことばの畏るべき御性質――そしてそれを語られる方ご自身の畏るべき御性質――さらに、そのみことばとその方とを拒む者に臨むべき恐るべき結果なのです。

初めに言があった。(ヨハネ 1 章 1 節前半)

そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた。(ヨハネ 1 章 14 節)

初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、**いのちの言**[イエス・キリスト]について――(第一ヨハネ 1 章 1 節)

(11)また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。そしてそれに乗っておられる方は、「忠実にして真実」と呼ばれ、義をもってさばきをなし、戦いをされるのである。(12)その目は燃える火の炎のようであり、その頭には多くの[王]冠があり、また[それらに]名が記されていたが、それを知る者はその方ご自身のほかにはいない。(13)その方は血に染まった衣をまとっておられ、その名は[常に]「**神のみことば**」と呼ばれている。(黙示録 19 章 11-13 節)

みことばは御父のみこころであり、御父のご計画です(コロサイ 1 章 19-20 節)。そして、みことばとはイエス・キリストその方です。

御子は[御父なる]神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿であって、その力ある言葉をもって万物を保っておられる。(ヘブル 1 章 3 節前半)

イエス・キリストは生ける神のみことばであり、またご自身こそが、神の書かれた、そして語られたみことばの内容**そのもの**です。聖書に記された真理のことばを読むとき、その読む行為に御霊が働いておられるならば、そこにイエス・キリストを見いださないということはあり得ません。というのは、聖書全体が、この方について語っているからです。

あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである。(ヨハネ 5 章 39 節)

聖書に敵対して戦うことは、真理に敵対して戦うことです。
そして、真理に敵対して戦うことは、イエス・キリストに敵対して戦うことなのです。

イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、**真理**であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。(ヨハネ 14 章 6 節)
(参照. ヨハネ 18 章 37 節)

イエスは神のみことばであり、それゆえ「生きて」おられます。主は永遠に生きておられ、ご自身のうちに永遠のいのちを持っておられるように(ヨハネ 1 章 4 節, 5 章 17 節)、みことばであられるその方についてのことば――すなわち、そのみことば――

は、聖霊によって証しされるその真理を受け入れるすべての者にとって、永遠のいのちへの鍵となるのです(ヨハネ 3 章 15-16 節; 第一ヨハネ 5 章 13 節)。また、イエスは神のみことばであり、それゆえ「力ある」お方です。神として全能であり、世の救い主として、生と死とに対する権威を持つお方であられます(マタイ 28 章 18 節; 黙示録 1 章 18 節)。それゆえ、ご自身が神のご計画そのものであり、ロゴス(λόγος)、すなわち受肉された神のみことばであるその方の真理に従う者は、滅びることなく、永遠のいのちを持つのです(ヨハネ 3 章 16 節)。

> (11)次の言葉は確実である。「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう。(12)もし耐え忍ぶなら、彼と共に支配者となるであろう。もし彼を否むなら、彼もわたしたちを否むであろう。(13)たとい、わたしたちは不真実であっても、彼は常に真実である。彼は自分を偽ることが、できないのである」。(第二テモテ 2 章 11-13 節)

信者である私たちにとって、イエス・キリストはあらゆる意味において私たちのいのちです。主の死によって、私たちはいのちを得ました。私たちは主に従うことを選び、主についての良き知らせを信じ、そしてその後は、主ご自身である真理に心を向けることによって、主に従い続けてきたのです。信者にとって、真理こそがこの人生の中心であり、また私たちの存在そのものの核心です(第二ペテロ 3 章 18 節)。しかし、その真理からそれてしまうならば、もしこの世の快楽を求めて(グノーシス主義者たちがそうであったように)、あるいはこの世的な安心を求めるという全く見当違いの動機から(神殿の儀式へ立ち返っていた人々のように)、過去の偽りへと逆戻りするならば、私たちはみことば――すなわち、私たちが属しているからだのかしらである方――との結びつきを危うくすることになります(コロサイ 2 章 18-19 節)。そして、このような後退、このような逆行が、その行き着くところまで進めば、その終着点は、かつていのちとして受け入れたその方――生ける神のみことばである方――にあるいのちではなく、むしろ死となるのです。

> 人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ、さそわれるからである。 欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す。(ヤコブ 1 章 14-15 節)

両刃の剣よりも鋭く:

この文脈で語られている剣とは、マカイラ(μάχαιρα)――すなわちローマ軍団が用いた両刃の短剣、「スペイン剣」と呼ばれる種類の武器です。ギリシヤのファランクスが、密集した歩兵隊形によって槍を構え、敵戦列を押し破ることに依拠していたのに対し、ローマ軍団ははるかに柔軟な戦術を備えていました。とりわけ起伏のある地形

では、敵と交戦する際にファランクスの隊列に隙間が生じることがありましたが、ローマの軍団は地形の起伏や戦闘の流動に応じて形を変えられるよう設計されていたのです。軍団兵は五人単位の小集団でクインクンクス（さいころの「五」の目のような配置）を形成し、どれほど小さな隙間であっても、それを突いて突入し、また自ら隙間を生み出すこともできました。この任務遂行には、訓練と規律に加え、装備も決定的に重要でした。スクトゥム（扉のような大型盾）は槍の突きを防ぎ、盾と盾がぶつかり合う至近距離では、この両刃の剣が、あらゆる攻撃機会に対して短く鋭い突きによって用いられました。したがってマカイラは、ブロードソードのように大きく振りかぶる勢いに頼る武器ではなく、その尖った先と両刃の鋭さそのものに威力を依存する武器であったのです。

> また、[この霊の戦闘において]救のかぶとをかぶり、御霊の剣(マカイラ)、すなわち、神の言を取りなさい。(エペソ 6 章 17 節)

この比喩においては、聖霊によって力づけられた神のみことばは無敵であり、あらゆる偽りを打ち破り、すべての敵の要塞を攻略します（第二コリント 10 章 4 節）。聖書の真理は、私たちがこのキリスト者の歩みにおいて従事している霊的戦いにおける、信者の主要な攻撃用武器です。これなしには、私たちはまったく無防備となってしまいます。しかし本箇所の文脈においては、語りかけられている信者たちは、この剣を用いていませんでした。彼らは偽りに反撃することも、敵の攻撃を切り抜けて戦うこともしていなかったのです。彼らが直面していた二重の脅威――すなわち、霊的成長、さらには救いそのものに対する危機であった律法主義への妥協と、グノーシス主義から来る誘惑――から自分たちや仲間を守るために、真理の剣を用いる代わりに、彼らはこの武器を鞘に納めたままにし、敵の側へと歩み寄っていたのです。

> (12)そこでわたしは、わたしに呼びかけたその声を見ようとしてふりむいた。ふりむくと、七つの金の燭台が目についた。(13)それらの燭台の間に、足までたれた上着を着、胸に金の帯をしめている人の子のような者がいた。(14)そのかしらと髪の毛とは、雪のように白い羊毛に似て真白であり、目は燃える炎のようであった。(15)その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、声は大水のとどろきのようであった。(16)その右手に七つの星を持ち、**口からは、鋭いもろ刃のつるぎがつき出ており**、顔は、強く照り輝く太陽のようであった。(黙示録 1 章 12-16 節)

パウロがこの書簡の後半で断言しているとおり、「生ける神の御手に陥ることは恐ろしいことである」（ヘブル 10 章 31 節）と言えます。私たちの主イエス・キリストは、想像をはるかに超えた畏るべきお方です。私たちがみことばの剣を振るうことが許されてい

るのは、みことばであられる主ご自身が、それを私たちに与えてくださったからです。しかし、主が望まれるように主の隊列の中で戦うのではなく、もし私たちが隊列から離れ、怠慢に流れ、あるいは軍旗を捨てて離反するようなことがあるならば、そのときは、この同じ剣が**自分に向けられる**ことのないよう、十分に警戒しなければならないのです。

> それにもかかわらず、主もまた賢くいらせられ、必ず災をくだし、その言葉を取り消すことなく…(イザヤ 31 章 2 節前半)

> だから、悔い改めなさい。そうしないと、わたしはすぐにあなたのところに行き、わたしの口のつるぎをもって彼らと戦おう。(黙示録 2 章 16 節)

魂と霊を切り分け、骨と骨髄を切り分けること:

この比較の要点が、神のみことばの比類ない貫通力を表すことにあるのは明らかです。しかし、それが具体的にどのように表現されているのかについては、いくらかの説明を要します。パウロはこの点を示すために、二つの事例――一つは霊的なもの、もう一つは身体的なもの――を挙げており、後者は前者を説明するために付け加えられています。すなわち、聖書的人間論や心理理解について相応の基礎知識がなければ、霊的な側面を扱う最初の比喩は、霊的に未熟な信者には理解しにくい可能性が高いのです。そこで、それを説明するために、より把握しやすい身体的類比が添えられているのです。しかも、エルサレムの信者たちは霊的に著しく後退していました(ヘブル 5 章 12 節「あなたがたは…もう一度神の言の初歩を、人から手ほどきしてもらわねばならない始末である。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要としている。」)そのためパウロは、だれにでも理解できる身体的類比を示しているのです。

骨の中には骨髄があります。しかし、この両者を完全に切り離すことは容易なことではありません。というのも、それらは神の設計によって生命的に結びつけられており、特に古代世界の医療技術においては、それを試みれば死を招く結果となったからです。同様に、魂と霊もまた別個のものではありますが、それを区別することさえ――まして分離することは――人間にはいっそう困難であり、実際には不可能です。ただし、神を除いては、です。そして実際、この両者が分けられるのは、肉体の死のとき、神が人の霊を身体から取り去られる場合に限られています。

> 主なる神は土のちりで人(すなわちアダムのからだ)を造り、命の息(すなわち人の霊)をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者となった(ヘブル語ネフェシュ[ギリシヤ語プシュケー]、すなわち「魂」)。(創世記 2 章 7 節)

これまでにも述べてきたように、神は人間を二分的存在（ディコトミー）として造られました[16]。すなわち、上の節に見られるアダム創造の事例と同様に、すべての人間は肉体と人の霊とを持っています。誕生のときに後者――すなわち「いのちの息」――が吹き入れられることによって、私たちは肉体的生命を得ます（胎内での生殖そのものによるのではありません：ゼカリヤ 12 章 1 節後半；参照．民数記 16 章 22 節；イザヤ 57 章 16 節；使徒行伝 17 章 25 節；第一テモテ 6 章 13 節前半；ヘブル 12 章 9 節）。神が誕生のとき、私たちの肉体のうちに人の霊を創造して与えられるとき、私たちは完全な人格的存在――すなわち「魂」となります。これが、聖書における「魂」という言葉の意味です。魂とは、体や霊とは別に存在する独立したものではなく、体と霊が神によって結び合わされた結果として存在するようになった、生きた人間全体を指します。霊が体を離れると死が生じ、後には体だけが残ります。それはもはや人間そのものではなく、かつて霊を宿していた抜け殻にすぎません。

> そのとき、イエスは声高く叫んで言われた、「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」。こう言ってついに息を引きとられた。（ルカ 23 章 46 節）

骨と骨髄を切り離そうとすれば死を招くように（とりわけ古代世界においてはなおさらでしたが）、同様に、いかなる人においても、人の霊をその地上のいのち（すなわち「魂」）から切り離す唯一の道は、先に挙げた私たちの主――最後のアダム（第一コリント 15 章 45 節）の例と同じく、肉体の死によるほかありません。生きていて力ある神のみことばは、まさにそのような切り分けを成し得るものであり、この描写の背後に示唆されている警告は偶然のものではありません。神のご計画の歴史において、初めはよい歩みをしながら、終わりを誤り――時には破滅的に終わった信者は少なくありません（たとえば、直前の段落で取り上げられている出エジプト世代全体がそうでした）。パウロがここで読者たちを救い出そうとしているのは、まさにそのような結末からなのです。

> (13)こうしてサウルは主にむかって犯した罪のために死んだ。すなわち彼は主の**言葉**を守らず、また口寄せに問うことをして、(14)主に問うことをしなかった。それで主は彼を殺し、その国を移してエッサイの子ダビデに与えられた。（歴代誌上 10 章 13-14 節）

サウルは主によって特別に選ばれていたにもかかわらず、そのみことばに逆らい、真理に心を向ける代わりに、他のところに導きを求めました。これは、律法主義へ立ち

---

16 BB 3A『人間論（Anthropology）』第 II 章 2 項「アダムの創造」参照。

返ったり、グノーシス主義へとそれていったりしていたエルサレム会衆の大多数が犯していた過ちと、まさに同じです。イエス・キリストに属する私たちが関わっている霊的戦いにおいて、中立という立場は存在しません。私たちは、主に従うべきように従っているか、さもなければ程度の差こそあれ、どこかで脇道へそれているかのどちらかです。そして、その逆戻りは、行き着くところまで進めば、その終着点は死となります（すなわち、サウルの場合のような「死に至る罪」による死、あるいは信仰そのものが完全に消滅する背教という霊的死です）。[17]

心の思いと考えとを見分ける方（The Judge of our Hearts' Thoughts and Intents:）

> **人はその魂において思うとおりの者である**（すなわち「心」において；KJV 参照）。（箴言 23 章 7 節前半）

聖書において「心」と「魂」は同義語であり、しばしば相互に置き換えて用いられます。そして個人の内なる思いが強調される場合、そのいずれかが用いられることが多いのです。これは本質的に提喩（synecdoche シネクドキ）という文学的修辞であり、部分によって全体を表す、あるいは全体によって部分を表す表現です。たとえば「あなたはなんと良い心の持ち主だ！＜英語の直訳だと「あなたは、良い心だ！you are such a good heart!」＞」とか、「彼は陽気な老人だった（a merry old soul＜英語直訳で「陽気な老いた魂/soul」＞）」といった言い方がそれに当たります（申命記 6 章 5 節参照）。このように内なる人（すなわち「心」）に焦点を当てる用法が、私たちの文脈の節におけるパウロの「魂」という語の使用にも見られます[18]。

> **人が**（すなわち「魂が」ネフェシュ）**あやまって罪を犯し…**（レビ記 4 章 2 節）

アダムとエバの堕落以来、すべての人間は罪の性質を持って生まれてきます――ただ一つのきわめて重要な例外、すなわち私たちの主イエス・キリストを除いてです。イエスは、私たちの罪のためのふさわしい犠牲となるために、完全でなければならず、またその完全さを保ち続けなければなりませんでした。次の段落で見るように、これは初臨において主が負われた重荷の大きな部分を成していました。すなわち、その公生涯が始まる前から、十字架に至るまでに通られた数々の試練の前から、そしてカルバリの暗闇の中で私たちの罪のために死なれる前から、その重荷を負っておられたのです。これに対して、私たち他のすべての者にとっては、死すべきからだに宿る罪の性

---

17 BB 3B『罪論（Hamartiology）』第 IV 章 6 項「背教と死に至る罪」参照。

18 BB 3A『人間論』第 II 章 4 節「人間の二分性（ディコトミー）」を参照してください。

質の反抗は絶え間ないものであり、それは私たちのすべての行いと言葉に否定的な影響を及ぼします。そしてそれらはすべて、もともと私たちが心の中で何を思い、何を決定するかから発しているのです。

> (9)心はよろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている。だれがこれを、よく知ることができようか。(10)「主であるわたしは心を探り、思いを試みる。おのおのに、その道にしたがい、その行いの実によって報いをするためである」。(エレミヤ 17 章 9-10 節)

人間の霊は、本質的に「私たちが何者であるか」を成すものです。しかし私たちは、その同一性、すなわち神のかたち、そして自由意志を、私たちの霊を宿しているからだを通して表現しなければなりません(ヨブ 32 章 8 節; 箴言 20 章 27 節; マタイ 26 章 41 節; マルコ 2 章 8 節; ヨハネ 4 章 24 節; 使徒行伝 19 章 21 節前半; 第一コリント 2 章 11 節前半, 5 章 4-5 節, 14 章 14-15 節; 第二コリント 7 章 13 節; ローマ 1 章 9 節, 8 章 16 節; エペソ 4 章 22-24 節; ピリピ 4 章 23 節)。そして、この私たちのからだが現在、罪の性質の影響の下に置かれているために、私たちが「心」において下すすべての善い決断――すなわち、私たちの霊とからだとが接する場における決断――は、必ず抵抗<挑戦/英文では challenge>を受けることになります。

要点は、この節における「魂と霊を切り分ける」ことが、読み手によってこれら「心の思いと志」と直接関連して理解されるよう意図されている、ということです。すなわち、神のことばという鋭い剣こそが、第一の対(魂と霊)という本来は分けることのできないものを切り分けることができ、また第二の対(思いと志)を絶対的な正確さをもってさばくことができるのです。言い換えれば、みことばは、罪の性質からの圧力がない状態において、すべての人の真の意志が何であるかを見分けることができます(というのは、「霊は燃えていても、肉体は弱いのである」:マタイ 26 章 41 節; マルコ 14 章 38 節)。そしてそれは、単なる思考と実際の決断とを、すなわち思いと志とを、完全に区別することができるのです。

> あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、**心**(英語:mind)**を新たにする**ことによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が[自分のなすべき]善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである。(ローマ 12 章 2 節)

上で命じられている私たちの思考の再構築――すなわち、救い以前のこの世的な考え方から、信じた後の正しい神的観点へと変えられること(それは霊的成長を通して

達成されます)――の目的は、神のみこころが何であるかを知った後、実際にそれを行うことにあります。

(21)[あなたがたは真理を学んだのであって]――もし実際にあなたがたが彼(すなわちイエス)に聞き、イエスにあって、イエスにあるものとして確かに真実であるところに従って教えられたのであるならば――(22)あなたがたの以前のふるまいに関しては、古い人を(すなわち、かつて支配的であった罪の性質の影響を)脱ぎ捨てたのである。その古い人は、欺きの欲望によって滅びつつあるのである。(23)そしてむしろ、あなたがたは**心の霊**において新たにされ続けており、(24)また、新しい人を着たのである。その新しい人は、神の基準に従い、真理に基づく義と聖において創造された者である。(エペソ 4 章 21-24 節)

すべての信者にとって、人生は「善と悪」との識別がそれほど容易ではない微妙な試みに満ちています。すべての人間は、絶対的な善と露骨な悪との違いについて、一般的な認識を持っています。それは良心に与えられている根本的な認識であり、アダムとエバの堕落の遺産です(創世記 2 章 9 節, 2 章 17 節, 3 章 5 節)。

主なる神は言われた、「見よ、人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るものとなった。…」。(創世記 3 章 22 節前半)

しかし、キリスト者の人生に満ちている適用の領域となると、聖書に具体的に明示されておらず、また善悪についての人間の基本的理解にも含まれていない個々の状況において、神のみこころが何であるかを見分けるためには、祈りと注意深い熟慮が必要となる場合があります(ローマ 13 章 5 節)。

(14)律法を持たない異邦人であっても、**生まれつき**律法に[記されている]事がらを行うときには、律法を持たない彼ら自身が、自分に対する律法なのである。(15)彼らは、律法の本質が自分たちの心に書き記されていることを示しているのであり、そのとき**彼らの良心**が彼らに対して証言し、また[良心に基づいて][思い]めぐらし、あるいは彼らを責め、あるいは弁明するのである。(ローマ 2 章 14-15 節)

だれもが、聖書を読まなくても生まれつき、殺人が悪であるということは、完全によく知っています。しかし、この人と結婚すべきか、それとも別の人と結婚すべきか、あるいはそもそも結婚すべきでないのか、といった個別の問いに対する具体的な答えは――そのほか多くの事がらと同様に――それほど容易に見分けられるものではありません。

良心とは、私たちが正しいことと誤っていることとを評価する、その心の機能に対して与えられている名称です。しかし、堕落した人間としての遺産の結果、私たちが生まれながらに持っている良心は初歩段階のものであり、それは養育によって基本的な礼節や法にかなった行動へと調整されていきます――本来そう調整されるべきものですが――。そして、この機能をあらゆる点において聖書的基準へと精密に整えていくことは、信者にとって生涯にわたる過程であり、それは私たちの霊的成長と並行して進んでいくものです。

人の魂は主のともしびであり、人の心の奥を探る。(箴言 20 章 27 節)

それゆえ、[権威に]従うことが必要なのである。それは、刑罰のゆえだけでなく、**良心のゆえ**でもある(すなわち、すべての人の良心は、「生まれつきの認識によって」、正当な権威に従うべきことを教えているのである)。(ローマ 13 章 5 節)

あなたがた自身で判断しなさい。女が、頭に覆いを着けないで神に祈ることは、ふさわしいことであろうか。**自然そのものさえ、**男が長い髪で祈るならば、それが彼にとって不名誉であり、しかし女にとっては長い髪(すなわち、神による「頭の覆い」)が彼女の栄光であることを**教えているではないか。**というのは、彼女の長い髪は、覆いの代わりとして与えられているからである。(第一コリント 11 章 13-14 節)

(5)この命令〔すなわち、偽りの教えを避け、真理に堅く立つこと〕の目的は、清い心と、**きよい良心**と、偽りのない信仰とから生まれる愛である。(6)ある者たちは、これらのことを退けたために的を外し、むなしい偽りの教えへとそれて行ったのである。(第一テモテ 1 章 5-6 節)

私たちが御霊によって真理を学んでいくにつれて、私たちの良心は、何が正しいことなのか(そして何が誤っているのか)を、ますます細部に至るまで識別できるように整えられていきます。

しかし、堅い[霊的な]食物は、成熟した者たちのものである。すなわち、不断の訓練によって、その[道徳的な]知覚の機能(すなわち良心)を、善と悪とを正しく見分けるように鍛え上げた者たちである。(ヘブル 5 章 14 節)

したがって、イエス・キリストを信じる者たちには、この戦いの中の戦い――すなわ

ち、私たちの思いと感情を制御し、誤った道を避けつつ正しい道を選び取るという戦い――において助けとなる聖霊が与えられています。これは、私たちが従事している霊的戦いの本質なのです。聖霊は神であり、全能であられますが、私たちの自由意志を覆してしまわれることは**ありません**。実に、私たちがこの世界に置かれているのは、何が自分にとって本当に最も重要であるのかを、選び取るためにほかならないのです。[19] 人類の大多数は神を拒み、また御父が御子という言葉に尽くしがたい賜物を通して差し出しておられる救いを拒んできました。しかし、私たち信者は、永遠のいのちを得るために、私たちの救い主に信仰を置いたのです。すなわち、私たちの「自由意志による信仰」をです。しかし、私たちがよく知っているとおり、物語はそこで終わるのではありません。救われた後もなお、私たちはこの世界にとどまりつつ、王国の到来に至るまでのすべての歩みにおいて、日々、自分が何に価値を置くのかを選び取るという特権――そして同時に責任――を与えられているのです。

> (16)わたしは命じる、御霊によって歩きなさい。そうすれば、決して肉の欲を満たすことはない。(17)なぜなら、肉の欲するところは御霊に反し、また御霊の欲するところは肉に反するからである。こうして、二つのものは互に相さからい、その結果、あなたがたは自分でしようと思うことを、することができないようになる。(18)もしあなたがたが御霊に導かれるなら、律法の下にはいない。(19)肉の働きは明白である。すなわち、不品行、汚れ、好色、(20)偶像礼拝、まじない、敵意、争い、そねみ、怒り、党派心、分裂、分派、(21)ねたみ、泥酔、宴楽、および、そのたぐいである。わたしは以前も言ったように、今も前もって言っておく。このようなことを行う者は、神の国をつぐことがない。(22)しかし、御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、(23)柔和、自制であって、これらを否定する律法はない。(24)キリスト・イエスに属する者は、自分の肉を、その情と欲と共に十字架につけてしまったのである。(25)もしわたしたちが御霊によって生きるのなら、また御霊によって進もうではないか。(ガラテヤ 5 章 16-25 節)

信仰から、真理から、御霊の導きから離れ、「御霊によって歩む」ことに失敗し、かえって肉へと立ち返ることは、この過程を逆転させることになります。そしてそれは、御霊の「静かな細い声」を聞き取れなくさせ(列王記上 19 章 12 節)、以前は労して強めてきた良心を弱めることになるのです。

> (1)さて、御霊は後の時代に、ある者たちが**信仰から離れ**去り、惑わす霊ども

---

[19] BB 5『聖霊論』第 II 章 B 節 3.b.3 項「御霊によって歩むこと」を参照のこと。また、BB 6A『信仰者の歩みの神学』第 I 章 2.C 項「霊的識別」も参照のこと。

と悪霊の教えとに心を向けるようになると、明らかに語っておられる。(2)彼らは偽りを語りつつ偽善に陥り、その自分の**良心は、焼きごてで焼かれ**たかのようになっているのである。(第一テモテ 4 章 1-2 節/NKJV 訳)

全知と神への畏れ(Omniscience and the Fear of God)**:**

神はすべてをご存じです。そう言うと、ありきたりな言い方のように聞こえるかもしれません。しかし、私たち信者が罪を犯すとき、いったい何を考えているのでしょうか。罪とは不法であり(第一ヨハネ 3 章 4 節)、罪を犯すことは本質的に神に対する反逆であって、悪魔の足跡に従うことなのです(第一ヨハネ 3 章 8 節)。神が全知であられ、何事も、そもそも神が定められなければ起こり得ないこと、そして神が私たちを見ておられること――いや、実に私たちのうちにおられること(ヨハネ 14 章 23 節; ローマ 8 章 9 節)――を知りながら、どうして私たちは、罪という考えを心に抱くことなどできるのでしょうか。

主を畏れることは知恵の初めである。その戒めを行う者はみな、良き分別を得るのである。(詩篇 111 篇 10 節/NKJV 訳)

主を畏れることは知識の初めである。しかし愚かな者は、知恵と訓戒とを軽んじる。(箴言 1 章 7 節/NIV 訳)

御霊にあってイエス・キリストと共に歩み、その真理を学び、霊的成長の過程を通してそれを自分たちの生活に適用し、こうして霊的成熟に達している私たちは、定義上、「良き分別」を持っているのです。同様に、私たちはこの人生において良いほうを選んだのであり(ルカ 10 章 42 節)、愚かな者ではありません。

地上には、正しくて、〔常に〕善を行い、〔決して〕罪を犯さない人はひとりもいない。(伝道の書 7 章 20 節)

すなわち、すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、(ローマ 3 章 23 節)

私たちはみな、多くの点でつまずくのである(すなわち、罪を犯すのである)。(ヤコブ 3 章 2 節前半)

どれほど善くあろうと努めていても、私たちはなお現在、罪の性質に侵されたからだの中に住んでいるのであって、そのため、時として私たちは皆、罪を犯すのです(列王

記上 8 章 46 節前半; 歴代誌下 6 章 36 節前半; ヨブ 15 章 14 節; 詩篇 130 篇 3 節, 143 篇 2 節; ローマ 3 章 9 節, 5 章 12 節, 7 章 14 節, 7 章 23 節; ガラテヤ 3 章 23 節)――そして、これと異なることを主張する者がいるなら、その人は神を偽り者としているのです(第一ヨハネ 1 章 10 節)。

> わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください。(マタイ 6 章 12 節)

> わたしたちに負債のある者を皆ゆるしますから、わたしたちの罪をもおゆるしください。わたしたちを試みに会わせないでください』」。(ルカ 11 章 4 節)

もしそれが不必要なことであるなら、私たちの主が、日ごとの祈り、すなわち「主の祈り」の中に、罪の赦しを求める告白を含められることはなかったでしょう。罪という問題は、広く、また深い主題です。明らかに非難されるべき外面的行為が罪となり得るだけでなく、私たちが語ること――さらには、私たちが思うこと――もまた罪となり得るのです。疑いの余地なく、私たちは皆、自分で思っている以上にはるかに多く罪を犯しています。したがって、この点に関して、私たちは皆、主の前にへりくだって歩む必要があります。そして、思うこと、語ること、行うことのすべてにおいて、聖さ、すなわち聖化を追い求めるよう最善を尽くすべきですが、同時に、私たちが現在の人間の本性においては不完全であること、そして無知による罪も、認識したうえでの罪も、常に「戸口で待ち伏せている」ことをも認めなければなりません(創世記 4 章 7 節)。

> (8)もし、罪がないと言うなら、それは自分を欺くことであって、真理はわたしたちのうちにない。(9)もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。(第一ヨハネ 1 章 8-9 節)

自分たちの不完全さについてへりくだり、罪を早く、またたびたび告白し、そしてもちろん、あらゆる種類の罪を避けるよう最善を尽くすこと――このようにして、イエス・キリストにいっそう近づき、聖霊が良心に力を与え、これを導かれるのに従って、日々ますますよく自分の良心に耳を傾けるようになっていくこと――これこそが、この危険な世界において、信者にとって唯一安全な道なのです。しかし、それ以上に危険なのは、神は欺くことができるとか、無視できるとか、あるいは私たちの人生に対する神の完全な統治から何とかして身を隠すことができるなどと考える、この狂気の態度を取ることです(黙示録 6 章 15-17 節参照)。

(8)彼らは、日の涼しい風の吹くころ、園の中に主なる神の歩まれる音を聞いた。そこで、人とその妻とは主なる神の顔を避けて、園の木の間に**身を隠した。**(9)主なる神は人に呼びかけて言われた、「あなたはどこにいるのか」。(10)彼は答えた、「園の中であなたの歩まれる音を聞き、わたしは裸だったので、恐れて身を隠したのです」。(創世記 3 章 8-10 節)

上に述べたことは、今日の私たちには滑稽に思えるかもしれません。しかし、少なくともアダムとエバには、神を畏れるという経験をそれ以前に持っていなかったという弁明の余地があり、またここでは、事後ではあるにせよ、ある程度の敬意を示している様子も見られます。しかし、神の全知を知り、万物をあらかじめ定めておられることを知り、さらに主が私たちと共におられ、しかも私たちのうちにおられることを知りながら(コロサイ 1 章 27 節)、それでもなお意図的に罪を犯す信者にとって、これはまったくの狂気以外の何であり得るでしょうか。

これらのこと(すなわち、第二ペテロ 1 章 5-8 節に示されているキリスト者の徳に従って歩んでいないこと)**を欠いている者は、近視眼的**であり、ついには**盲目**となっており、自分がかつての罪から清められたことを**忘れている**のである。(第二ペテロ 1 章 9 節)

私たち信者が罪の性質に身を委ね、聖霊のやさしい促しを無視するとき、私たちは――一時的ではありますが――、信仰によって心において注意深く学び、大切に蓄えてきた真理に対して、盲目となり、無知を抱くことになります。言っておきますが、このことは、程度の差こそあれ、私たちすべてに日常的に起こっているのです。私たちは成長するにつれて、この戦いにおいてよりよく戦えるようになりますが、これら罪のからだに宿っているかぎり、重大な失敗にさえ陥り得る弱さを常に抱えています(その例として、バテシバとウリヤに関するダビデの衝動的行動は、それを十分に示しています)。しかし、私たちに**できない**こと、すなわち、どんな**犠牲を払ってでも**絶対に避けなければならないことは、罪の行動様式の中へと落ち込むことです。とりわけ、主と、私たちの人生に対する主のみこころに対する、露骨で意図的な公然の反逆に陥ることです。このような様式は、しばしば小さなところから始まりますが、やがて気づかぬうちに、重大な破綻へと微妙に成長していきます――ちょうど、アルコール依存やヘロイン中毒が、一杯の酒、一度の摂取から始まり得るのと同じようにです。気がつかないうちに、私たちが真理のみことばを学び、それを信じたときに、御霊によって良心の中に据えられたすべての善い基準は焼き尽くされ、私たちを導いていたすべての真理は忘れ去られ、霊的盲目がその代わりを占めるようになります。そのような段階に至ると、私たちが変えられるためには、しばしば外からの介入が必要となります。すなわち、(パウロが第十二

章で説明するような）厳しい神的懲らしめというかたちでの神の介入であり、またしばしば、私たちを愛し、私たちを私たち自身から救おうとしている他の信者たちの介入でもあるのです（パウロがエルサレム教会のために行おうとしていたことのように）。

（19）兄弟たちよ、もしあなたがたの中に、真理から迷い出る者があり、だれかがその人を引き戻すなら、（20）その人に知らせなさい。罪人をその道の迷いから立ち返らせる者は、その魂を死から救い出し、多くの罪を覆うことになるのである。（ヤコブ 5 章 19-20 節/NKJV）

（22）〔良心のことで〕葛藤している者たち（すなわち、罪深い行動に関して信仰が揺らいでいる者たち）にあわれみを示しなさい。（23）また、誘惑とその結果の火から引き出すことによって、救い出しなさい。しかし、〔そのような〕あわれみを示すにしても、神への畏れをもって行い、罪の汚染の最も小さな部分さえ憎みなさい（すなわち、肉によって汚された衣さえも〔直訳〕遠ざけなさい）。（ユダ 1 章 22-23 節）

もし私たちがここにおけるパウロの言葉を心に刻むなら、上に述べたようなことは不必要となるでしょう。「神の御前には、隠れた被造物は一つもない。すべてのものが、私たちが関わりを持つその方の御目の前に、裸であり、あらわにされているのである」（ヘブル 4 章 13 節）。結局のところ、もしイエス・キリストが今ここに立ち、私たちの肩に手を置いておられるとしたら、私たちはどのようにふるまうでしょうか。疑いなく、私たちは何一つ過ちを犯さないよう細心の**注意を払い**、また自分の言葉にも十分に気をつけるはずです――もっとも、人間である私たちにとっては、自分の**思い**においてさえ誤らないでいるのは、なお難しいことでしょう。実に、イエス・キリストは、今まさにここに**おられます**。しかし、私たちは肉の目でその方を見ることができません。そこに難しさがあります。信者としての私たちの責任は、その方が目に見えない方であられても、なおその方を見ている者として歩むことにあります。そして、私たちに対するその方の真実を確信しつつ歩むと同時に、その方を悲しませることの結果に対する神への畏れをもって歩むことにあるのです。

〔モーセは〕見えない方を見ている者のようにして、強くなったのである（すなわち、その心の目を、目に見えないイエス・キリストに据え続けることによってである）。（ヘブル 11 章 27 節）

あなたがたは、イエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見てはいないけれども、信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれて

いる。(第一ペテロ 1 章 8 節)

したがって、私たちの主がすべてをご覧になっており、何一つとしてその御前に隠れているものはないということ(本章の文脈:ヘブル 4 章 13 節)を絶えず思い起こすことは、信者にとって常に行っているべき、きわめて重要で価値あることです。人生には多くの気を散らすものがあり、私たちの心の「高地」を常に支配下に置き、私たちの内なる人の焦点を、私たちのために死んでくださった方、そして私たちが何にもまして愛しているその方に据え続けることは、確かに容易ではありません。この戦いにおいて完全な者はだれもいません。しかし、これはすべての信者が絶えず取り組むことを決意しなければならない戦いです。主と共に歩む歩みにおいて気を緩めるなら、主のみことばを取り入れることにおいても気を緩めるようになり、それはやがて、真理を自分の生活に適用することにおいての緩みへとつながり、さらに罪深い行動をいっそう起こしやすくし、告白と悔い改め、そして主のもとへ立ち返ることを、いっそう起こりにくくしてしまいます。主へと私たちを近づけていく成長の徳ある循環の代わりに、いったん誤った方向へ自分を向けてしまうと、この世への逆戻りという悪循環が始まってしまうのは、あまりにも容易なことです。そしてそれは、もし矯正されることがなければ、自らをますます勢いを増しながら進行していきます。この人生が私たちの選択にかかっている以上、また悪魔の反逆によって始まったこの闘争において自由意志こそが争点である以上、御霊は私たちを強制されることはなく、神は私たちの思考と行動において大きな余地を与えておられます。やがて、これまで見てきたように、神の懲らしめは加速していき、極端な場合には、悔い改めて御霊にあって救い主に従う唯一の道へと立ち返ることを拒み続ける信者は、「死に至る罪」か、あるいは背教か、いずれかの選択に直面することになります。[20] このことを知り、誤った道の恐るべき結末をしっかりと心に据えておくことは、すべての信者にとってきわめて有益です。これこそが、神への敬虔な畏れの本質です。すなわち、私たちが正当な理由をもって神を畏れるのは、私たちを真に恐れさせ得る事柄が、すべて私たちの益のために存在していること――私たちがあの暗く危険な道へと向かうことを、そもそも考えさえしないように守るために存在していること――を知っているからなのです。

> 愛には恐れがない。完全な愛は恐れをとり除く。恐れには懲らしめが伴い、かつ恐れる者には、愛が全うされていないからである。(第一ヨハネ 4 章 18 節)

このしばしば誤解される節が示しているように、信者は主を恐怖の対象として**おびえるのではありません**。むしろ私たちは、そうするように定められているとおり、自分のい

---

[20] BB 3B『罪論』第 IV 章 6 節「背教と死に至る罪」を参照のこと。

のち以上に主を**愛する**のです（マタイ 22 章 36-38 節）。神はあらゆる点で善であられます。私たちの天の父は愛そのものであり、すべてのことにおいて私たちの最善の益だけを望んでおられ、またその益のために万事を働かせておられます……すなわち、神を愛する者たちのためにです（ローマ 8 章 28 節）。私たちが地上の父を愛し（少なくともその原則を理解し）、それでいて、重大な過ちを犯した場合に父が懲らしめを与え得ることゆえに父を敬っていたのと同じように、それ以上に、私たちは天の父とその御子とを愛すべきです――神が私たちの身代わりとして、ご自身が深く愛しておられた御子をさばくことによって、私たちを火の池から救い出してくださったゆえに――そして同時に、善い、神への敬虔な、畏敬の念をもって神を畏れるべきです（メシヤについて「彼は主を恐れることを**喜びとする**」とあるように：イザヤ 11 章 3 節[NIV]）。それは、不当な罰が下されるかのような無分別な恐怖**ではなく**、もし私たちが主とその御子、すなわち私たちの愛する主に従うべきところで従わず、反逆的であることが明らかになるならば、完全な父が必ず私たちにもたらされるであろう、正しく、また慈しみに満ちた、愛に基づく懲らしめに対する、神への敬虔な理解に基づく畏れなのです。

> わたしはその子らを死をもって打ち殺す。そうすれば、すべての教会は、わたしが心と思いを探る者であることを知るようになる。そして、わたしはあなたがたひとりに、その行いに応じて報いるのである。（黙示録 2 章 23 節/NKJV 訳）

上に掲げたのは、同じように反逆的であった一派に向けて語られたイエス・キリストの言葉です。私たちは、思いと心の中においてさえ、その方に対する反逆を隠すことはできません。どれほど小さな罪であっても、その方の御目を逃れたものは一つもありません――そのすべての罪のために、その方は死なれたのです。まして、言葉と行いにおける露骨な不敬が、この世の畏るべき救い主から恐るべき応答を引き起こさないはずがあるでしょうか。この点を正しく認識しなかったことが、エルサレム教会の大多数をして、この事柄において私たちの主を試みることへと導きました。神のことばの剣がその口から出ているその方（黙示録 1 章 16 節, 2 章 12 節, 2 章 16 節, 19 章 15 節）と剣を交えるとは、なんと愚かなことでしょうか。

> (8) あなたは、私たちの咎を御前に置き、私たちの隠れた罪を御顔の光の中に置かれます。(9) 私たちのすべての日は、あなたの憤りの下に過ぎ去り、私たちは自分の年を、ため息のうちに終えます。(10) 私たちの齢は七十年、健やかであっても八十年。しかし、その最も良い時でさえ、労苦と悲しみにすぎません。それはたちまち過ぎ去り、私たちは飛び去るのです。(11) だれが、あなたの怒りの力を知るのでしょうか。あなたの憤りは、あなたが受けるべき畏れにふさわしい大

きさです。(12)どうか私たちに、自分の日を数えることを教えてください。そうして私たちが、知恵の心を得ることができるようにしてください。(詩篇 90 篇 8-12 節/NIV)

(1)主のことばが私に臨んだ。(2)「人の子よ、イスラエルの地に対して、主なる神はこう言われる。『終わりだ。終わりが、この地の四隅に臨んだ。(3)終わりが今、あなたに臨んでいる。わたしはあなたに向かって怒りを解き放ち、あなたの行いに従ってあなたをさばき、あなたのすべての忌むべきわざに報いる。(4)わたしはあなたをあわれまず、惜しむこともしない。わたしは必ず、あなたの行いと、あなたの中にある忌むべきわざとに報いる。そのときあなたは、わたしが主であることを知る。』」(エゼキエル 7 章 1-4 節/NIV)

そのほかの者たちは、馬に乗っておられる方の口から出る**剣**によって殺された。そして、すべての鳥が彼らの肉を飽きるまで食べたのである。(黙示録 19 章 21 節/NIV)

実に、「神の御前には、隠れた被造物は一つもない。すべてのものが、私たちが関わりを持つその方の御目の前に、裸であり、あらわにされている」のです(ヘブル 4 章 13 節; ヨブ 31 章 4 節; 34 章 21 節; 詩篇 33 篇 13-15 節, 44 篇 21 節, 139 篇 3 節, 箴言 5 章 21 節, 15 章 3 節; エレミヤ 16 章 17 節, 23 章 24 節, 32 章 19 節; ダニエル 2 章 22 節; マタイ 10 章 26 節; マルコ 4 章 22 節; ルカ 8 章 17 節, 12 章 2 節参照)。ついには、あらゆる思いと動機が明らかにされ(伝道の書 12 章 14 節; ルカ 2 章 35 節; ローマ 2 章 16 節; 第一コリント 3 章 13 節, 4 章 5 節; ユダ 1 章 15 節)、ついには、すべての人がさばかれ(ダニエル 12 章 2 節; ヨハネ 5 章 27-29 節; 黙示録 20 章 11-15 節)、ついには、この一時的な世界に属するすべてのものが滅ぼされます(第二ペテロ 3 章 10 節; ヘブル 12 章 25-29 節)。これらすべてを知っている私たち信者は、いったいどのような者であるべきでしょうか(第二ペテロ 3 章 11 節)。主を誘惑し、試みるのではなく、その御臨在の現実に対して自ら盲目になるのでもなく、自分の良心と聖霊の証しとを無視するのでもなく、むしろ「恐れとおののきをもって自分の救いの達成に努める」ことに熱心であるべきではないでしょうか(ピリピ 2 章 12 節)。また、出エジプトの世代の否定的実例を心に刻み、彼らが主の大いなる忍耐を極みに至るまで試みた結果、どのようなことが彼らに起こったのかを思い起こすべきではないでしょうか。その答えが、考え得るかぎり最も力強い「然り！」であることは明らかです。しかし、その答えを与えるためには、私たちの自由意志による信仰を働かせる必要があります。それも、単に形式的に、あるいは最初だけではなく、私たちが主を顔と顔とを合わせて見るその時に至るまで、一貫して、そして決意をもって歩み続けることが求め

られているのです。

> しかし私たちは、後ずさりして滅びる者に属するのではなく、信仰をもっていのちを得る者に属するのである。(ヘブル 10 章 39 節/NIV)

十四節

> (14)だから私たちには、天を通って行かれた大いなる大祭司、すなわち神の御子イエスがおられるのであるから、[この方への信仰の]告白をしっかりと保とうではないか。(ヘブル 4 章 14 節)

パウロは、エルサレムの信者たちのふるまいを、失敗した出エジプトの世代のそれと広範に比較することによって、(少なくとも、なお謙遜さを保っていた者たちで、注意深く耳を傾けていた者たちに対しては)厳しい自覚を促し、またそれによって読者たちに少なからぬ恐れを抱かせ、さらに真理そのものであられる方の畏るべき力を思い起こさせました。しかし今やパウロは、私たちが「時期を得た助け」を受けるために、主イエス・キリストを持っていることを思い起こさせることによって、彼らを安心させています(ヘブル 4 章 16 節)。神は私たちの罪を赦してくださいます。このことはあまりにも重要であるため、主ご自身が、私たちに与えてくださった祈り、すなわち「主の祈り」の中に、赦しを求める願いを含められたほどです(マタイ 6 章 12 節; ルカ 11 章 4 節)。私たちが霊的に調子を崩しているとき――それが、何らかの圧力や困難に対して、神に信頼して安息することによって適切に応答できなかったためであれ、あるいは一時的な過ちによるものであれ、さらには(あるいはとりわけ)、霊的生活において前進のない惰性に陥っている場合や、逆戻りしている場合であれ――私たちは、主の赦しを求めることを妨げるいかなるものも、決して許してはならないのです。イエス・キリストは、私たちのすべての罪のために死なれました。私たちのすべての罪はすでに、その血によって支払われています。十字架の暗闇の中で、その一つ一つのために苦しんでくださったことによってです。したがって、どのような理由であれ、私たちがそのあわれみを必要とするときにそれを求めることを妨げるものを自分に許すことは、傲慢の極みであり、最も危険な愚かさです。そして実際、私たちはそれを必要としているのです――日ごとに。この事実を正しく認識せず、愚かにも自分をして真理から多少なりとも離れさせてしまうことは、道を踏み外した信者にとって、その悪しき行動の型を断ち切り、心のすべてをもって主のもとへ立ち返ることを、いっそう困難にしてしまうように思われます。したがって、罪の告白は少なくとも日ごとに行われるべきであり、また、自分が行ったこと、語っ

たこと……あるいは思ったこと……の中に、それを必要とするものがあると気づくたびごとに行われるべきです。そして、自分の状況について、「否定的な側に有利な判断」を与えること――すなわち、自分には赦しの願いが必要かもしれないと考えて祈ること――に、何の害もありません。結局のところ、主が私たちに、もしかすると必要ないかもしれないなどという但し書きもなく、日ごとに赦しを求めるよう命じておられるのには、十分な理由があるのです。

> **わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください。**（マタイ 6 章 12 節）

> **わたしたちに負債のある者を皆ゆるしますから、わたしたちの罪をもおゆるしください。**（ルカ 11 章 4 節前半）

確かに、告白は単なる形式的なものであってはなりません。すなわち、ただ機械的に、あるいは心の中では本気で改めるつもりもないまま告白することはできません。しかしその一方で、過度で的外れな罪悪感が、私たちが告白することを妨げるようなことがあってもなりません。[21] 明らかに、ある罪は他の罪よりも微妙で、克服することが難しいものです。ある根深い悪い行動習慣は中毒性を帯びており、それを制御できるようになるまでには、長い戦いを要することもあります。しかし、主との交わりへと回復され、霊的前進を再開するためには、告白は不可欠なのです。

> **しかし、もし私たちが、御子ご自身が光の中におられるように、光の中を歩むなら、私たちは互いに交わりを持つのであり**（すなわち、御父および御子との交わり、また他の信者たちとの交わりでもあります。3 節参照）**、その御子イエスの血が、私たちをすべての罪から清め続けているのです。**（第一ヨハネ 1 章 7 節）

エルサレムの信者たちは、律法のいけにえへと立ち返りつつありました。そこでは、来たるべきイエス・キリストの犠牲を表すものとして、青銅の祭壇において文字どおり動物の血が流されていました。しかし実際に、「すべての罪から私たちを清める」のは、そのイエス・キリストの犠牲の「血」、すなわち「キリストの血」なのです。それは、十字架上の三時間の暗闇の中で、私たちの罪のために主が耐え忍ばれた苦しみを指しているのであって、文字どおりの血――主の血そのものでもなく、ましてやいかなる動物の血でもありません。後者は、主が十字架において私たちのために成し遂げられた真の贖いの御業を象徴するものでした。それが「キリストの血」と呼ばれるのは、犠牲のいけにえ

---

[21] BB 3B『罪論』第 V 章 1 節「悔い改め、告白、そして赦し」を参照のこと。

が暴力的な死を遂げるという事実が、主が成し遂げようとしておられたこと――そして今や私たちのために、その身代わりの死において祝福に満ちたかたちで成し遂げてくださったこと――を、私たちにわずかながらでも理解させる最も適切な手段であったからです。律法の下では、祭司たちは赦しを表すものとして動物をささげていました。しかし、律法が単に象徴していた神の御計画を成就するために、キリストは私たちに代わってご自身をささげられたのです。そして、正しく理解されるなら、これ以上に畏るべく、また驚嘆すべき出来事は、世界の歴史の中に存在しません。

> (13)もし、やぎと雄牛の血、また雌牛の灰が、汚れた者たちに振りかけられて、からだのきよめという点で人を聖なるものとするのであれば、(14)まして、永遠の御霊を通して、きずのないご自身(すなわち、そのからだ;第一ペテロ 3 章 18 節参照)を神にささげられたキリストの血は、どれほどいっそう私たちの良心を死んだ行いからきよめて、生ける神に仕える者とすることでしょうか。(ヘブル 9 章 13-14 節)

私たち信者が、イエス・キリストを新しい大祭司として持っていることによって受けている益は、驚くべきものであり、しかも数多くあります。第一に、私たちの罪は、動物のいけにえの実際の血によって、ただ象徴的に洗い流されたのではなく、実際に赦されているのです。動物のいけにえは当時、信じるべき約束を示すものでしたが、今やその約束は完全に成就しました。もはや、赦しを「前借り」のかたちで生じさせるのに十分ないかなる動物のいけにえも存在していません(ヘブル 10 章 26 節)。なぜなら、その「負債」は、キリストの実際の血――すなわち、すべての罪の代価を支払われたその霊的死[22]――によって、完全に支払われたからです。キリストは、「しみもきずもない」神の小羊なのです。(第一ペテロ 1 章 19 節; ヨハネ 1 章 29 節, 1 章 36 節参照)。この決定的な事実を正しく認識しないこと――そして、このように大いなる救いを備えてくださったその御業とその御方を尊ばないこと――は、文脈箇所において与えられている「信仰の告白をしっかりと保つ」ようにとの命令とは、正反対の態度です。

イエス・キリストは私たちの大祭司です(第一テモテ 2 章 5 節; ヘブル 7 章 24-25 節; ヨブ 16 章 20-21 節; イザヤ 53 章 12 節後半; ヘブル 4 章 14 節, 6 章 19-20 節, 9 章 11-12 節, 9 章 24 節参照)。イエスは、私たちに御父の恵みの御座に近づく道を開いてくださいました(エペソ 2 章 18 節, 3 章 12 節; ヘブル 4 章 16 節)。したがって、私たちはもはや、私たちと父なる神との間を仲介するいかなる人間の祭司をも必要としません(レビ族の祭司たちがイスラエルの民のためにしていたように)。実に、私

---

[22] BB 4A『キリスト論』第 II 章 4 節「キリストの血」を参照のこと。

たちは主イエスに属し、その肉と骨においてその花嫁とされているゆえに、信者である私たち自身が、私たちの大祭司が今や確立してくださった新しい祭司職の一部なのです(第一ペテロ 2 章 5 節, 2 章 9 節; 黙示録 1 章 6 節, 20 章 6 節)。

> (9)彼らは新しい歌を歌って言った。「あなたは巻物を受け取り、その封印を解くにふさわしい方です。あなたは殺され、その血によって、あらゆる部族、言語、民族、国民の中から〔人々を〕私たちの神のために贖い取られ、(10)彼らを私たちの神のために**王国とし、また祭司**とされました。彼らは地の上を支配するようになるのです。」(黙示録 5 章 9-10 節)

私たちは、もはや廃れてしまった儀式的祭司制度を必要としていません(ヘブル 8 章 13 節;参照. 7 章 12 節)。私たち自身が、御父に直接願い求める権利を持っているのです(ヨハネ 14 章 13 節, 15 章 16 節, 16 章 23 節, 16 章 26 節)。また同様に、私たちの愛する主ご自身にも願い求めることができます。

> 何事でもわたしの名によって願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう。(ヨハネ 14 章 14 節)

……ちょうど、私たちの大祭司であられるイエス・キリストご自身が、私たちのために御父の前に願いをささげてくださり、いかなる人間の祭司にも決して成し得ないかたちで、私たちのために執り成してくださっているのと同じようにです(ローマ 8 章 34 節; ヘブル 7 章 25 節; ヨブ 16 章 19 節; ヨハネ 14 章 13-14 節; 第一テモテ 2 章 5 節 参照)。

> わたしの子どもたち。あなたがたが罪を犯さないようになるために、これらのことを書いています。しかし、もしだれかが罪を犯すことがあれば、私たちには御父のもとに〔私たちのために〕近づいてくださる弁護者があります。義なる方、イエス・キリストです。(第一ヨハネ 2 章 1 節)

天において、神なる御父の御前に立っておられる偉大な大祭司に属する信者として、私たちに帰するこれらの驚くべき特権をないがしろにし、かえって律法の弱く不十分な人間的祭司制度へと立ち返ることは、考え得るかぎり最悪の取引でした――とりわけ、レビの祭司職は、これらの信者に対してもはや何の益も与え得なかったからです。というのも、それは、いけにえの中のいけにえ、すなわちカルバリの十字架における私たちの主の勝利によって、すでに廃止されていたからです。自分たちの新しい大祭司としてのイエス・キリストを尊ばず、しかも不信者たちによって不正に執り行われていたばかりか、今や父なる神によって無効とされていたものへと立ち返ることは、無益

どころではありませんでした――それはきわめて危険なことでもあったのです。

(26)もし私たちが、真理の完全な知識を受けた後も、なお意図的に(すなわち高慢にも)罪を犯し続けるなら、そのような罪に適用されるいかなるいけにえも、もはや残されてはいません(すなわち、レビ族のいけにえは、もはや御父によって有効と見なされていないのです)。(27)ただ、さばきに対する恐るべき予期と、敵対する者たちを焼き尽くそうとして待ち構えている火の報復とがあるだけなのです。(ヘブル 10 章 26-27 節)

十五節

(15)というのは、私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情することのできない方ではないからである。この方もまた、[私たちと同じように]あらゆることにおいて試みを受けられたのであるが、[ただ]罪はおかされなかったのである。(ヘブル 4 章 15 節)

律法の儀式(あるいはそれを歪めたグノーシス的な形態)に立ち返るのではなく、パウロの読者たちは、自分たちが律法の行いによってではなく、イエス・キリストに信仰を置くことによって救われたのだということを思い起こすべきでした。

(30)では、何と言うべきであろうか。義を追い求めなかった異邦人が、義、すなわち、信仰による義に到達したのである。(31)しかし、義の律法を追い求めていたイスラエルは、その律法に到達しなかったのである。(32)なぜであるか。それは、信仰によって求めた**のではなく**、あたかも**律法の行いによるかのように**求めたからである。彼らは、そのつまずきの石につまずいたのである。(ローマ 9 章 30-32 節/NKJV 訳)

……人は律法の行いによってではなく、イエス・キリストへの信仰によって義と認められることを知って、私たちもキリスト・イエスを信じたのである。それは、律法の行いによってではなく、キリストへの信仰によって義と認められるためである。**なぜなら、律法の行いによって義と認められる者は、だれもいないからである。**(ガラテヤ 2 章 16 節/NKJV 訳)

律法の行いによる者はみな、**のろいの下にある。**「律法の書に書いてあるすべて

のことを守り行わない者は、みなのろわれる」と書いてあるからである。(ガラテヤ 3 章 10 節/NKJV 訳)

それにもかかわらず、これらエルサレムの信者たちは、不信仰な同胞をとらえたのと同じ罠に陥りつつありました。すなわち、神の御子であり、まことの大祭司であるイエス・キリストを捨てて、すでに廃された人間の祭司制度を選ぼうとしていたのです。しかしその制度は、彼らを救うことも、罪を赦すことも、わずかの益をもたらすこともできないものでした。

(9)しかし、愛する者たちよ、私たちはこのように語っているが、あなたがたについては、もっと良いこと、すなわち救いに伴うことがらを確信している。(10)神は不義な方ではなく、あなたがたの行いと、その御名のために示した愛の労苦、すなわち聖徒たちに仕え、また今も仕えていることを忘れられることはない。(ヘブル 6 章 9-10 節/NKJV 訳)

パウロが彼らについてこのような確信を抱いている理由は、彼らが正しい道に戻ることを期待しているからです。唯一の前進の道とは、救いの唯一の「道」であるまことの大祭司、イエス・キリストに再びより頼むことです(ヨハネ 14 章 6 節)。そのためには、イエス・キリストがすでに成就された、もはや役目を終えた儀式から離れる必要がありました。パウロは、彼らがかつてキリストとその教会のために払った犠牲を思い起こさせています。そして後には、これらの奉仕を行い、主に忠実であり続けるために耐え忍んだ苦しみについても思い出させます(ヘブル 10 章 32-39 節)。彼らが経験していたことは、決して特別なことではありません。過去に大きな霊的勝利を経験し、多くの試練に耐えてきた人であっても、圧力が弱まると気がゆるみ、新たな圧力が押し寄せると落胆してしまうことはよくあることです。このような罠に陥らないためには、イエス・キリストに近くとどまり続けることが必要です。そうでなければ、人は安心を求めて世に合わせようとしたり(この人々の場合は、律法や律法主義へ戻ることでした)、あるいは世の楽しみに気をそらされたりします(パウロの同時代の人々の場合は、グノーシス主義がそれに当たります)。

主を常にわたしの前に置いた。主がわたしの右におられるので、わたしは揺るがされることがない。(詩篇 16 篇 8 節)

わたしにとって、生きることはキリストであり、死ぬことは益である。(ピリピ 1 章 21 節)

〔モーセは〕**見えない方を見るようにして、忍び通した。**（すなわち、目に見えないイエス・キリストに心の目を向け続けることによってである。）（ヘブル 11 章 27 節）

(1)**こういうわけで、このように**[人間と御使いたちの]**多くの証人たちに取り囲まれているのであるから、私たちもまた**[第 11 章の信者たちのように]**、すべての重荷、とりわけまとわりつく罪をかなぐり捨てて、自分の前に置かれている競走を忍耐をもって走り抜こうではないか。**(2)**信仰の創始者であり完成者であるイエスから目を離さないでいよう。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、十字架を忍び、その恥をものともせず、神の御座の右に着座されたのである。**（ヘブル 12 章 1-2 節）

むしろ、あなたがたの心の中で、[他のどんなものにも勝って]**キリストを主としてあがめなさい。**（第一ペテロ 3 章 15 節前半）

そして、この格闘において、私たちの主は私たちを助けてくださいます。主は、私たちが何を苦しんでいるのかを知っておられます。言うまでもなく、神はすべてを知っておられます。言うまでもなく、この世界で起こるすべてのことは、神の御定めのうちにあらかじめ知られ、定められていたことです。そこに誤りはありません。偶然もありません。思いがけない出来事もありません。仮定的な出来事もありません。しかし、それ以上に――すなわち、この人生の圧力の下で、いま私たちの周囲に激しく展開している目に見えない戦いのただ中を、一日一日生きている私たち人間を励ますという意味において――私たちの主イエス・キリストは、まさに私たちが通っていることを実際に経験されたのです。しかもそれは、私たちが天の故郷に至るまでは到底想像できないほどの度合いにおいてであり、しかも罪なくしてでした。すなわち、真の人間として、主は私たちよりもはるかに厳しい状況を経験されたのです。それにもかかわらず、私たちへの大いなる愛のゆえに、ただの一度も揺らぐことなく、弱まることなく、失敗することもなく、すべてを耐え抜かれました。それは、私たちが救われ、永遠のいのちを得るためでした。

イエス・キリストは、私たちの罪のためにご自身をささげるため、真の人間としてこの世に来られました。それこそが、私たちが火の池と永遠の断罪から救われるための、唯一の道でした。主は真の人性を取られ、処女降誕ののち、罪の性質を持たずに生まれたという点を除いて、あらゆる面で私たちと同じ、真実の人間となられました。これは、私たちが救われるために絶対に必要なことでした。なぜなら、主は完全ないけにえ、「しみもきずもない小羊」（第一ペテロ 1 章 19 節；ヨハネ 1 章 29 節, 1 章 36 節参照）として、私たちの罪を負う者として受け入れられなければならなかったからです。私たちは皆、少なくとも心においては、一日として罪を犯さずに過ごすことはできません。し

かしイエスは、その生涯のすべてにおいて、ただの一度も罪を犯すことなく生きなければなりませんでした。そうでなければ、私たちは滅びに定められていたのです。したがって主は、――ご自身が人間であられるため――人間であるとはどういうことかを知っておられるだけでなく、この人生を歩み、反対や苦難を押し分けて、屈することなく、あきらめることなく進み抜くとはどういうことかを、私たち以上に知っておられます。なぜなら、主はそれを完全に成し遂げられたからです。

(3)彼は人にさげすまれ、見捨てられ、**悲しみの人であり、苦しみを知っている方であった。**人が顔をそむける者のように、彼はさげすまれ、私たちは彼を顧みなかった。(4)まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの弱さを担ったのである。それなのに私たちは、彼を神に打たれ、罰せられ、苦しめられた者だと思った。(5)しかし実際には、彼は私たちの咎のゆえに苦しめられ、私たちのもろもろの罪責(直訳「罪責たち」<-複数>)のゆえに砕かれたのである。私たちに平和をもたらすための懲らしめが彼の上にあり、その打ち傷によって、私たちはいやされた。(イザヤ 53 章 3-5 節)

(9)しかし今、私たちは死の苦しみのゆえに、栄光と誉れとを冠せられたイエスを見ている。この方は、[しばらくの間]御使いたちよりも少し低くされたが、神の恵みによって、すべての人のために死を味わわれたのであった。(10)万物がそのゆえに存在し、また万物がその方によって存在しているその御方――多くの子らを栄光へと導かれた、彼らの救いの創始者である方――を、**苦しみを通して**完成させることは、[御父]にふさわしいことであった。(ヘブル 2 章 9-10 節)

彼は苦しみを受けられたので、試みられている者たちを助けることがおできになる。彼ご自身もまた試みに遭われたからである。(ヘブル 2 章 18 節)

(7)[私たちの大祭司であるイエスは]肉におけるその生涯の日々に(すなわち、復活以前に地上におられた間)、死からご自分を救うことのできる方に向かって、激しい叫びと涙とをもって、祈りと願いとをささげられ、その敬虔のゆえに聞き入れられた。(8)そして、[神のひとり子であられた]にもかかわらず、**苦しみを通して、**神に従うとはどういうことか(すなわち、人が神に従うために何を要するのか)を**自ら学ばれ、**(9)こうして完全とされたのち、ご自分に従うすべての者(すなわち信者)にとって、永遠の救いの源となられたのである。(ヘブル 5 章 7-9 節)

(21)あなたがたが召されたのは、この〔キリストの苦しみにあずかる〕ことのため

である。キリストもまた、あなたがたのために死に、あなたがたがその足跡に従うようにと、模範を残されたのである。(22)**この方は罪を犯さず**、その口に欺きは見いだされなかった。(23)ののしられても、ののしり返さず、**苦しめられても、**脅すことをせず、正しくさばかれる方にご自身をゆだねられたのである。(第一ペテロ 2 章 21-23 節)

そして、人間の人生という苦い杯を余すところなく飲み尽くされたお方として、私たちの主イエス・キリストは、信者である私たちが置かれている重圧や、私たちが経験している迫害や孤立について、だれにもまさって深く共感することがおできになります。主は、ご自身、真の人間としての経験によって、あらゆる霊的失敗の元である圧力や誘惑を、すべて知っておられるのです。なぜなら、主はそれらすべてを実際に味わわれたからです。しかし、それらに一度も屈することはありませんでした。また、主が人として果たすべき使命は、単に罪に抵抗することだけではありませんでした。主は、人間である以上避けることのできないすべての責務からも免除されてはいませんでした。主は、一人の子として、兄弟として、市民として生きておられ、それらすべての点において完全でなければならず、それぞれに伴う責任を正確に果たさなければなりませんでした。その一方で、比類のない奉仕の中の奉仕、比類のない試練、そして最終的には十字架というるつぼに向けて、霊的に備えることも求められていたのです。主が処女から生まれ、罪の性質を持たずに生まれたことは事実です。しかし、それによって主の肩に課せられた重荷が軽くなったわけではありません。むしろ、聖句が示しているとおりです。「この方もまた、[私たちと同じように]**あらゆる点で**試みを受けられたが、[ただし]罪は犯されなかった」(ヘブル 4 章 15 節後半)。ですから、私たちが日々罪を犯し、また成長の過程や社会に出てからも、多くの点で世的な責任を十分に果たせなかったのとは対照的に、主にはそのような余地は一切ありませんでした。主は、罪を避けるという点においてだけでなく、思い、言葉、行いのすべてにおいて完全でなければならず、さらに、真の人間として果たすべきあらゆる責任と必要な務めを、余すところなく完全に遂行しなければなりませんでした。そのすべてを、霊的にも完全なかたちで成長し、完全な備えを整えながら、同時に成し遂げられたのです。

そして、幼子は成長し、知恵に満ちて強くなっていった。神の恵みがその上にあった。(ルカ 2 章 40 節)

私たちはこの主題について、すでに詳しく論じてきました(読者にはぜひ再読されることをお勧めます)[23]。ここでは簡潔に述べるにとどめますが、主は神の御子であられる

---

[23] BB 第 4A 巻「キリスト論」第 I 章 5.g 節「幼少期と奉仕への備え」を参照してください。

ゆえに物事が多少容易であったのではなく、人の子として、この世に遣わされ、人類をその罪から救うために死ぬべく来られたお方として、イエス・キリストほど厳しい道を歩まれた方はおられませんでした。実際のところ、比較そのものが成り立ちません。なぜなら、世界の歴史の中で、すべての点において完全でなければならなかった者は他にだれもおらず（第一ペテロ 1 章 19 節）、また、私たちの救い主が直面されたほどのサタンの反対に直面した者も他にいなかったからです（マタイ 4 章 1-11 節; マルコ 1 章 12-13 節; ルカ 4 章 1-13 節参照）。この世において苦しみや圧力に直面するとはどういうことかを真に理解しておられる方がおられるとすれば、それは私たちの主イエス・キリストなのです。

(1)だれが、私たちの告げ知らせを信じたであろうか。主の御腕（すなわちメシア）は、だれに現されたであろうか。(2)彼は、主の前に若木のように、また乾いた地から出る根のように育った。彼には、私たちが目を留めるような姿かたちはなく、私たちが引きつけられるような外見の輝きもなかった。(3)むしろ、彼は人にさげすまれ、見捨てられ、悲しみの人であり、苦しみを知っている方であった。人が顔をそむける者のように、彼はさげすまれ、私たちは彼を顧みなかった。（イザヤ 53 章 1-3 節）

あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っている。すなわち、主は豊かであられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが主の貧しさによって豊かになるためであった。（第二コリント 8 章 9 節/NIV 訳）

主は世の救い主、神の御子、王の王、主の主としてお生まれになりましたが（ルカ 2 章 10-11 節）、イエスはこの世にへりくだったすがたで来られ、本来ご自分にふさわしい栄光を帯びることなく、へりくだった生涯を歩まれました。主は王として生まれましたが（ヨハネ 18 章 37 節）、しもべとして生きられたのです。

(13)「あなたがたはわたしを先生、また主と呼ぶが、それは正しい。わたしはそのとおりである。(14)それで、主であり先生であるわたしがあなたがたの足を洗ったのであるから、あなたがたもまた、互いに足を洗うべきである。(15)わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、わたしは模範を示したのである。(16)まことに、まことに、あなたがたに言う。しもべはその主人にまさるものではなく、遣わされた者も遣わした者にまさるものではない。」（ヨハネ 13 章 13-16 節）

主は、この世に生きるとはどういうことかを知っておられます。そして、神にかなった

生き方をするとはどういうことか、悪しき者、その目に見える・見えない配下の者たち、そしてその邪悪な世の体制が、私たちに投げかけてくるあらゆる抵抗を押し分けて進むには、何が必要かを知っておられます。主がそれを知っておられるのは、ご自身がそれを成し遂げられたからです。しかも、私たちには到底耐えられないほどの、また想像することさえできないほどの反対に直面しながら、それを成し遂げられたのです。主はこれを、私たちのために行われました。すなわち、完全ないけにえとなり、十字架の暗闇の中で死なれることによって、私たちのすべての罪を取り去るためでした。それこそが、私たちが救われる唯一の道でした。もし私たちが、神が私たちをどれほど愛しておられるのかについて疑問を抱くことがあるなら、十字架を思い起こすだけで十分です(ヨハネ 15 章 13 節; エペソ 2 章 4-10 節; 第一ヨハネ 3 章 1 節)。私たちの主がその生涯を通して、そしてその終わりに至るまで受けられたすべての苦しみは、単に耐え抜くためではなく、**私たちを救う**ためであったのです。

> 信仰の創始者であり完成者であるイエスから目を離さないでいよう。この方は、**ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、十字架を忍び、**その恥をものともせず、神の御座の右に着座されたのである。(ヘブル 12 章 2 節)

私たちのためにすべてを捨てられ、しかもご自身のまったく比類のない苦しみを通して、この世で私たちが何を経験しているのかを身をもって知っておられる主が、どうして、主の「喜び」である私たちに対して、最も深く、完全な同情を抱くことができないでしょうか。主に属する私たちは、この大切な原則を常に心に留めておく権利があり、また義務と責任があります。とくに、自分をあわれみたくなるときにはなおさらです。そのとき、主が私たちのために何を耐えられたのか、そしてなぜそれを耐えられたのかを思い起こすべきです。そして、私たちがいま経験しているどのような苦しみについても、主がその痛みを知っておられ、最終的には私たちの完全な益のためにすべてを働かせておられるという、確かな信頼と信仰を持つべきです。

> (1)「あなたがたは心を騒がせてはならない。神[御父]を信じ、またわたしをも信じなさい。(2)わたしの父の家には住まいが多い。もしなかったなら、あなたがたに言っておいたであろう。わたしはあなたがたのために場所を備えに行くのである。(3)そして、行ってあなたがたのために場所を備えたなら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。わたしのいる所に、あなたがたもいるためである。」(ヨハネ 14 章 1-3 節)

私たちは、神を愛する者たち、すなわち神のご計画にしたがって召された者たちのためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを知ってい

る。(ローマ 8 章 28 節)

(38)わたしは確信している。死も命も、御使いも支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、(39)高いものも低いものも、その他どんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできないのである。(ローマ 8 章 38-39 節)

罪をおかされなかった:

(1)**言**[イエス・キリスト]**は初めに存在しておられ**、言は神[御父]と相互の交わりの中にあり、言は神であった。(2)この方は初めに神とともに存在し、相互の交わりを持っておられた。(3)すべてのものはこの方によって存在するに至り、存在するに至ったもので、この方によらずに存在するに至ったものは一つもない。(4)この方のうちにいのちがあり、このいのちは人の光であった。(ヨハネ 1 章 1-4 節)

イエス・キリストは神です(イザヤ 40 章 3 節; ローマ 1 章 4 節; マタイ 22 章 41-46 節, 28 章 19 節; ルカ 1 章 35 節, 5 章 20-21 節; ヨハネ 1 章 1-18 節, 5 章 18 節; 第二コリント 13 章 14 節; コロサイ 1 章 15-20 節, 2 章 9 節; ヘブル 1 章 3 節)[24]。主は常に神であり、これからも永遠に神であられます。主が神でなくなるということは、決してあり得ません。しかし同時に、イエス・キリストは処女降誕以来、真実の人間でもあられます[25]。これは、他のいかなる存在にも見られない、主に特有の事実です。

そして**言は肉体となり**、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた。(ヨハネ 1 章 14 節)

イエスが処女によって宿り、生まれなければならなかったのは、堕落の時にアダムとエバが得た罪の性質が、男性の系統を通して受け継がれるからです(ローマ 5 章 12 節)[26]。主イエス・キリストは、その誕生以来、完全に人であり、神であると同時に、真の人でもあられます。主は人として、罪なく生まれました――そのように生まれた唯一の

---

[24] BB 第 4 部 A「キリストについての研究」.I.1.「イエス・キリストは真に神です」を参照してください。

[25] BB 第 4 部 A「キリストについての研究」.I.2.「イエス・キリストは真に人間」を参照してください。

[26] BB 第 4 部 A「キリストについての研究」.I.5.f.3.「処女懐胎の必要性」を参照ください。

人間であり、終わりまでその無罪を保たれました。主はそうでなければなりませんでした。そうでなければ、私たちのだれ一人として救われることはなかったからです。イエスは、私たちに代わって霊的死をもって私たちの罪を取り除くために、完全で罪のないいけにえでなければならなかったのです（ヨハネ 1 章 26 節, 1 章 39 節; 第一ペテロ 1 章 19 節）。イエスは決して罪を犯されませんでした。また、罪に抵抗することにおいても（あるいは、私たちが救われるために人として行わなければならなかったすべての積極的な務めを果たすことにおいても）、その神性から直接の助けを受けることはありませんでした。私たちの完全ないけにえとなるために、主はこの戦いを、真理に従うことと、聖霊の助けによって、私たちと同じ方法で戦わなければならなかったのです。

> (5)**あなたがたも、キリスト・イエスのうちにあったこの思いを持ちなさい。**(6)**キリストは、すでに神のかたちで存在しておられたので、神と等しいことは、しがみついているべきものとはお考えにならなかった。**(7)**それ**[すでに持っておられた神と等しい神性]**にもかかわらず、ご自分の地位を捨て、奴隷のかたちを取り、人間の姿で生まれ、**(8)**ご自分を低くして、死に至るまで、しかも**[私たちすべてのための]**十字架の死に至るまで従順となられた。**（ピリピ 2 章 5-8 節）

主が初臨において、（私たちの罪を負うにふさわしい方となられるために）その人性においてご自身の神性を用いることを控えられたことは、神学ではケノーシス（自己無化）の教理と呼ばれます[27]。イエス・キリストは宇宙において神であると同時に人である唯一のご人格であり、人性と神性の両方を有し、その人性の誕生以来、そのようなお方であられます。私たちが救われるためには、主はそのようなお方でなければならず、また、自由意志を与えられた被造物が永遠のいのちにあずかるためには、そのようなお方とならなければなりませんでした[28]。創造を開始することは、十字架を必然のものとしたと言っても言い過ぎではありません。したがって十字架は、神が行ってこられたすべてのこと、また造られたすべてのものの土台であり続けてきたのです[29]。この事実を踏まえれば、キリストが「罪を犯すことがあり得たかどうか」という神学的議論を重ねる必要はありません。私たちの文脈の聖句が保証しているとおり、主は「あらゆる点で…私たちと同じように」誘惑を受けられたにもかかわらず（ヘブル 4 章 15 節）、罪を犯され**ませんでした**[30]。主は、罪を除けば、私たちと同じ真の人であり、私たちと同じ自由意志を

---

[27] BB 第 4 部 A「キリストについての研究」.I.5.e.「位格的結合とケノーシス」を参照ください。

[28] これらの諸問題については、『サタンの反逆』シリーズにおいて論じられています。

[29] BB 第 4 部 B「救済論」I.「あなたを救う神のご計画」を参照してください。

[30] すなわち、ノン・ポッセ・ペッカーレ／ポッセ・ノン・ペッカーレ（non posse peccare / posse non peccare）、「罪を犯すことができない／罪を犯さないでいることができる」という意味です。この議論は、伝統的神学がしばしば、神の実際のご計画の中では起こり得ない仮定的問題を論じる傾向を

持っておられました。しかし、他のすべての人間が歴史の初めから終わりまで、少なくともある程度は自分の願いに従って自由意志を用いてきたのに対して、主だけは、ご自分の自由意志を自らの欲求に従わせることなく、最初の息から最後の息に至るまで、御父の御心に対する応答において完全であられました[31]。

わたしは自分からは何もすることができない。聞くままにさばくのである。そして、わたしのさばきは正しい。わたしは自分の意志を求めないで、わたしをつかわされたかたの御意志を求めるからである。(ヨハネ 5 章 30 節)

わたしが天から下ってきたのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをつかわされたかたの御意志を行うためである。(ヨハネ 6 章 38 節)

わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、わたしは模範を示したのである。(ヨハネ 13 章 15 節;参照. ヨハネ 14 章 15 節, 14 章 23-24 節)

私たちは、この復活前の世にあって決して完全にはなりません。しかし、主が完全であられたことを、私たちは感謝することができます。そうでなければ、私たちは失われていたからです。主の罪のなさは、主が私たちの経験していることを正しく理解できないという意味ではありません。むしろその反対です。主はご自身の実際の経験によって、私たちよりはるかに深く理解しておられます。

わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。(マタイ 11 章 29 節)

(2)信仰の創始者であり完成者であるイエスを見つめなさい。彼は、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、十字架の恥を軽んじて忍び、神の御座の右に着座された。(3)罪人たちからの激しい反抗を耐え忍ばれたその方のことを思いなさい。あなたがたが**心を疲れさせて落胆しないためである。**(ヘブル 12 章 2-3 節)

持ち、その結果として聖書のより大きな真理を見落としてしまうという問題を、多くの点で説明しています。イエスは罪を犯されませんでした。もし仮に罪を犯しておられたなら、神のご計画そのものが存在せず、これらすべては存在していなかったことになります。以上によって証明されます(Q.E.D.)。

31 BB 第 4 部 A「キリストについての研究」.I.「キリストの生涯」を参照してください。

十六節

それゆえ私たちは、恵みの御座[父の御座]に、確信をもって大胆に近づこうではないか。そうすれば、私たちは[その]あわれみを受け、また[その]恵みを得て、必要なときの助けを受けることができるのである。(ヘブル 4 章 16 節)

現在、天の御父は第三の天にある王の御座に着座しておられ、この汚れた世界から隔てられつつ、王の王、主の主であるイエス・キリストを通して、悪魔とその勢力との現在の闘争が解決へと導かれていく、そのご計画の進展を統べ治めておられます。

(2)すると私はすぐに御霊に置かれ、見よ、一つの御座が[第三の]天に据えられており、[ある]お方が[その上に]着座しておられた。(3)その御座に着座しておられるお方は、碧玉や赤めのうの宝石に似たご様子であられた。(黙示録 4 章 2-3 節)

これまで見てきたとおり、サタンの反逆の結果として宇宙がさばきによって荒廃させられる以前には、神の本来の神殿、王宮、すなわちご臨在の本拠は、第三の天にあったのではなく、この地上にありました。

私は見ていると、いくつかの王座が据えられ、年を経たる方(すなわち御父)が座に着かれた。その衣は雪のように白く、その頭の髪は混じりけのない羊毛のようであった。その御座は火の炎であり、その車輪は燃える火であった。(ダニエル 7 章 9 節)

上の箇所から(また聖書の他の多くの箇所からも[32])推測できるように、御父の御座に車輪があるのは、それが戦いのための器具、すなわち四つのケルビムによって戦場へと運ばれる戦車であるからです(エゼキエル 1 章 4-26 節, 10 章 6-17 節; 参照. イザヤ 6 章 1-6 節; 黙示録 4 章 6 節, 4 章 8 節, 4 章 9 節, 5 章 6 節, 5 章 8 節, 5 章 11 節, 5 章 14 節, 6 章 1 節, 6 章 6 節, 7 章 11 節, 14 章 3 節, 15 章 7 節, 19 章 4 節)[33]。これらの重要な事柄については、他の箇所で詳しく扱われていますので、ぜひそち

---

[32] 「来たる艱難期」第 2 部 B.「艱難期の天の前奏曲」所収「御座」の項を参照してください。

[33] 聖書の基礎第 2 部 A「天使論」.II.9.3.1.「ケルビム」を参照してください。契約の箱の贖いのふた(これはこの戦車を象徴的に表すものです)には、金のケルビムが飾られてい

らを参照されることをお勧めします[34]。本研究との関連で決定的に重要なのは、キリストにある信者の祈り――今取り上げている聖句が扱っている主題――は、私たちが今まさに関わっているこの闘争を離れては、正しく理解することが**できない**という点です。祈りは武器です。現代の軍事用語で言えば、「火力支援」を要請することに相当します。この百年ほどの間におけるアメリカの戦争経験について、ある程度でも知識のある人であれば、支援兵科、すなわち戦車、砲兵、艦砲射撃、航空支援などが、この国のあらゆる軍事行動において果たしてきた役割の重要性を理解しているでしょう。勝利においても（そして敗北においてさえも）、こうした支援は長年にわたり、敵と接触している歩兵の命を守る上で重要な要素であり、場合によっては決定的な要素であり続けてきました。

> (1)小羊が第七の封印を解いたとき、天にはおよそ半時間ほどの静けさがあった。(2)そして私は、神の御前に立つ七人の御使いを見た。彼らには七つのラッパが与えられた。(3)また、別の御使いが金の香炉を持って来て祭壇のそばに立った。そして、多くの香が彼に与えられ、御座の前にある金の祭壇の上で、すべての**聖徒たちの祈りのために、**それをささげるようにされた。(4)その香の煙は、**聖徒たちの祈りとともに**、御使いの手から神の御前に立ち上った。(5)それから、その御使いは香炉を取り、祭壇の**火で**それを満たして地に投げつけた。すると、雷鳴と声と稲妻と地震が起こった。(黙示録 8 章 1-5 節)

上の箇所が艱難期の開始に関連して、祈りに応答して地に火が投げ下ろされることを示しているのと同様に、私たち信者にも、自分たちがどのような苦難の中に置かれることがあろうとも、いつでも神よりの助けを自分たちの支援として呼び求める大きな権利と特権が与えられています。とりわけ、上の箇所に見られるように、自分たちのいのちそのものが脅かされる状況に直面するとき、私たちの願いに対する神の応答が、文字どおり「火のような」劇的なものとなることも、前例のないことではありません（詩篇 18 篇 6-17 節）。そしてそのようなことは、艱難期の期間、とりわけその終末において、しばしば起こることになります。

> (5)[あなたがたが耐え忍んでいるこれらの苦難は]、神の義なるさばきのしるしであり、あなたがたがそのために苦しんでいる神の御国にふさわしい者と、神が[さばきにおいて]認めておられることを示しています。(6)というのも、あなた

ます。

[34] すなわち、『サタンの反逆』シリーズ第 1 部、『来たる艱難期』シリーズ第 2 部 B、『聖書の基礎』シリーズ第 2 部 A 部を指します。

がたに苦難を与えている者たちに、神が苦難をもって報いられることは正しいことであり、(7)また、苦しめられているあなたがたには、天からその力ある御使いたちとともに現れる私たちの主イエスの顕現のときに、私たちとともに安息を与えられるからです。(8)そのとき主は、神を知らない者たち、また私たちの主イエスの福音に従わない者たちに、**火の炎のうちに**復讐をもって報いられます。(第二テサロニケ 1 章 5-8 節)

しかし、軍事的火力はしばしば粗雑な手段となり得るものであり――しかもあまりにも頻繁に、誤って味方の部隊の上にさえ降り注ぐことがあります――、祈りはそれよりもはるかに精密であり、しかも完全な「支援連絡将校」によって指揮されるという、さらに大きな利点を持っています。すなわち、神は私たち自身よりもはるかによく、私たちに何が必要かを知っておられるのです。

(7)また、祈るとき、異邦人のようにくどくどとことばを重ねてはならない。彼らは、ことば数が多いことで聞き入れられると思っているからである。(8)だから、彼らのようであってはならない。**あなたがたの父は、あなたがたが求める前から、何が必要であるかを知っておられるからである。**(マタイ 6 章 7-8 節)

神が私たちの祈りにお答えになるその応答は、常に完全であり、決して私たちを害することはありません。たとえ私たちが、少なくとも部分的な無知のゆえに具体的に求めているものが、実際には私たちにとって最も必要でないものであるような場合であっても、そうなのです。

(7)求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば見いだす。たたきなさい。そうすれば開かれる。(8)**だれでも求める者は受け、**探す者は見いだし、たたく者には開かれる。(9)あなたがたのうちで、自分の子がパンを求めるとき、石を与える者がいるだろうか。(10)また、魚を求めるのに、蛇を与える者がいるだろうか。(11)このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもには良い贈り物を与えることを知っている。それならなおのこと、天におられるあなたがたの父は、**求める者たちに良いもの**を与えてくださらないことがあろうか。(マタイ 7 章 7-11 節)

「求める者はみな受ける」ということばは、主イエス・キリストご自身から出た原則であり、私たちはこれを決して心から失ってはならず、常に**信仰をもって**これに拠り頼むよう努めるべきです。というのも、神のことばは、私たちが今まさに置かれているこの戦いにおいて用いる信者の鋭い剣であり(エペソ 6 章 17 節; ヘブル 4 章 12 節)、また祈りは

比類のない神からの火力を持つ武器であるからです（それゆえ両者は聖書において結び付けられています；参照．エペソ 6 章 17-18 節；ヘブル 4 章 12-16 節）。しかし、みことばと祈りの両方を用いる**鍵**は、信者の**信仰**にあります。みことばは信じられてこそ御霊にとって有効となり、また祈りも、聞き入れられていると信じることによってこそ、その成就を見ることができるのです。

> (21)そこでイエスは彼らに答えて言われた。「まことに、あなたがたに言う。もし信仰を持ち、疑わないなら、あなたがたは、いちじくの木になされたことを行うだけでなく、この山に向かって、『取り去られて海に投げ込まれよ』と言えば、そのとおりになるのである。(22)また、祈りにおいて求めることは何でも、**信じて**求めるなら、受けるのである。」(マタイ 21 章 21-22 節)

たとえ私たちが求めている応答が直ちには与えられない場合であっても、主が私たちの声を確かに聞いておられ、私たちが忍耐し続けるなら必ずお答えくださるという**信仰に立って**、祈りにおいて願いを主の御前に差し出し続けることに、決して落胆したり気落ちしたりしてはなりません。

> (1)イエスは、いつでも祈るべきであり、**失望してはならない**ことを弟子たちに示すために、たとえを話された。(2)こう言われた。「ある町に、神を恐れず、人をも顧みない裁判官がいた。(3)その町に一人のやもめがいて、彼のもとに来ては、『私の相手をさばいて、私の正しさを認めてください』と願い出ていた。(4)彼はしばらくの間は聞き入れなかったが、その後こう言った。『私は神を恐れず、人をも顧みないが、(5)このやもめが私をわずらわせ続けるので、この女の正しさを認めてやろう。そうしたら、もう私をわずらわせることはなくなるだろう。』」(6)それから主は言われた。「不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。(7)まして神は、昼も夜もご自分に叫び求めている選ばれた者たちのために、さばきを行ってくださらないことがあろうか。彼らのことを、いつまでも引き延ばしておかれるだろうか。(8)あなたがたに言うが、**神は速やかに彼らのためにさばきを行ってくださる。**しかし、人の子が来るとき、地上に**信仰**を見いだすだろうか。」(ルカ 18 章 1-8 節)

祈るときに「信じて」求める必要があることに加えて、正しい動機をもって求める必要があることもまた確かです。すなわち、私たちはこの一時的な世にあって、主イエス・キリストの兵士として、主が私たちに戦うよう与えられた戦いを戦おうとしている者として求めるのであり、サタン的なこの世の友として、ただ自分を満足させようとするのではありません（ヤコブ 4 章 4 節；第一ヨハネ 2 章 15-17 節）。誤った動機で求めておきなが

ら、聞き入れられることを期待することはできません（ヤコブ 4 章 2-3 節）。また、心のうちに罪を抱えたままで、主が私たちに耳を傾けてくださることを期待することもできません（詩篇 66 篇 18 節）。私たちのだれ一人として、動機においても、また日々の歩みにおいても完全ではありません（そして、この戦いにおいて主との交わりの中にとどまり続けるために、私たちは常に罪の告白の祈りを用いる必要があります。第一ヨハネ 1 章 9 節；参照．詩篇 32 篇 5 節）。さらにまた、私たちが霊的に前進している度合いが大きいほど、それに応じて、より大きな応答を期待することができるのも事実です。

（16）…義人の祈は、大いに力があり、効果のあるものである。（17）エリヤは、わたしたちと同じ人間であったが、雨が降らないようにと祈をささげたところ、三年六か月のあいだ、地上に雨が降らなかった。（18）それから、ふたたび祈ったところ、天は雨を降らせ、地はその実をみのらせた。（ヤコブ 5 章 16 後半-18 節）

偉大な信仰者たちの祈りが大きな実を結ぶ理由の一つは、彼らが正しい仕方で祈っているからです。すなわち、主との交わりの中にとどまり、聖霊に満たされた状態で祈っているからです（エペソ 6 章 18 節；ユダ 1 章 20-21 節；参照．ローマ 8 章 26-27 節；ピリピ 1 章 19 節；エペソ 2 章 18 節）。そしてもう一つの理由は、主に近ければ近いほど、その人が祈り求める内容そのものが、実際に神の御心にかなっている可能性が高くなるからです。

わたしたちが神に対していだいている確信は、こうである。すなわち、わたしたちが何事でも**神の御旨に従って**願い求めるなら、神はそれを聞きいれて下さるということである。（第一ヨハネ 5 章 14 節）

私たちは皆、おそらく、神に何かを求め、その祈りがまさに求めたとおりの形で、しかもほとんど直ちに答えられるという素晴らしい祝福を経験したことがあるでしょう（創世記 24 章 12-15 節；使徒行伝 12 章 1-17 節参照）。しかし、それが常に――むしろ多くの場合――キリスト者の経験であるわけではありません（ダニエル 10 章 12-14 節参照）。

（8）しかし、愛する者たちよ、この一事を忘れてはならない。主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようである。（9）主は、その約束について、ある人々が遅いと考えているように遅れておられるのではない。かえって、一人も滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに至ることを望んでおられ、あなたがたに対して忍耐しておられるのである。（第二ペテロ 3 章 8-9 節；参照．詩篇 90 篇 4 節参照）

この上記の箇所は、主の再臨に関して忍耐を勧めているものではありますが、その原則は祈りにも同様に当てはまります。ソドムは、アブラハムがそれを滅ぼさないよう主に願い求めたにもかかわらず、滅ぼされました。しかし彼が本当に願っていたのは、自分の甥が救われることであり、神はその願い――その願いの背後にあった彼の心の思い――をかなえてくださいました（創世記 18 章 23 節-）。また、アブラハムの最も切実な祈りは、世継ぎを与えられることでした。そして彼は、多くの嘆願の祈りに対する答えとしてイサクを与えられました――しかし、この願いが実現するまで、彼は百歳になるまで待たなければなりませんでした。主の御答えを待つこと、そして主が最も完全な方法で、最も完全な時に答えてくださると信じて待つ必要があることは、この霊的戦いにおいて、信者がしばしば直面する共通の試練です。たとえ、自分が望むよりもはるかに長く待たなければならない場合でも、あるいは願ったとおりの形ではない答えを受け取る場合でも（しかし、よく考えてみれば、それは実際にはより良い答えなのですが）、主が祈りに答えてくださると信頼すること――それ自体が、主の栄光を現す信仰であり忠実さなのです。

> (5)それから[主は][アブラハム]を外に連れ出して言われた。「さあ、天を見上げて、もし数えられるなら星を数えてみよ。」そして彼に言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」(6)[アブラハム]は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。（創世記 15 章 5-6 節）

> 神が低地の町々を滅ぼされたとき、神はアブラハムを覚えておられ、ロトが住んでいた町々を滅ぼしたその破滅の中から、ロトを救い出された。（創世記 19 章 29 節）

ですから私たちは、祈りについて確信を持っています。主に対して、そして主の完全な真実と忠実さに対して確信を持っているのです。主は――幾度も――私たちの祈りに答えると約束しておられます。そしてその完全なご誠実さゆえに、主が約束されたことを必ず実行してくださると、私たちは心から知り、信じています。たとえ今なお祈りが答えられていないように見える場合でも、信仰によって、それが必ず答えられることを私たちは知っています。しかも、最もふさわしい時に、そして正確に最善の方法でです――たとえその成就の時期や方法が、私たちの予想を超えるものであったとしても。神が私たちのためになさることは、すべてあらゆる意味で私たちの益のためなのです（ローマ 8 章 28 節）。それには、私たちの祈りへの応答も含まれています。もしそうでないなら、なぜ聖書はこれほどまでに祈りを勧め、神が私たちの祈りを聞き、答えてくださるという確信を繰り返し与えておられるのでしょうか。主は「恵みを施そうと待っておられ

る」（イザヤ 30 章 18 節 /NIV 訳）のです。主を信じると告白する私たちの務めは、どのような状況にあっても主を完全に信頼していることを、実際に示すことです。そして、これまで主が何度も誠実に祈りに答えてくださったことを、決して忘れないことです。

主は、ご自分を呼び求めるすべての者に近くあられる。真実をもって主を呼び求めるすべての者に近くあられるのである。（詩篇 145 篇 18 節/NKJV 訳）

彼らが呼ばわる前に、わたしは答え、彼らがまだ語っているうちに、わたしは聞く。（イザヤ 65 章 24 節/NKJV 訳）

そのとき、あなたがたはわたしを呼び、来てわたしに祈る。そして、わたしはあなたがたに耳を傾ける。（エレミヤ 29 章 12 節/NKJV 訳）

それゆえ、あなたがたに言う。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになる。（マルコ 11 章 24 節/NKJV 訳）

あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、わたしはそれを行う。それは、子において父が栄光を受けられるためである。（ヨハネ 14 章 13 節 /NKJV 訳）

あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、望むことを求めるがよい。そうすれば、それはかなえられる。（ヨハネ 15 章 7 節/NKJV 訳）

あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのである。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るためである。また、あなたがたがわたしの名によって父に求めることは何でも、父が与えてくださるためである。（ヨハネ 15 章 16 節/NKJV 訳）

その日には、あなたがたはわたしに何も尋ねないであろう。まことに、まことに、あなたがたに言う。あなたがたがわたしの名によって父に求めることは何でも、父はあなたがたに与えてくださるのである。（ヨハネ 16 章 23 節/NKJV 訳）

祈りに専念し、感謝をもって目を覚まして祈り続けなさい。（コロサイ 4 章 2 節 /NKJV 訳）

そして、私たちが何を求めても神が聞いてくださると知っているなら、私たちは神に願い求めたその願いがすでに与えられていることを知っているのである。（第一ヨハネ 5 章 15 節/NKJV 訳）

生ける神の息子・娘として、またキリストのからだ、そして花嫁の一員として私たちは御父と御子に対して、正当な事柄であれば何であれ、願い求める権利を持っています。そして私たちの祈りは聞かれており、必ず答えられるという確信を常に持つべきです。したがって祈りは、私たち自身の必要という面だけでなく、キリストにある兄弟姉妹に仕える働きという面においても、キリスト者の生活の大きな部分を占めています。祈りは、ある特定の信者に特別に委ねられる奉仕である場合もあります（すなわち、主への奉仕において、与えられた賜物と召しの重要な一部として、祈りに専念するよう召されている場合です）。しかし同時に、それはすべての信者が日々あずかるべき権利であり、特権であり、責任でもあります。そしてすべての信者は、この務めに絶えず取り組むべきなのです。

また、よく言っておく。もしあなたがたのうちのふたりが、どんな願い事についても地上で心を合わせるなら、天にいますわたしの父はそれをかなえて下さるであろう。（マタイ 18 章 19 節/NKJV 訳）

わたしたちは、もっぱら祈と御言のご用に当ることにしよう」。（使徒行伝 6 章 4 節）

あなたがたもまた、わたしたちのために祈りによって共に助けてくれている。それは、多くの人々によって、わたしたちに与えられた恵みについて感謝がささげられるためである。（第二コリント 1 章 11 節/NKJV 訳）

同時に、わたしたちのためにも祈ってほしい。神が御言葉のために門を開いてくださり、わたしがキリストの奥義を語ることができるように。わたしはその奥義のゆえに鎖につながれているのである。（コロサイ 4 章 3 節/NIV 訳）

兄弟たち、わたしたちのためにも祈ってほしい。（第一テサロニケ 5 章 25 節/CSB 訳）

ですから、私たちの祈りがさえぎられている、聞かれていない、あるいは答えられていないと感じるとき（哀歌 3 章 44 節）、もし自らを省みて自分に落ち度がないのであれば、私たちはヨブのようにしてはならないことを思い起こす必要があります。ヨブは神の

偉大な人であり、その忍耐は伝説的でしたが、それでもなお最後の瞬間に耐えきれず、答えが来る直前にその忍耐を失ってしまいました。そうではなく、たとえ自分の目でそれをまだ見ていなくても、私たちは神の救いを信仰によって確信していなければなりません。神は生きておられ、そして必ず私たちに答えてくださることを知り、この世が何と言おうとも、その確信に立つ必要があります。

> (27)それからトマスに言われた、「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。あなたの手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。**不信仰であってはならない。信じる者となりなさい**」。(28)トマスは答えて言った、「わが主、わが神よ。」(29)イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見たから信じたのである。見ないで信じる者は幸いである。」(ヨハネ 20 章 27-29 節/NKJV 訳)

神である御父の御座――すなわち、イエス・キリストに属する者として、私たちが今や直接近づき、願い求める権利を与えられているその御座(エペソ 2 章 18 節, 3 章 12 節)は、「**恵み**の御座」と呼ばれています。恵みとは、これまで学んできたように、神のご好意[35]、すなわち、私たちがそのご好意をいかなる意味でも受けるに値しなかったし、また決して値し得ないにもかかわらず、なお私たちに向けられる神の善意と慈しみに満ちた御業のことです(ローマ 4 章 1-4 節)。私たちが神の恵みを受け、恵みの御座の前に出る権利を持つのは、イエス・キリストの十字架ゆえです。十字架は、私たちが関わっているこの闘争における大いなる勝利であり、私たちが受けるあらゆる祝福の土台です。それはまた、この勝利を成し遂げられた私たちの救い主ご自身が、神のご計画全体の上に据えられている岩であり礎石であられるのと同じです。恵みとは十字架です。そして、罪と死とに打ち勝たれたこのお方を信じる者であるがゆえに、私たちは、その勝利の中の勝利に続く務めにあずかるという大いなる栄誉を与えられています。私たちは今、悪魔の領域のただ中にあって、イエス・キリストに栄光を帰し、やがてキリストのさばきの座において主が私たちにお与えになる報いとして、永遠の祝福へと帰結する霊的戦いを勝ち取っているのです(ローマ 14 章 10-12 節; 第二コリント 5 章 10 節)[36]。祈りはこの戦いにおける決定的な武器です。ですから信者は、あらゆる機会において、それを用いることを決してためらうべきではありません。

> わたしが御子の福音において、霊をもって仕えている神が証人である。わたしは祈りの中で、絶えずあなたがたのことを覚えている。(ローマ 1 章 9 節/NKJV

---

35 ヘブル人への手紙 2 章 9 節、およびペテロシリーズ#12 も参照してください。

36 BB 4A:キリストについての研究. I .2.d.「キリストが真の人性を取られたことは、私たちの仲介者となられるために必要であった」を参照ください。

訳）

（18）あらゆる祈りと願いをもって、すべての時に御霊によって祈りなさい。そのために目を覚ましていなさい。すべての聖徒のために、忍耐を尽くして祈り続けなさい。（19）また、わたしが口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるように、わたしのためにも祈ってほしい。（エペソ 6 章 18-19 節/NIV 訳）

わたしたちは、あなたがたのために祈るとき、いつもわたしたちの主イエス・キリストの神であり父である方に感謝している。（コロサイ 1 章 3 節/NKJV 訳）

絶えず祈りなさい。（第一テサロニケ 5 章 17 節）

そこで、わたしはまず第一に勧める。すべての人のために、願い、祈り、とりなし、感謝をささげなさい。（第一テモテ 2 章 1 節/NKJV 訳）

わたしは、先祖たちがそうしたように、清い良心をもって仕えている神に感謝している。そして夜も昼も絶えず祈りの中であなたのことを覚えている。（第二テモテ 1 章 3 節/NKJV 訳）

聖書においても、また私たち自身のキリスト者としての経験においても、これほど多くの、神が私たちの祈りに答えてくださるという積極的な保証と、祈るようにとの励ましとを与えられていながら、この重要な武器を、私たちの武具の中に放置してほこりをかぶらせておくなどということが、どうしてあり得るでしょうか。というのも、私たちの本文聖句において、私たちは祈りを通して神の助けを求めるよう、直接勧められているからです。「それゆえ私たちは、恵みの御座[父の御座]に、**確信をもって**大胆に**近づこうではないか**。そうすれば、私たちは[主の]**あわれみを受け**、また[主の]**好意**[恵み]を得て、**必要なときの助け**を受けることができるのである。」（ヘブル 4 章 16 節）。そしてその文脈において、直前の節では、イエス・キリストが、私たちが経験している試練や苦難に同情することのできる方であると告げられています。主は絶えず祈る人の模範を私たちに示されました（ヘブル 5 章 7 節; マタイ 14 章 23 節; マルコ 6 章 46 節; ルカ 6 章 12 節, 9 章 28 節参照）。さらに主は、私たちの弁護者として、御父の恵みの御座の前において、私たちのあらゆる願いを支えてくださるお方でもあります（ローマ 8 章 34 節; 第一ヨハネ 2 章 1 節; ヘブル 7 章 25 節; ヨブ 16 章 19 節; ヨハネ 14 章 13-14 節; 第一テモテ 2 章 5 節参照）。ですから私たちは、祈りにおいて御父のもとへ「大胆に」進み出ることを、決してためらってはなりません。私たちの願いを、私たちのために死

んでくださったお方、そして今この戦いにおいて私たちが従っているそのお方の御手に、直接ゆだねるのです。

> 何事でもわたしの名によって**わたしに**願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう。（ヨハネ 14 章 14 節/NIV 訳）

最後に、私たちは常に感謝する者でありたいものです。何が起ころうとも、主はご自分を愛する者たちのために、すべてを益となるように働かせておられることを覚えているべきです（ローマ 8 章 28 節）。

> そしてすべてのことにつき、いつも、わたしたちの主イエス・キリストの御名によって、父なる神に**感謝し、**（エペソ 5 章 20 節）

> 何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、**感謝**をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。（ピリピ 4 章 6 節）

> すべてのことについて**感謝しなさい。**これが、キリスト・イエスにあってあなたがたに対する神の御心である。（第一テサロニケ 5 章 18 節）

[ヘブル人への手紙第 5 章へ]